

---

# バカとクロスとつたなき物語

三月語

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとクロスとつたなき物語

### 【Nコード】

N9986J

### 【作者名】

三月語

### 【あらすじ】

「バカとテストと召喚獣」を元にしたクロス小説！  
イメージ崩壊したくない人は回れ右することを推奨します。

ただ今、次の事を募集中！

1．バカテスト 問題と正答

1 感想に書いてください。

## キャラ説明（Fクラス編その？）

キャラ紹介（Fクラス編その？）

キラ・ヤマト（SEED） 16、

実力、Aクラス主席確実。

女子に好かれやすい。

召還獣は自身のBJを着た。

腕輪はH・M・F・Bとミーティア換装。たまに無双化して暴走する。

高町なのは（なのは） 16、

ルカのことが好き。理数系は強いが後からつきし。

召還獣はRHセツトアップ状態、腕輪はSLB。魔王化する。

フェイト・T・ハラOWN（なのは） 16、

キラのことが好き。そのためトンデモ行動をすることも。

召還獣はバルディッシュセツトアップ状態。腕輪はジェットザンバ  
ー。雷光一閃！

アリシア・T・ハラOWN（なのは） 16、

フェイトの双子の姉。キラのことが好きだが、フェイトよりは暴走しない。

召還獣はストライクセツトアップ。腕輪はフェイトと同じ。

レオン（ピカ、）

昔、「黄刃纏いし死神」と恐れられた。実際お調子もの。

実力はAで召還獣の扱いもなかなかのもの。

召還獣は死神兵装。腕輪は換装、サイズ拡大、晶術詠唱など。無双化を制御できる。

## キャラ紹介（Fクラス編その2とAクラス編）と謝罪

どうも、三月語です。

まず、謝罪を。

いきなりキャラ紹介で始めてすいません！PCがないためPSPで投稿できないかやってて少ない＆紹介ナシになってしまいました。キャラ紹介はSEED、なのは、ととモノ2、TOI、ポケモンしかしません。オリキャラは読めば分かるものばかりにしたためです。ただ、召喚獣は後々紹介します。では、紹介続きです。

### Fクラス

#### レイン（プリン）

昔は「気弱な突撃槍」と呼ばれた。

鉄人が怖い。見たら泣く。召喚獣は重騎士鎧とゲイボルグ。

泉戸このは（ととモノ2、ヒューマン戦士科） 16、

キラのことが好き。実際の实力はBクラス首席。

召喚獣はアルセリオン（武器形状、湾曲刀・双刃）セットアップ状態。腕輪は泉戸流剣術、豪火車の発動。

### Aクラス

アスラン・ザラ（SEED） 16、

キラの親友。はやてに堂々と恋人宣言された（告白済みで）

召喚獣はジャステイス。腕輪はファトゥム01射出、ミィティア化。

ルカ・ミルダ（TOI） 16、

キラ達の親友。しっかりしているが、臆病なところも。实力は本気をだせばキラと同等。

召喚獣は魔神アスラ。腕輪は魔王灼滅刃発動。

八神はやて（なのは） 16、

アスラン好きーな夜天の王。料理得意。

召喚獣はBJセツトアップしたもの。腕輪は広域型魔法発動。

ニコル・アマルフィ（SEED） 16、

アスランとは小学校以来友人。

召喚獣はブリッツ。腕輪はあるが、使わない。フルフェイスによる全強化。

**キャラ紹介（Fクラス編その2とAクラス編）と謝罪（後書き）**

次回から本編、始まります。

次回、プロローグ「全ての始まり、振り分け試験」

2月25日、このはのデバイス・アルセリオンについて追加しました。

## ブログ 「全ての始まり 振り分け試験」 その1（前書き）

三月語です。

また謝罪から始まってすいません。

クロスなのにオリジナルになつてるといふ指摘があつたため修正しました。

ただの記入忘れです。

後、指摘の言葉はもう少し軟らかいものでお願いします。つらいので。



## プロローグ 「全ての始まり 振り分け試験」 その1

（明久）「これが難しいと評判の振り分け試験か・・・確かに難しいけど問題ない・・・この程度なら・・・」

十問に一問は解ける！

当日の朝。

「キラも大変だね、インフルエンザなんて。」

登校中そう言ったのはルカ・ミルダ。彼は友人ー高町なのは、アスラン・ザラ、八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、アリシア・T・ハラオウン、泉戸このは、レオンーと歩いていた。

「うん・・・フェイトちゃんもこのはちゃんもちゃんと試験受けてくれないと思う（がノけどなあ）。」・・・だよねえ・・・」

アスラン、はやてが無理だと口を挟む。

『そんなことない・・・と思う「アホか！（シパン！）」痛い（よゝ、レオン）・・・』

フェイト、このはが否定したようなことを言い、レオンが制裁を与えた。

「二人ともさあ、キラと同じクラスに行きたくないの？」

『・・・』

「・・・あれ？」

「レオン、キらはFクラス確定だよ？」

「・・・Really？」

「レオン君。」

「何？なのは」

「勉強・・・した？」

なのははレオンに然るべきことを聞いた。だが、返ってきた答えは、  
「全くしてない！」

その返答にアリシアは、

「寝るつもりだね？」  
と聞く。

「当然の理なり・・・当然じゃないよ！」だって昨日紛争根絶してきた「ゲームでの話だろ？それ。お前はどうせ深夜までやってたんだろ？」ちよっ、アスラン！」

さも当然だと言うがなのはにつっこまれ、言い訳したらアスランに真実を暴露されるレオン。

数分後、「着いた。」

彼らは、「じゃ、放課後に。」とレオンが言ったのを期に各々別れていった。

ブログ 「全ての始まり 振り分け試験」 その1（後書き）

おかしいところ、ありましたら指摘お願いします。

2月25日、文章に間を開けるといいという助言をもらったので修正しました。それにもない、文章を追加しました。

## プロローグ 「全ての始まり 振り分け試験」 その2

校門にて。

「よし明久、テスト前の小手調べだ！三権分立は・・・えーと・・・  
・「司法」と「立法」ともう一つは何で成り立つか？」

雄二は明久にそう問題をだした。

「ふ・・・あまり僕を見くびらないでくれよ雄二・・・」と明久は返す。

「・・・二つまでは絞れる。」

「ほう（二つ・・・？）」

「「憲法」か「漢方」のどっちかだったはず・・・」  
自信満々にいう明久。

「「行政」だ／よ」

「え？」

「ちょっと心配だからアキ君に私も問題だすね？」

「夏美からも？」

「二酸化炭素の化学式は？」

「CHNL。」

明久は真面目に答えた。

「幼なじみの私でもアキ君がここまでバカなの知らなかった・・・」  
「そんなことないよ、夏美！」

「あ、それじゃウチからも！」

美波が明久に問題をだす。

（うわぁ、追い撃ちだ。）と夏美は思った。

「では基礎問題！ $\text{CH}_3\text{COOH}$ とは何でしょう？」

「・・・・・・・・」

明久は何も言わない。汗もかきはじめた。そして・・・

「（ぷいっ）」

「吉井？」

「・・・・・・・・英語は苦手なんだ。」

「え・・・？これ英語じゃなくて化学「じゃあ僕こっちだから！」  
ちよ、ちよつと吉井！あんた相当ヤバいんじゃない？」

明久が走り去った後、ある疑問を雄二に言った。

「アキ君、Eクラスになれるかなあ？雄二、どう思う？」

「無理だな。」

「やっぱり。」

試験開始5分前。

「なのは、ゴメン！私早退する！」  
「私も！」

「え！？なんで！？」

いきなり早退しようとする二人に驚くのは。

『キラが心配だから！！』

「ちよつとー！二人ともー！」

それを遠くから見ていたレオンとレイン。

「やっぱり。」

「Fクラスが3人に「4人よ。」木下姉か。」

「レオン？姉って？」

「だって秀吉がいるじゃん？」

「あ、そっか。それで、4人って？」

「優が休んだの。」

「なるほど。」

「それで、さっきのは？」

「キラのためにすっ飛んでった。」

「納得したわ・・・」

で、最初に続く。

「20点は堅いな。」

ふらっ・・・カッ！

「ん？姫路さ（ガタン！）姫路さん！？」

「吉井、静かに！」

「でも姫路さんが！」

「姫路、体調が悪いなら保健室に行くか？ただし、試験途中の退席は「無得点」扱いとなるが、それでいいかね？」

「はあっ・・・はあっ・・・」

「ちょ、ちよつと先生！具合が悪くなつて退席するだけでそれは酷いじゃないですか！

「体調管理も実力の内だ。」

「でも！」

「・・・退席・・・します・・・。」

次回 第一問、「結果と紹介と戦争の引鉄<sup>ひきがね</sup>」



## ブログ 「全ての始まり 振り分け試験」 その2（後書き）

次回から第一問が始まります。

それで、バカテストも書いていきますが、第十問で終わらなかった場合、作者にネタがありません。そこでお願いですがバカテストに使える問題を募集します。内容としては、問題と正答を感想に書いていただければありがたいです（正答が解らないと困るので）。あと、携帯で化学式を打つ方法（酸素など）を教えてください！よろしく願います。

2010年3月31日までは木・土・日に更新が出来ません。

2月25日、修正と大幅な追加をしました。

**第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その1（前書き）**

時間ができたので出しました。

3 / 1 サブタイトル直しました。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その1

### 第一問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが調理を始めると問題が発生した。毛のときの問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希・キラ、ヤマトの答え

『問題点・・・マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題だったのですが二人は引っかかりませんでしたね。

レオンの答え

『合金の例・・・Duralumin』

教師のコメント

まさか英語で答えるとは思いませんでした。ただ、他の問題に回答がないのは何故ですか？

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（　すごく強い）　』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

桜咲く道を、見慣れた団体が歩いていた。

「フェイトちゃん、もう済んだことだからウジウジしない！」

「でも・・・」

「そっいえばなのはちゃんは試験の出来、どうなん？」

「Aクラスに行く自信がある！」

「といいけどな。」

「アスラン君！」

校門には鉄人こと西村先生がいた。

『西本先生（鉄人）、おはようございます。』

「皆、おはよう。レオン、鉄人というなと言ってるだろう！これが  
お前らの結果だ。」

ガサガサ・・・

「泉戸、ハラオウン、お前らは本当に信じられないことをしたな。  
何故あんなことを『キラが心配だったからです』・・・全く・・・」

「ルカ君、どうだった？」

「Aだ。なのはは？」

「えつと・・・（ガサガサ・・・ピラッ）にやああああああ！！  
！！？」

「な、なのはちゃん！？どうしたん！？」

「私・・・私・・・っ」

それぞれの結果。

ルカ、アスラン、ニコル、はやて・・・A

なのは、フェイト、アリシア、このは、レオン、レイン・・・F

つまり・・・

「ルカ君とクラス離れたあゝゝ！」

「そして無残にも自信は裏切られたと。」

「アスラン、酷いと思いますよ？」

「レオン、お前テストの間寝てただろう！」

「鉄人、見逃して？」

「ったく、堂々と鉄人と言えるのはお前だけだぞ。そしてレイン、涙目になるな。」

彼らはそれぞれの教室へ向かった。

Fクラス。

「うつわ、ひつど！」

「設備・・・寂しいね。」「うつ・・・」

一人まだ泣いてるが。

「まだ誰もいな「ワシだけじゃ。」秀吉！」

「意外な顔触れじゃのう。そして、なぜ朝から高町が泣いておってハラオウンが慰める、という光景が見られるのじゃ？」

「実は、結果で・・・」

レオンが原因を説明した。

「・・・なんとわかりやすい理由じゃのう・・・」  
秀吉が納得したとき、教室の戸が開いた。

「皆さんおはようござ・・・けほっけほっ。」

「春原さん、風邪、大丈夫？」

「まだ完治とはいえませんが・・・このはちゃん。」  
「どうしたの、優？」

「朝の悲鳴？とこの現状は何なんですか？」

「それは・・・」

現状説明中・・・

「なるほど。大体は・・・けほっ！」

「座った方がいいよ、優、まだ病み上がりでしょ？」  
「そうさせてもらいます・・・」

次回、「結果と紹介と戦争の引鉄」その2

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その1（後書き）

ということで第一問です。その一ですが。

秀吉の翁言葉、はやての言い方に苦労しました。

得にはやて。完全に関西弁でなかったのだ。

次もお楽しみいただけたら幸いです。

次回はついに、キラ・ヤマト登場です！



## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その2（前書き）

そんなわけでその2です。ちなみに第一問の、なので「バカテスト」はありません。

つまり、各問の始めにしかださないわけです。そこをお願いします。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その2

その頃、玄関付近では。

「吉井、遅刻だぞ。」

明久は玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。  
明久が声のした方を見ると、西本教諭が立っていた。

「あ、鉄じ・・・じゃなくて、西村先生。おはようございます。」

明久は軽く頭を下げた挨拶をする。

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ。」

「ん、そうか？」

ちなみに鉄人とは、生徒の間での西村教諭のあだ名で、由来は趣味であるトリアスロンである。

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうか。」

「あ、すいません。えーっと・・・今日も肌が黒いですね。」

「・・・お前には遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重用なのか？」

「そっちでしたか。すいません。」

「まったくお前というやつは・・・いくら罰を与えても全然懲りな

いな。」

西村教諭は溜息混じりにつぶやいた。

「先生。僕は、遅刻はあまりしてないですよ？」

「遅刻は、な。ほら、受け取れ。」

西本教諭が箱から封筒を取り出し、明久に差し出した。宛名の欄には『吉井明久』と、大きく名前が書かれていた。

「あ、どーもです。」

明久は一応、頭を下げながら受け取る。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？こっやっていちいち全員に封筒を渡さずに掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに。」

「普通はそうするんだがな。まあ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってワケだ。」

「ふーん。そういうもんですね。」

明久は適当に相槌を打ちながら封に手をかける。

「吉井、今だから言うがな。」

「はい、なんですか？」

「俺はお前を去年一年見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ。」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、さらに『節穴』なんてあだ名をつけられちゃいますよ?」

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気がついたよ。すまなかった。」

「そういつてもらえると嬉しいです。」

なかなか開かないため、上側を破く。

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった。」

明久は折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『吉井明久・・・Fクラス』

「お前は、正真正銘のバカだ。」

一方。

「・・・ら、起きろ、おい、起きろって!キラ!」

「・・・あれ、ヴィータちゃん?」

「早く起きろ!このままだと遅刻だぞ!」

「本当に!?!ありがとぅ、ヴィータちゃん!」

「ちゃん付けはやめろ！それとアタシはフェイトに頼まれて起こしに来ただけだからな！」

「助かったよ！」

「オメーはまだ病み上がりなんだから無茶すんなよ！」

「わかった！」

その頃明久は。

「・・・なんだろう、このほかデカイ教室は。」

彼は三階にいた。

足を止めて中を覗いてみると、知的女性の代表のような教師がいた。

「あつ！あれはリクライニングシート！？個人エアコンに、冷蔵庫、ノートパソコンまで！」

羨ましがって見ていると誰かが前に行った。

「彼女が代表なのかな？つと、こうしてはいられない。僕も自分のクラスに行かなきゃ。」

明久は走り出さない程度二廊下を急いで進んで行った。

明久がクラスへ向かっている頃、玄関では。

「キラ、お前が最後だ。」

「西村・・・先生・・・、おはよう・・・ございます・・・。」

「試験前日にインフルエンザに罹るとは、哀しいな。ほら、結果『僕はFクラス・・・ですね?』見なくても分かるか。」

「ええ、流石にそれは分かります・・・。」

「全速力で走ったのだろうか?お前はまだ病み上がりなんだから、少し休んでいけ。」

「そう・・・します・・・。」

次回、第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その3

**第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その2（後書き）**

今日中に最低あと？話分だします。

感想、指摘がありましたらお願いします。

**第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その3（前書き）**

第一問その3です。お楽しみください



## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その3

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で明久は少しだけ躊躇していた。

「（遅刻なんてしてきて、皆に悪い印象を持たれたりしないかな・・・嫌なヤツや痛いヤツはいないかな・・・）なんて、考えすぎかな。」

明久は勢いよくドアを開けてから愛嬌たっぷり言い放った。

「すいません、ちょっと遅れちゃいました。」

『早く座れ、このウジ虫野郎／凡骨！』

台無し・・・

『聞こえないのか？ああ？』

「雄二、レオン、何やってんの？」

教壇に上がっていたのは明久の悪友、坂本雄二とレオンだった。

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた。」  
「僕はノリで。あれのせいで少し鬱になってね。ふいふ。スッキリ。」

明久が見た方には・・・

「なんでダメだったの〜!？」

「な、なのは、落ち着こ? HR 始まるよ?」

「ルカ君と同じクラスがよかった〜! フェイトちゃんが羨ましいよ  
〜!」

「なのはちゃん、ホントに落ち着こ?」

未ださめざめと泣き続けるなのはを必死に慰めようとしているフェイトとこのは見られた。

「・・・なるほど、高町さんが結果で絶望してたんだ。あ、先生の代わりって、雄二が? なんで?」

「一応このクラスの最高成績者だからな。」

「え? それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの?」

「ああ、そうだ。」

雄二はニヤリと口の端を広げた。

(雄二を説得すれば、このクラスを動かせるってワケだ。)

「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

明久が考え込んでいたら、不意に後ろから覇気のない声が聞こえてきた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします。」

福原先生は名前を薄汚れた黒板に書こうとして、やめた。  
チョークがない。

その後も、備品に不足はないか、と聞いた。

複数の生徒が不備を訴えたが、我慢しろ、等言っていた。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

福原先生の指名を受け、車座を組んでいた廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

木下秀吉。小柄で翁言葉が特徴。ぱっと見ても女子と見間違える。  
(じっくり見ても同じである。)

「・・・と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい。」

(レオン：明久が慌ててら。後で弄ろ。)

「・・・土屋康太。」

土屋康太。口数は少ない。

「・・・です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。」

（レオン：お、この声は！）

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

（レイン：ま、まさか・・・）

「趣味は吉井明久を殴ることとレインを弄ることです」

（レオン：キターーーー！）

（レイン：イイイイイイヤアアアアッ！）

レオンがヨッシャーッ！と言わんばかりに右手を挙げ、レインはムンクの叫び状態になっていた。

「はろはろー。」

「・・・あう。し、島田さん。」

「吉井、今年もよろしくね。レインも。」

島田美波。明久、レインの天敵。

（レイン：僕、死んだ・・・）

淡々と自分の名前を告げていく。

「レオンです。皆よろしく。」

「兄者アアアア！（明久）」

「ちよつとまで！誰じゃ今兄者つつたのは！」

「次の人、どうぞ。」

「あ、ひゃい！（舌噛んだ・・・）」

レインが立ち上がる。

「えっと、レインです。よろしく願いしまじゅっ！」

「噛んだ。」

ちーん・・・。

（レイン、憐れ！）

「・・・次の人。」

「・・・コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでくださいね。」

【ダアアアアアリイイイインー！！】

「（不愉快だ・・・）・・・失礼、忘れてください。とにかくよろしくお願い致します。」

明久に吐き気が襲う。

「次の人どうぞ。」

「アリシア・Ｔ・ハラオウンです。よろしくお願いします。」

【俺と付き合って「無理。」なぜ！？】

「理由は言えません。」

「次の人。」

「あ、はい。泉戸このはです。私に告白したヤツは半殺しにします  
よろしくお願いします。」

（（怖っ！！））

（このは、キラは渡さないから！）

（フェイトちゃん、私も渡す気はないからね？）

自己紹介が進んでいつて、フェイト、このはの間の男子の紹介がすんだとき、ふいに教室のドアが開き、胸に手を当てた女子生徒、少し遅れてフラフラになりながら男子生徒が入ってきた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・。」

「遅れ、ました・・・。」

【えっ？】

誰からというわけでもなく、教室に驚きがあがる。

そのとき、数少ない平然としている人物の一人、福原先生が姿を認め、二人に話し掛けた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので二人もお願いします。」

「はっ、はい！（キラ：はい。）あの、姫路瑞希といいます。よろしく願います・・・」

「キラ・ヤマトです。よろしく願います。」

キラが挨拶した瞬間フェイトとこのはが二人の間にいる男子に（どけ！）と目で訴え他の席に座らせていた。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その3（後書き）

後1〜2話は続きます。すいません。

かなり粗削りしてはいますが、それでも他キャラやオリキャラの台詞があつて長くなつてしまい、携帯なので長く打てないんです。言い訳でした。



**第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その4（前書き）**

第一問その4です。

うまくまとめられずにすみません。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その4

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

いきなり質問が向けられ、姫路は驚く。その時の動き方はまるで小動物だった。

「なんでここにいますか？」

聞きようには失礼なのだが、クラス全体の疑問がだされる。

何故学年主席のキラと、常に上位一桁に入っている瑞希がここにいるのか。

「そ、その・・・」

緊張した面持ちで体を硬くした瑞希が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして・・・」

クラスの人々はその言葉で納得した。

試験途中の退席は0点扱いとなる。彼女は昨年度に行われた振り分け試験を最後まで受けることができず、結果Fクラスに振り分けられてしまった、というワケだ。

「僕は試験前日、インフルエンザに罹って、来れなかったんです。」

これにも納得。

そんな二人の言い訳を聞き、ちらほらと言いつけの聲が上がる。

「そういえば、熱（の問題）が・・・」

「化学だろ？アレは難しかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて・・・」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて。」

「今年一番の大嘘をありがとう。」

バカばっか。

「で、では（では）、一年間よろしくお願いします！」

瑞希は逃げるように明久と雄二の隣の空いている席へ、キラはフェイトとこのはが開けた席へ半ば強引に座らされた。

Side 明久

「き、緊張しましたあゝ・・・」

瑞希は席につきや否や、安堵の息を吐いた。

（今がチャンス！席も近いし・・・）

そんな妄想をして・・・

「あのさ、姫・・・」  
「姫路。」

声をかけようとしたが、雄二が明久の声にかぶせるように声をかけた。

明久の（自称）ドラマは終わりを告げた。

「は、はいっ。えーっと・・・」

瑞希はスカートの裾を直しながら、雄二の方を向く。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしく願いします。」

瑞希は頭を深々と下げた。

「ところで、姫路の体調は今だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる。」

明久は思わず口を挟んでしまう。

「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て瑞希は驚く。

「姫路、明久がブサイクですまん。」

（え、なにコレ？僕の為を思ってたの雄二なりのフォローかもしれないけど、全然嬉しくないよ？）

「そ、そんな！目もぱっちりしてるし、顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

「そう言われると確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし。」

「え？それは誰「そ、それって誰ですかっ！？」」

瑞希が明久の言葉を遮る。

「確か、久保・・・」

（久保？）

「・・・利光だったかな。」

久保利光

（性別／オス）

（瑞希：ほっ・・・）

「・・・」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

（もう僕、お婿にいけない・・・）

「半分冗談だ。安心しろ。」

「え？残り半分は？」

「ところで姫路、体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です。」

「ねえ雄二！残りの半分は！？」

明久はつい大声をだしてしまう。

「その人たち、静かにしてくださいね。」

先生から教卓を叩いての警告が。

「あ、すいませ・・・」

バキィツ　バラバラバラ・・・

突如、教卓がゴミ屑と化す。

「・・・替えを用意してきます。」

本当に酷い。

「あ、あはは・・・」

瑞希は苦笑いしていた。

そんな瑞希を見て、明久は理不尽な処分に対する怒りが湧き、まともな設備を手に入れたと思った。

「・・・雄二、レオン、ちょっといい？」

明久はあくびをしているクラス代表とレイン弄りをしている奴に声をかける。

「ん？なんだ？」

「なに？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で。レオンはキラを呼んでくれな  
い？」

「別に構わんが。」

「いいよ？」

二人と一匹は立ち上がり、レオンはキラを呼び、三人と一匹は廊下  
に出る。

そのとき、フェイトとこのはは、少し悲しそうだった（レオン談）。

次回、「結果と紹介と戦争の引鉄」

その5

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その4（後書き）

次回、第一問終了予定です。

今回はキラSideを書き、そして試召戦争開戦宣言、の予定です。



## おまけその1（前書き）

今日、時間ができ、卒業したこともあったので、ちょっとおまけを創ってみました。

あと、本編で飛ばされた自己紹介を書きます。

## おまけその1

1・作者卒業記念・ちよつとした話

「ども、レオンです。」

作者の三月語です。

「まずは卒業おめでとさん。」

どうも。

「聞きたい事があるんだけど？」  
「なになに？」

「卒業表彰でラジオをもらったって本当？」

ラジオ・・・ああ、県産業教育振興会から頂いたヤツのことですね。  
本当ですよ。

「マジで!？」  
「マジで。」

「ちょ、なんで!？」

全商系取得や日商簿記合格等いろいろやりましたから・・・

「使え・・・」

・・・ないです。ラジオ入らないんです。あ、あと、木製漆器ももらいましたよ。

「へーえ。」

・・・でかくて置き場所がなくて困ってますが。

「・・・・・・・・・・ということで、お相手はレオンと、」

作者の三月語でした。

（レオン：使えないことの方が驚きだ・・・）

2・自己紹介やむを得ず飛ばした人の分。

レオンが済んでから。

「次の人どうぞ。」

「鍵宮<sup>ほむじ</sup>焰だ。よろしく頼む。」

【鍵宮つて、まさか・・・？】  
教室がざわつく。

「・・・静かにしてください。次の人。」

明久が済んでから。

「次の人。」

「は、はい。あの、春原優です。よ、よろしくお願いします。」

優は緊張した感じでの自己紹介だった。

「彼女試験のときいなかったから、Fクラスなんだ・・・」  
「体弱かったからな・・・同情するぜ。」

皆対応がまともだった。

（明久：あれ、対応が違う？）

## おまけその1（後書き）

そんなことで、どうでもいいことと補完話でした。  
オリキャラ説明はいずれします！

感想や募集していることは感想にお願いします。  
お待ちしております。

**第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その5（前書き）**

今回で第一問完結です！

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その5

Side キラ

自己紹介後。

「キラ〜！」

「こっちこっち！」

「あ、あれ、フェイトちゃんにこのはちゃん？・・・笑顔が怖いよ・・・？」

二人にしてみれば笑っている。だがキラにしてみれば怖いのである。なぜか顔で

「ここに座らないと・・・」

と言っているような気がしたのである。

「ねえキラ君？」

「何？このはちゃん？」

「なんでキラ君と姫路さんが同時に教室に入ってくるのかなあ・・・？」

「あ、私も思った。」

このはの問いに、アリシアが賛同する。  
フェイトは・・・

「キラ・・・」

キラにまるで猫のように引っ付いていた。

「入るときに、たまたま一緒だったただだから・・・そのオーラ、下げてくれないかなあ・・・」

キラがそう言つと、このはは、  
「そっか。」

と言い、話は済んだかに見えた。

「それよりも、ちょっとフェイトちゃん？すごく狡いんだけど？というか、私もそれしたいんだけど・・・」

「やだ。」

「フェイト、かわつて！」

「姉さんでも嫌！」

『かゝわゝつゝてゝ！』

「やゝだゝよゝ！」

「（僕の意志はどうなんだろ・・・）なのはちゃんは何かあったの？」

「このは、そっちお願い！」

「わかった！アリシアちゃんはそっちを！」

『フェイト（ちゃん）を一気に引きはがす！』

「いゝやゝだゝ！」

「・・・話、聞いて・・・」

キラの話や意志を無視した取り合いが始まった。

そこへレオンが来る。



「キラ、明久が話あるって。」

「話？わかった。あのさ、呼ばれたから行かないと……」

『……むう。』

取り合いをしていた（フェイトを剥がした）二人は渋々離れた。

（レオン：なんか、嫌な役。）

S i d e   o u t

「んで、話って？」

現在HR中。廊下に人影はない。

「この教室についてなんだけど……」

明久が言ったこの教室とは言うまでもなくFクラスのことだ。

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな。」

「雄二に同じ。」

「僕も思っよ。」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない。」

「そんな凄いんだ。」

「キラ、まだ見てないんだ。」

一方はチョークすら無いひび割れた黒板で、もう一方は値段もわか

らないほど立派なプラズマディスプレイ。これに不満のない人間はいないはず。

「そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に。」

「・・・何が目的なの、明久？」

「（警戒されてる？）いや、だってあまりに酷い設備だから、  
「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかにために戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが。」

「（うぐつ。相変わらず勘だけは妙に良いな。）そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが・・・」

「明久（君）／お前がこの学校を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由だろ／でしょ？」

「（しまった。皆には僕がこの学校に来ている理由を話したことがあるんだった。）あー、えーっと、それは、その・・・（言い訳が思いつかないっ！）」

「・・・姫路の為、か？」

「（ビクッ！）ど、どうしてそれを！？」

この頃。

「・・・にやっ！？」

「あ。」

「・・・あれ？今どうなってるの？」

「あ、なのは。もう大丈夫なの？」

「あ、うん。大丈夫。」

なのは、覚醒。

場所戻して。

明久が言いくるめられていた。

「お前に言われるまでもなく、俺とレオンは、Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ。」「え？どうして？雄二やレオンだって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試みてたくてな。」

「????」

「それにAクラスに勝つ作戦も思いついたし・・・おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ。」

「あ、うん。レオンは「ノリ。」・・・」

明久たちは教室に戻った。

「さて、復活した高町さんから自己紹介をお願いします。」

壊れた教卓を替えて（それでもボロだけど）気を取り直してHRが再開される。

「えっと、高町なのはです。よろしくお願いします。」

【つきあつ「ごめんなさい」早っ！そして何故！？】

「わ、私は、その・・・」

なのはは顔を赤らめ、言った。

「ルカ君が・・・好きだから・・・」

【フラれた！聖祥中美女全員に！】

Fクラス男子、憐れ。

「次の人。」

「フェイト・T・ハラオウンです。よろしくお願いします。」

【・・・つ「無理です！」やはりかああああ！】

学習しない奴ら、それがFクラス男子。

そして雄二の番に。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ。」

「了解。」

雄二が席を立つ。

ゆつくりと教壇に歩み寄るその姿は、いつものふざけた雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を見に纏っているようだった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。・・・さて皆に一つ聞きたい。」

雄二は、全員の目を見て、その視線を教室の各所に移した。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「・・・不満はないか？」

【大ありじゃあっ！！】

二年F組生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表としても問題意識を抱えている。」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからといって、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

不満が堰を切ったかのようにあがる。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、」

級友たちの反応に満足したのか、不適な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが・・・」

これから戦友となる仲間たちに野生味満点の八重歯を見せ、

「・・・FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う。」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引鉄を引いた。

次回、第二問 「勝算と会議と宣戦布告」 その？

**第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その5（後書き）**

**第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」、終了です！**

**次回、お楽しみに！**

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その1（前書き）

第二問です。Dクラス戦に近づきました！

3/2、15:25、PVが5000、ユニークが1000を越えました！ありがとうございます！

これからもよろしく願います！



## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その1

### 第二問

以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強してますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

高町なのはの答え

「これは私の祖母が~~~~~です。」

(this" これは bookshelf" had used" 現在完了、経 完了 と書かれている。験がうつすら残っている)

教師のコメント

回答欄外の記述からあなたの必死さが伝わりました。

泉戸このはの答え

「これは私の祖父が愛用していた本棚です。」  
(涙で少し湿っている)

教師のコメント

あなたは祖母を目の前で亡くした、と聞きましたが、そのせいで祖父としか書けないのを忘れていた先生を許してください。

吉井明久の答え

「 \* x 」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

前回。

雄二が戦争の引鉄を引いた。

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

「勝てるわけがない。」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

「姫路さんがいたら何もいらない。」

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。誰かが瑞希に告白してたが。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

そんな戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言した。

「何を馬鹿なことを。」

「できるわけないだろう。」

「何の根拠があつてそんなことを。」

否定的な意見が教室中に響き渡る。普通は当たり前だ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。」

こんな雄二の言葉を受け、クラスの皆が更にざわめく。

（明久：根拠がある？ 僕らはFクラスだよ？ 学年最下位グループだよ？）

「それを今から説明してやる。」

得意の不適な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす雄二。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い。」

「・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ！？」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。

瑞希がスカートの裾を押さえて遠ざかると、彼は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ。<sup>ムツリーニ</sup>」  
「・・・・・・！！（ブンブン）」

土屋康太の名前はそこまで有名じゃない。だが、ムツリーニという名前は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられる。

「ムツリーニだと・・・・？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・・？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・・」

「ああ。ムツリの名に恥じない姿だ・・・」

「????」

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。ただ、瑞希だけは頭に多数の疑問符を浮かべているようだ。

「姫路や泉戸、春原のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力によく知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ちよっと代表、私あまり戦力にならないんだけど？」

「え、あ、あの・・・、わ、私もですか・・・？」

「泉戸、お前の実力がBクラス主席確実なものだと言っていることを知っている。三人がウチの主戦力だ。」

「そうだ。俺たちには三人がいるんだった。」

「姫路さんや春原さんならAクラスにも引けをとらない。」

「ああ。姫路さんさえいれば何もいらないな。」

「木下秀吉だっている。」

「ワシもか？」

木下秀吉。彼は学力ではあまり名前を聞かないが、演劇部のホープだとか、双子の姉のことなどで、有名だったりする。

「おお・・・！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

「高町やハラオウン姉妹もいる。」

「ふえっ？」

「わ、私が？」

「私もなの？」

「三人は理数系が強い。特に高町は201問目から回答がズレていなければ、Aクラスだったらしい。」

「おお・・・」

「当然俺も全力を尽くす。」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ。」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか。」

「実力はAクラスレベルが四人もいるってことだよな！」

いけそう、やれそう、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。  
気が付けば、クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久、鍵宮焰だっている。」

・・・シン・・・

一気に士気が下がった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕らの名前を呼ぶのさ！全くそんな必要ないよね！」

「雄二！俺と明久を同格に扱うな！」

「誰だよ、吉井明久って？」

「聞いたことないぞ？」

「鍵宮ってどこかで聞いたことがあるような・・・」

「忘れたな。」

「ホラ！折角上がりかけてた士気に陰りが見えてるし！僕らは雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを・・・って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕らのせいじゃないでしょ

う！」

「いや、明久のせいだ。」

「焰！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつらの肩書きは《觀察処分者》だ。」

雄二は言ってしまった。

「・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

誰かが致命的な台詞を言う。

「ち、違つよ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ。明久のはな。」

「あの、それってどういうものなんですか？」

瑞希が小首を傾げて聞いた。

「それはな、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分だ。まあ、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ。」

「それ以外は役に立たないけどね。」

「へえ、それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら羨ましいです。」

瑞希の目がキラキラと輝いている。若干の羨望と尊敬のこもった視線が明久に送られる。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ。（ああっ！穴があつたら入りた〜いっ！）」

「明久のは、って、じゃあ鍵宮君のはどう・・・」

「俺から言う。」

優の疑問を遮り、焰が言う。

「俺は・・・」

全員が焰を見た。

「・・・《特別観察処分者》だ。」



次回、

「勝算と会議と宣戦布告」

その2

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その1（後書き）

次回、区切りよく終わらせたかったので少し少なくなりました。  
バカテスキャラにアニメ版の台詞を入れてみましたが、如何でしょうか？

自分ではかなりの無茶な気がしてしまつて・・・

感想、お待ちしております！

**第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その2（前書き）**

第二問その2です。

少し少なくなってます。

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その2

「と、特別観察処分者だと？」

「聞いたこともないぞ？」

クラスがざわめき始める。

「俺がこの処分を受けたのは二つ理由がある。一つは、「風牙」。昔の俺の異名だ。」

「「風牙」だと・・・？」

「あの「悪鬼羅刹」と互角といわれる強さのか！？」

「それに尾鰭がついちまったこと。そしてもう一つが、・・・水河涼の存在だ。アイツの・・・アイツのせいで・・・」

「水河涼？ Aクラスの？」

「まあ、そんなとこだ。」

雄二が話を止めた。

「よく考えたら、『観察処分者』ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人が苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが二人いるってことになるよな。」

「気にするな。明久はどうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ。」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「ただ、焰が戦えないのが少し辛いな。焰は・・・Aクラスの実力がある。」

「スゲエ、まだいたのか、Aクラス！」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

（雄二、言いやがった・・・）

クラスの士気が再び上がった。

「最後に、このクラスの切り札だ。キラ、レオン、来てくれ。」

「僕はいいんだけど・・・キラ、動けないよ？」

「何？」

雄二が見た先には、立ち上がろうとしてどうしようもなくなっているキラと、そのキラに抱き着いているフェイト・このはの姿があった。

「フェイトちゃん、このはちゃん、あのさ、離れてくれないかな？」

前、行きたいんだけど・・・」

「嫌。」

「私も嫌。」

雄二はその光景に溜息をついた。

「はあ・・・キラ、どうにか来れないか？」

「くっ・・・ゴメン、無理だ。」

なのはも離そうとした。

「二人とも離れて〜！」

『や〜だ〜！』

「キラ君困ってるよ〜！抱き着くのは後でもできるでしょ〜！？」  
『今抱き着いていたいのに〜！（フェイトのみ：「待つてられないの〜！」）』

「仕方ない。ここで言うが、切り札はキラと、レオンだ。まずキラだが、アイツの実力は知ってるだろう。ただ、アイツも迂闊に召喚できないという問題点がある。」

「そんな！」

「あの主席確実と言われたヤマトが迂闊に戦えないだと！？」

「何故！？」

クラス内に疑問が出る。

「僕が言う。OK？雄二？」

「かまわん。言ってくれ。」

レオンが説明をする。

「去年の実習を見た人は分かるかもしれないけど、キラの召喚獣はフィードバックが強いんだ。点数が高すぎるため、と言われてるけど、実際は不明。召喚獣の受けたダメージの八割がキラに来る。そういうわけなんだ。」

「そうだったのか・・・」

理由は複雑だったが皆納得した。だが・・・

「キラ、何で言ってくれないの!?!」

「いや、心配かけなくなかったし「いきなり傷ついたほうが心配する!」・・・ゴメン。」

フェイトがキラに問いただしていた。そして・・・

「今日しばらくこのままにさせて!」

「なんで!?!」

「言ってくれなかった罰!」

キラが何気に罰を受けていた。

「話が逸れたが、レオンはいつもはこんな飄々としたヤツだが、本当は凄いヤツなんだ。召喚獣につく腕輪の数が5個あるらしい。あと、「閃光纏いし死神」の異名は、一度くらい聞いたことはあるだろう。正体はこいつだ。実力も十分にある。」

「腕輪が5個だと!?!」

「「閃光纏いし死神」とともに戦えるとは!」

「いけるぞ!」

クラスの士気は高まった。

「まずは俺たちの力の証明として、Dクラスを征服してみようと思う。・・・皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『当然だあ!!!』

「ならば全員筆<sup>ペン</sup>を執れ！出陣の準備だ！」  
『おおっ！！』

「俺達に必要なのはこんな設備ではない！Aクラスの設備だ！」  
『うおおおお！！』  
『お、おー・・・』

瑞希と優は、クラスの雰囲気<sup>雰囲気</sup>に気圧されたのか、小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「映画の見すぎだ。」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ  
て行ってみろ。」

「・・・本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている。」  
わずかな逡巡<sup>逡巡</sup>すらなく、力強く断言する雄二。

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない。」

更に追い打ちの一言。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ。」  
「ああ、頼んだぞ。」



クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は使者らしく毅然とした態度でDクラスに向かって歩きはじめた。

「雄二、レオン。」

『何（だ？）』

「明久とハサミは使しよう、だな。」

「だよ。雄二、ナイス！」

次回、「勝算と会議と宣戦布告」 その3

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その2（後書き）

今回は、昼休みパート中心です！

ドイツ語で書けないところはアルファベットで補っているのをご了承ください！

第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その3（前書き）

その3です！

前回の後書きに「昼休みが占める」と書きましたが前フリだけにな  
ってしまいました。

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その3

「騙されたあつ！」

命がけで廊下を走り、自分の教室に転がり込む明久。

息を切らせ床にへたりこむ明久に雄二とレオンが視線を落とし、

『やはり／やっぱりそうきたか。』

平然と言い放った。

「やはりつてなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しは悪びれるよ！」

「疑わない明久が悪いんじゃない？」

「僕のせい！？僕のせいなの！？」

「吉井君、大丈夫ですか？」

ところどころ制服まで破れている明久の有様を見て、瑞希が駆け寄ってくる。

奥ではキラから離れたフエイトが、

「キラに使者を任せたら許さないから・・・」

と、雄二に言っていて、雄二は、

「分かった、キラには使者を頼まない。だからそれをひっこめろ。」

と言っていた。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。」

「吉井、本当に大丈夫？」

美波もきた。

「平気だよ。心配してくれてありがとう。」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

明久は慌てて腕を押さえて転げまわる。

島田美波、油断ならない。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ。」

他の場所で話し合いをするつもりらしく、雄二は扉を開けて外に出た。

（明久：もう少し友人に優しさを見せても良くない？というか、雄二って、本当に僕の友達なんだろうか？前から週に七回ほど気になってるんだけど……）

「キラ、来てくれ。お前にも出てほしいんだ。」

「あ、うん。分かった。」

雄二に呼ばれて、キラが出る。

つまり？

「キラ、待つて！私も行く！」

「私も参加しよ。作戦聞いておいた方がいいし。」

「私も。」

「なのはちゃん、ひょっとしてルカ君に会えると思ってる？」

「ち、ちがうよ！」

「高町さん、そう思われても仕方がないですよ？いつもの行動とか、朝の光景を見れば・・・」

「ふええ、春原さんも酷いよ・・・」

フェイトやなのは、アリシアたちが出る。（フェイトのみ理由が不純だが）

「あの、痛かったら言つて下さいね？」

瑞希はそう告げて、小走りに雄二の後を追った。

「大変じゃったの。」

秀吉が明久の肩を叩いて廊下に出る。

「・・・・・・・・（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすりながらムツリーニが続く。

「ムツリーニ、覗いていた時の畳の跡ならもう消えてるぞ？」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツリーニがHなのは知ってるから。」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いの  
思  
う。」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「・・・・何色だ／だった？」

「みずいろ。」

即答か。

「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ。」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

そうやってのんびり話をしていると、

「ほら吉井。アンタも来るの。」

美波が明久の腕を引張った。

「（むう。面倒な話し合いになりそうだから逃げようと思っていた  
のに。）あー、はいはい。」

「返事は一回！」

「へーい。」

「・・・・一度、Das Brechen・・・ええと、日本語だと・  
・・・・」

美波が言いよどむ。

（明久：Das Brechenってなんだろう？多分ドイツ語だ  
と思うけど。）

「・・・・・・・・調教。」

「そう。調教の必要がありそうね。」

「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

「じゃ、中間とってZuchting・・・」

「・・・それはわからない」

「日本語だと「折檻」、だ。」

焰が口を挟む。

「そう、それ。」

「それ悪化してない？」

「そう？」

「なんかさ、この際Inhaftierungしたほうがいいんじゃないの？最悪、Ausführungすれば？」

「レオン、アンタえげつないわね・・・」

「そう？」

「なんなの、さっきの？」

「・・・どちらもわからない。」

美波はレオンの言ったことに引いていた。明久とムッツリーニはわからない、といった顔をしている。

「最初のは、「監禁」。」

「・・・師匠！」

ムッツリーニが、レオンの手を握る。

「後のは・・・言ってほしい？（ニヤリ）」

「なんか聞いたらいけない気がするけど・・・何？」

全員が、固唾を飲む。



「・・・処刑。」

「レオン、それはまずい！駄目だ、それを言ったら島田が・・・やりかねない！明久が死ぬ！」

「ちよつと！ウチはそんなことしないわよ！」

「・・・流石、死神。」

レオンの発言に慌てる焰。

それに言い返す美波。

死神の異名を静かに讃えるムッツリーニ。

「かなり酷くなってない？・・・というか、ムッツリーニもレオンもどうしてそんな言葉を知ってるの？」

「・・・一般教養。」

（明久：なんて嫌な一般教養なんだ。「折檻」とかの普通の言葉はわからないというのに。）

「企業秘密。」

（明久：何という話！）

「相変わらずムッツリーニは性に関する知識だけはズバ抜けてるね。」

「・・・！！（ブンブン）」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄二が屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出た。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。

春風とともに訪れた陽光に、風ではためく瑞希や優のスカートを注視しているムッツリーニを除いて、全員目を細めた。

次回、「勝算と会議と宣戦布告」 その4

**第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その3（後書き）**

次回は昼休み、明久の弁当話と・・・？です！

感想、お待ちしております！

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その4（前書き）

今回、後半でかなりキャラ崩壊してます、というかさせました！  
では、どうぞ！

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その4

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど。」

それにならって各々腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。だが・・・」

雄二の視線の先には、

『』

「ゴメン。」

キラに抱き着いて満悦そうにしているフェイト、このはがいて、キラはちよつと申し訳なさそうにしていた。

「いちやつくな、ハラオウン妹、泉戸。ハラオウン姉も・・・」

「ねえ坂本、私、名前の呼び捨てでいいよ？フェイトと同じだから、苗字だと困るし。皆もお願い。」

「ああ・・・しかし、姉妹でも違うんだな。容姿はソックリなのに全然違う。」

「フェイトの場合仕方ないよ。7年の恋の結果があれだから。」

一方、奥では。

「はつきり行動できる人って羨ましいです・・・」

「瑞希ちゃんにも好きな人がいるんですか？」

「え！？あ、その、えっと・・・はい・・・。優ちゃんはどうなんですか？」

「私もいるんですが・・・（キラの方を見る）」  
と話していた。

「まあいいか。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べるよ？」  
「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど。」

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

優との話を終えた瑞希が驚いたように明久を見る。

「（姫路さんはきつと規則正しい生活をしているんだろうな。いろいろと発育も良さそうだし。）いや。一応食べてるよ。」  
「・・・あれは食べていると言えるのか？」

雄二の横槍が入る。

「何が言いたいのさ？」

「いや、お前の主食って・・・水と塩だろう？」

焰の哀れむような声。

「なんて失礼な。僕を馬鹿にするにも程がある！きちんと砂糖だつて食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ・・・

「舐める、が正解じゃろうな。」

「水と塩と砂糖って・・・調味料でしょ？あれ。」

「にはは・・・」

「・・・。」

（明久：なんか、皆の目が妙に優しいのが逆に辛い・・・）

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！（趣味ってお金がかかるよね。）」

「あの、よかつたら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

「明久、字が違う字が違う。」

（優：み、瑞希ちゃん、大胆だなあ・・・わ、私も・・・）

突然の優しい言葉。

「（お弁当？女の子の？手作りの？）本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ。」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってるなんて。」

面白くなさそうな美波の言葉。

（明久：そんな棘のある言い方をして、「やっぱりやめます」なんて言われたらどうしてくれるんだ！）

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら。」

（明久：おお、雄二にも作ってあげるなんて。いい子だなあ。）

「それは楽しみじゃのう。」

「・・・（コクコク）」

「・・・お手並み拝見ね。」

「あ、瑞希ちゃんゴメン。私お弁当あるから。」

「俺も頼む。」

「わかりました。それと、アリシアちゃんたちは・・・」

「・・・今取り込み中のようだな。後にしとけ。」

「あ、はい。それじゃ、皆に作ってきますね。」

たくさん作ることになったのに瑞希は嫌そうな顔をしない。

「姫路さんって優しいね。」

「そ、そんな・・・」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」・・・にしたいと思ってました。（フツ。失恋回避成功。「君のこと好きです」と言い切る前だったからこそ取れる空前絶後の回避運動。流石は僕の判断力だ。」）

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ？」  
（明久：恨むぞ僕の判断力！）



「明久。お前はたまに俺達の想像を超えた人間になる時があるな。」  
「雄二、はるかに、が抜けたぞ。」

「だって・・・お弁当が・・・」

明久は泣いた。

その後のことだった。

いきなり「なのはああああ!!」と、フェイトがなのはに飛び掛かってきた。

「え、フェ、フェイトちゃん!? ちょ、きゃっ! (ボタン) 何があったの!？」

「私が説明するね。実は・・・」

アリシアがいきさつを話した。

それまでのいきさつ。

「あ、あの・・・。」

「????」

優が行動に出た。

ちなみにフェイトはいない。

「春原さん、何?」

「(思いを伝えなきゃ・・・) あん・・・その・・・。」

「恥ずかしいなら代わりに言っておげようか？」

アリシアが提案。しかし、

「いえ、自分で・・・」  
と言った。

「あの、貴方のことが・・・す・・・す・・・好きです！付き合ってください！」

沈黙。

「え、あ、えっと・・・い、いつから・・・？」

「三年前に助けてもらってから・・・です。」

また沈黙。

「ねえ、どうなってるのこれ？」

フェイト、帰還。

アリシアがフェイトに説明する。

「フェイト、落ち着いて聞いて。さっき優が告白したの。」

「・・・。」

「フェイト？おい、フェイ」なのはあああああ！！」あ！フェイト！」

説明完了。

（瑞希：優ちゃん、告白したんだ・・・）

「で、こうなつたと。」

「私、フラれたのかなあ！？どうしたらいいの・・・なのはああああ・・・。」

「おお落ち着いて、フェイトちゃん？」

「これはもう暴走じゃな。しかし、朝と逆の状態を見るとは思わなかったぞい。」

「キラは、・・・止まってる。」

呆れてその光景を見るしかなく、会議は脱線していた。

「優もキラが好きだったんだ。」

「うん。このはちゃんごめ「優、私、負けないから。」・・・私も、負けません！」

キラ争奪が激化した瞬間だった。

次回、「勝算と会議と宣戦布告」 その5

**第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その4（後書き）**

如何でしょうか？

今迄の崩壊より酷いと思いますが・・・

感想、お待ちしております！

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その5（前書き）

PVアクセスが10000を突破いたしました！皆さん、ありがとうございます！

今後より多くの方に読んでいただけるよう努力いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします！

第二問その5です！

少し短くなったのでちょっとしたオマケ入れました！

それでは、どうぞ！

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その5

「さて、話かなり逸れたな。試召戦争に戻ろう。高町は後でフェイトに（アリシアに許可もらった）伝えておいてくれ。」

「うん、分かった。」

「じゃ、僕はキラ起こすね。ちょっと離れてて。」

全員離れる。なお、このはをアリシアが押さえる役目をしていたが。

「魔力循環、異常無し。四散魔力、必要量、確保。TRANS-A Mシステム、起動！キラああああ！起きろおおおお！」

「え、ちょ、レオン。それダメだあああ！」

赤く光ったレオンは、サイズを振りかぶり、キラに向かって突進した。

「うわっ！」

キラ、避けた。

「あれ、僕は・・・？告白されてからの記憶が・・・」話を進めた  
「いんだって。それで起こした。」あれで？あ、返事・・・」

「全てが済んだらにしておいた。それまでに考えておきな。」

「あ、う、うん。」

「ま、まあ起きたから試召戦争に戻ろう。」

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろっし、勝負に出るならAクラスじやろっし？」

「そういえば、そうですね。」

「まあな。当然考えがあつてのことだ。」

雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えなの？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」

「た、戦うまでもないって・・・」

「え？でもでも、私たちより上のクラスだよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。明久、オマエの周りにいる面子を見てみる。」

「えーっと・・・」

明久は雄二に言われたとおりその場にいるメンバーを見回してみる。

「ふむふむ。この場には、美少女七人と馬鹿が二人と天才が一人と不良が二人と泣き虫が一人とムツツリが一人いるね。」

『誰が美少女だと！？』

「ええっ！？雄二と焰が美少女に反応するの！？」

「・・・（ポッ）」

「ムツツリー二まで！？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない！」



「まあまあ、落ち着くのじゃ、代表に焔にムツツリーニ。」

（明久：美少女と言えば姫路さんに秀吉に高町さんにハラオウンさんたちに春原さんに泉戸さんに決まってるじゃないか！）

「ま、要するにだ。」

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。

「姫路やキラ、春原に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ。」

「？それならDクラスとは正面からぶつかるて厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな。」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ。」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな。」

「あ、あのー！」

瑞希にしては珍しい大きな声。

「ん？どうした姫路？」

「えっと、その。さっき言いかけたって・・・吉井君と坂本君とレオン君とヤマト君は前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談さ

れて・・・「それはそうと!」

明久は雄二の余計な台詞を遮るように、わざと大きな声を出す。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ。」

「負けるわけないさ。」

明久の心配を笑い飛ばす雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。」

(明久：勝てる？僕らが？試召戦争で？)

「いいか、お前ら。ウチのクラスは・・・最強だ。」

「いいわね。面白そうじゃない!」

「楽しそうね!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

「天下、か。」

「・・・・・・(グッ)」

「私も頑張ろ!足引つ張らないように!」

「私も・・・頑張ります!」

「が、頑張りますっ!」

全員がこの戦争への意気込みを言った。  
そして。

「あれ、私・・・」

「フェイトちゃん。落ち着いた?」

「うん、ゴメン、なのは。今どうなってるの?」

「えーっと・・・」

なのは、説明中・・・

「と、いう考えなの。」

「・・・る。」

「フェイトちゃん？」

なのははつぶやき始めたフェイトを見る。

「私、頑張る！キラを守ってみせる！絶対傷つけさせない！」

「フェイトちゃん、クラスのためにも・・・ね？」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

涼しい風がそよぐ屋上で、全員が勝利の為の作戦に耳を傾けた。

オマケ：作戦会議後

「ねえ、レオン。」

「何？」

「キラを起こすとき、赤く光ってなかった？」

「（マズイ！あれは知られたくない！）・・・What's up,

a k i h i s a ?            E v e r y t h i n g   g o e s   s o  
w e l l . . .」

「ごまかした？」

「・・・企業秘密！」

「ええっ!？」

レオンはにげだした!

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」

## 第二問 「勝算と会議と戦線布告」 その5（後書き）

次回から第三問、つまりDクラス戦です！

バカテスメンバーはもちろん、なのはや優、焰の活躍やレオンのチートっぷり、フェイトはキラを守るか、などをご期待ください！

感想や募集中のことがありましたらどうぞ！

**第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その1（前書き）**

**第三問です！**

**今回、後書きに発表があります！**

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その1

#### 第三問

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと。』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え。』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

キラ・ヤマトの答え

- 『(1) 猿も木から落ちる』
- 『(2) 弱り目に祟り目』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』などがあります。

泉戸このはの答え

- 『(1) エースも空から墜ちる』

教師のコメント

エースや空の意味はよく分かりませんが、なんとなく正解に近い回答でした。

フェイト・T・ハラオウンの答え

『(2) フラれた上に奪われる』

(解答用紙が湿っている)

教師のコメント

あなたが何故そんな回答に至ったかを知りたいです。何があったんですか？

レオンの答え

『(2) 動けぬ敵に魔王<sup>なのは</sup>のSLB』

教師のコメント

SLBが何の略か教えてください。また、何故高町さんが魔王なのかも教えてください。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

あなたは鬼ですか。



前回の話。

雄二が作戦を話した。

そして戦争が始まった。

「吉井！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

美波が駆けてくる。

（明久：改めて見ると、背は高くて脚も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろっ。）

（焰：島田には女性としての魅力がどこか足りない。なんだ？）

「な、何よ、二人ともウチのことじろじろ見て？」

美波は二人の視線にそう言った。

『ああ、胸か。』

「アンタ等の指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に！」

（焰：ゲッ！）

「（マズい。何かのスイッチに触れたっばい！）そ、それよりもほら、試召戦争に集中しないと！」

今前線にいるのは、秀吉、アリシア率いる先行部隊だ。

明久が前線部隊の先頭の様子を聞くと、

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな！」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう。」

「お、鬼だ！誰か、助けっ・・・イヤアアアア・・・（ボタン、ガチャ）」

「（よし、試召戦争の雰囲気はだいたい分かった！）島田さん、焰！中堅部隊全員に通達！」

「ん、なに？作戦？なんて伝えんの？」

明久の出した指示は、

「総員退避、と。」

「分かつ「この意気地無し！」ぐああっ！」

二人を殴った。明久はチョキで。

「目が、目があつ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！鍵宮もすぐに伝令に行こうとしないで！」

（明久：その覚ますべき目に激痛が！そういった台詞はせめてグー

かパーで殴った後に言っただけいい！）」

「いい、吉井？ウチらの役割は木下とアリシアの前線部隊の援護でしよう！アイツらが戦闘で消耗した点数を補給している間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給ができないじゃない！」

「（島田さん、君はなんて男らしいんだ！なぜか涙が止まらないよ！あと激痛も！）ごめん。僕が間違っていたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう。」

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ。個別戦闘は弱いかもしれないけど、これは戦争なんだから多対一で戦えば良いのよ。」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

「頑張れ。」

「鍵宮もやるの！」

やれる！と意気込んでいると、美波のところに報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ。」

「島田、さつきと言っていることが違う気がするが俺の気のせいかな？」

美波、撤退を決定。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた。」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ。」

「何のだ？」

振り返った先には、横田がいた。

「横田、どうした？」

「代表、参謀両名から伝令があります。」

横田はメモを見ながら、

「『逃げたらクロス』」

とハキハキとした声で告げた。

「全員突撃しろおおおっ！」

「退いたら死ぬぞおおお！」

明久たちは戦場に向かって走っていた。

ところ変わってFクラス。

伝令が飛ぶまで。

「では、始めてください。」

と、先生が言ったのを機に、キラ、フェイト、このは、優、瑞希がテストを始めた。

「ねえ坂本君。何で私を後方にしたの？私が運動ダメなの知ってるよね？」

「高町をここにしたのは、フェイトを止めるためだ。」

「・・・フェイトちゃんを止めるため？」

「ああ。」

「・・・理由が分かった気がする。」

「（カリカリカリ）雄二。」

「なんだ？」

「（カカカカカカツ！）伝令、出して。」

「あ、ああ。何て言う？」

「逃げたらコロス。」

「ああ。横田！伝令頼む！内容は、「逃げたらコロス」だ！」

「了解！」

横田は走っていった。

「しかし、すごいね。キラ君もレオン君も。」

「（ヒュヒュヒュヒュッ！）そうかな？普通だと思うけど。」

「（表記できないほど速く紙が舞っている）そんなことはないよ。凄くないと思うよ？先生、全て終わりました！」

「で、では採点しますのでヤマト君は待っていてください。」

キラは全て解き終えていた。

その他。

優

キラ終了時、半分は片付けていた。

フェイト

化学、数学では驚異的な速さで解いていたが、文系で遅くなった。  
キラ終了時、半分消費。

これは

キラ終了時、四分の一は終了。

瑞希

フェイト、優と同じ。

レオン

終了してから数秒後、完了。

次回、「初陣と犠牲と召喚戦争」 その2

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その1（後書き）

如何でしょうか？

それでは、発表です！

1、Dクラス戦後、キャラを増やすことが決定！  
メイン化します！  
出すキャラは「ルミナスアーク」の2・3、とモノ2のキャラです！

（2のキャラのヒント。秀吉と同じ声優です！）

2、第一巻分終了後にあるキャラが出演！

なお、ここでは詳しく語りません！活動報告に出すキャラが書いてあります！

お楽しみに！

あと、それに伴うお願いです。

バカテストの募集ですが、第一次〆切を設けたいと思います。〆切は第三問その5投稿した日にさせていただきます。  
まことに勝手ですがよろしく願います。

感想などもどうぞ！

**第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その2（前書き）**

第三問その2です！

では、どうぞ。



### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その2

明久たちが走っていると、前方から走ってくる人が。

「明久、焰！援護に来てくれたんじゃない！」

「た、助かった・・・」

「秀吉、アリシア、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい。」

「私も。化学はホントにかろうじて残ってる感じ。後は際どいわね。」

秀吉、アリシアが現状を説明する。

「そうなの？召喚獣の様子は？」

「もうかなりヘロヘロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ。」

「秀吉と同じ。次で戦死は確実よ。」

「そっか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと。」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよう。」

「皆、頑張つて！」

言うな否や、秀吉とアリシアは教室に向かって走っていった。その後ろに前線部隊に配置されたクラスメイトが続く。出陣した時より人数が少ないのは補習室に連行されているからだ。

「吉井、鍵宮！試召戦争のルールは覚えている？その科目の教師がいないと召喚はできないからね！」

「わかつてる！」

「当たり前だ！」

なお、ルールは割愛させていただきます。B Y 作者

今回は学年主任が立会いをしている。  
だが。

「吉井、見て！」

美波が叫ぶ。

「五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ。焰は？」

「・・・聞くな。」

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近付かないように注意しながら学年主任のところに行こう。」

「高橋先生のところね？了解！」

既に戦闘が行われている渡り廊下で目立たないように隅へ移動する三人。しかし。

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉様！五十嵐先生、こっちに来て下さい！」

「くっ！ぬかったわ！」

「・・・お姉様？」

Dクラスの一人に美波が見つかった。化学担当の五十嵐教諭を伴って近付く。

「よし、島田。ここはお前に任せた！俺達は先に行く！」

「ちよっ・・・！普通逆じゃない!?」  
「ここは俺に任せて先を急げ！」  
「じゃないの!?!」

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

「よ、吉井！このゲス野郎！」

「お姉様！逃がしません！」

「くっ、美春！やるしかないってことね・・・！」

明久と焰は、五十嵐教諭から10メートル以上離れてからゆっくりと美波の様子を窺う。相手は既に試験召喚獣を喚び出していた。応えるように美波も声を出す。

「・・・試験<sup>サモン</sup>召喚っ！」

美波の足元に幾何学的な魔法陣が現れる。教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。そして、姿をみせる召喚獣。  
その姿は、簡単にいえば『デフォルメされた召喚者』である。どちらも同じようなものだからだ。

「お姉様に捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました・・・」

「ちよっと！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

「ところで島田さん、お姉様って・・・」

「嫌です！お姉様はいつまでも美春のお姉様なんです！」

「来ないで！私は普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉様は美春のことを愛しているはずです！」  
「このわからずや！」

（明久：・・・なんだか、島田さんが遠い。）  
（焰：有り得んモノを見た。あの美春ってやつ、同性愛者ってのか！？）

「行きます、お姉様！」

ついに戦闘が始まった。

「はあああつ！」  
「やあああつ！」

二人の気合いが廊下に響く。  
それぞれの召喚獣が、武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

「こ・・・のっ！」  
「負けません！」

鏑迫り合いを繰り広げる二人の召喚獣。

「島田！向こうが点高いんだ、真正面からぶつかったら不利だ！」  
「そんなこと言われなくてもわかってるけど、細かい動作はできないのよっ！」

直後、均衡が崩れる。美波の召喚獣が、力負けして得物を取り落とした。

「ここまでですっ！」  
「くっっ！」

そのままの勢いで美波の召喚獣が押し倒される。その頭上には参考として二人の戦闘力（点数）が浮かび上がっていた。

『Fクラス	島田美波	V S	Dクラス
清水美春			
化学		53点	V S
4点			9

（明久：島田さん、サバ読んでたな。本当は60点にすら届いてないじゃないか。）

（焰：俺以下だと・・・！？）

「さ、お姉様。勝負はつきましたね？」

刀を喉元に突きつけられる美波の召喚獣。腕や足を刺された程度なら点数が減るくらいで済むけど、首や心臓をやられたら即死・・・つまり補習室行きだ。

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

「補習室？・・・フツ。」

楽しそうに笑いながら、美春が美波の手を引っ張る。だが、その行き先は保健室・・・。

「ふふっ。お姉様、この時間ならベッドは空いてますからね。」

「よ、吉井、鍵宮、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

（明久：そうだろうね。僕から見てもそんな気がするよ。でも、）

「殺します……。美春とお姉様の邪魔をする人は、全員殺します・  
・。」

（明久：ごめん、僕にソコに飛び込む勇氣はない。）

「島田さん、君のことは忘れない！」

「ああっ！吉井！なんで戦う前から別れの台詞を！？」

「……。こちら鍵宮。任務を遂行する。」

「アンタはそんな人間じゃないでしょっ！？鍵宮」

「じゃあ何をしろと！？あんな殺害衝動丸出しの奴に！？」

「邪魔者は殺します！」

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その2（後書き）

今回、かなり苦戦しましたよ。

募集中のことなんですが、その2について。

キャラリストを作ってここに表示します。

Fクラス

なのは フェイト アリシア このは 優

（Dクラス戦後の話の後書きに再掲載します。キャラが増えるので。）

Aクラス

はやて 夏美 涼

感想と共に、お待ちしております！

というか、募集していることが無視されてるような・・・？

**第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その3（前書き）**

第三問です。

今回は半分から本陣で、キャラ崩壊してます！

それでは、どうぞ。



### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その3

「邪魔者は殺します！」

美春は、美波の召喚獣に攻撃をして動けなくすると明久たちに向か  
ってきた。

「吉井、鍵宮、危ない！・・・試獣<sup>サモン</sup>召喚っ！」

「この戦闘に介入する！試獣<sup>サモン</sup>召喚っ！」

脇から割り込む声。

（明久：須川君とレイン！）

（焰：た、助かった・・・。）

『Fクラス	須川亮&レイン	VS	清水美春
化学	76点&100点	VS	41

二人の召喚獣が敵を斬り倒す。

先の戦闘で美春が消耗していたからだろう、あっさり終わった。

「島田、大丈夫か？」

「ええ、助かったわ須川君。本当にありがとう。補習の鉄じ・・・  
西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「ひうつ・・・。」

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い。  
そしてレイン、いい加減慣れろ。」

美並と違って召喚獣に止めを刺された美春は補習室に連行されることになる。これが通称『戦死』だ。

「お、お姉様！美春は諦めませんか！このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

「な、なんていう同性愛発言！警察呼ぶ？」

「・・・さあ？」

いろいろと危険な捨て台詞を残し、美春は補習室へ連行された。

「吉井、鍵宮。」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ。」

「そうしろ。そのままだと死ぬぞ。」

「吉井、鍵宮。」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ。」

「吉井いつ！」

「は、はいつ！」

「・・・ウチを見捨てたわね？」

「・・・記憶にございません。」

（焰：流石戦場。殺気が凄いな。・・・明久の後ろの島田からの。）

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

しばしの沈黙。

「死になさい、吉井明久！試獸召<sup>サモ</sup>・・・」

「誰か！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！（冗談じゃない！今補習室に連れて行かれたら、さっきのおかしな子と席が隣になっちゃうじゃないか！）」

「島田、落ち着け！吉井隊長は味方だぞ！」

須川が美波を羽交い締めにしてなだめる。

「違うわ！こいつは敵！ウチの最大の敵なの！」

「（・・・否定できない。）す、須川君、レイン、よろしく。」

「了解／＼なり。」

「こら、放しなさい須川、レイン！吉井！絶対に許さないんだからね！」

「は、早く連れて行って！なんかその禍々しい視線だけで殺されそうだ！」

「ちよつと、放し・・・殺してやるんだからあああつ！」

「・・・物騒だな、オイ。」

「よし、とにかく秀吉たちが補給をしている間、前線を維持するんだ！一歩も進ませないように！」

明久が怒号や悲鳴が飛び交う廊下で大声を張り上げる。

「させるな！前線さえ突破すれば、後ろにいるのは補給中の連中ばかりだ！攻め落とせ！」

明久の指示に対抗するかのよう、Dクラス前線部隊の指揮官らしき人物の命令が響き渡る。

一方本陣。

「・・・わ!・・・て!」

「お、美波のご帰還だね。なんかキレてるが。」

テストが終わり待機していたレオンが言った。

「このはちゃん、生きてる?」

「うふふ・・・燃え尽きた・・・あ、お花畑が見える。この川を渡れば行けるのかな。」

「その川は渡っちゃダメ!このはちゃん!戻って来て!」

「雄二、美波の話聞いたげて?こっちは蘇生かけないと。」

「おう、任せた。」

レオンは蘇生を始めた。

「須川、何が「吉井のヤツ、ウチのこと見捨てやがったのよ!」・・・わかった。」

雄二は納得した。

一方レオンはこのはの耳に近づき囁いた。

「このは、その川渡ったらキラと・・・や・・・できないよ?フェイトとかにキラ取られるよ?」

「それだけはダメえええええつ!(ガバツ!)」

このは、飛び起きる。

「ね、ねえレオン。な、何囁いたの？」

「私も、気になるなあ・・・」

「Oh、死者蘇生しようとしたら魔神まで蘇生させちゃった」

てへ と舌を出すレオン。

「何を言ったか教えて・・・？」

「無く理々。それよかフェイト？キラ守らなくていいの？」

「はっ！で、でもまって。私がキラを傷つけてしまえばキラは私のモノ・・・（ブツブツブツ・・・）」

フェイトは独り言を始めた！

「・・・・・・・・！！（ブシャアアアアア）」

ムツツリーニは鼻血を吹き出した！

「レオン、蘇生した・・・ってうおっ!？」

雄二は驚いた。

「ムツツリーニ、何故鼻血を!？」

「な、なにがあつたのじゃ!？」

「・・・・俺の聴覚を・・・嘗めるな・・・。」

「土屋、その状況だとその台詞、情けなく聞こえるわ・・・」

「高町！フェイトを止める!」

「うええ!？わ、私が!？」

「急げ!」

「う、うん！フェイトちゃん、もう戻ってきて！このままだと土屋君が！」

しかし。

「私が補習室行く覚悟でやるしかないのかな・・・？それでキラを傷つけられたら私のモノだと主張できるけど・・・（ブツブツブツ・・・）」

「ダメ！止まらないよ！」

「なら僕が。」

レオンがでる。

「そうするしか「静まりなさい（ドス）」！「あう！」  
レオンはフェイトの首に一撃加え、気絶させた。

「どうする？」

「キラの横に置いとけば？起きたときの反応楽しみ！」  
（全員：く、黒い・・・）

なお、そのキラは、

「すう・・・」

寝ていた。

おまけ  
囁いたのは？

「レオン、本当に何を囁いたの？」

「うい？デートとかキスとかができないこと、キラを他の誰かに取られるぞ、と。」

「本当・・・？」

「That's True！」

「レオン君、恐ろしい・・・」

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その4

**第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その3（後書き）**

感想など、お待ちしております！

返信とか後書きコーナー的なもの作った方がいいのかな・・・？



第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その4（前書き）

その4です！

どうにかできあがったので投稿しました！

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その4

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り二人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかない！援軍を頼む！」  
「藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやってくれ！」

明らかな劣勢だ。

「（本陣に援軍を要請したいけれど、そんなことをしたら作戦につき込む戦力がなくなってしまう。ここはなんとか僕らだけで持ちこたえるしかない！）布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！五十嵐先生側の方は総合科目の人と交代しながら効率よく勝負をするように！藤堂君は可哀相だけど諦めるんだ！」

『了解！』

クラスが明久の指示に従って陣形を組み始める。一応隊長として扱っているようだ。

「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

「何を待っているんだ！？」

Dクラスが意図に気づき始めた。

「た、大変だ！斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！」  
「せ、世界史の田中だと！？」

「Fクラスのヤツら、まさか長期戦に持ち込む気か！」

（明久：Dクラスの偵察部隊に、ウチのクラスにテストの採点でや

つてきた田中教諭が見つかったか！)

「吉井。Dクラスは数学の木下を連れ出したみたいだ。」

先ほど美波を連行した須川が報告した。

「(僕らの作戦のためにはそうそう簡単に突破されるわけにはいかない。僕が雄二から与えられた役割は唯一つ。とにかく前線を長く保つこと。その為には・・・) 須川君！」

「なんだ？」

「偽情報を流して欲しいいんだ。時間を稼ぐために。」

「偽情報？それは構わないけど、スグにバレるんじゃないか？Dクラスで前線の指揮をとってる塚本は声が高いから、うまくいつてもあつと言う間に混乱を収められてしまうぞ？」

「でも大丈夫。対象はDクラスじゃないから。」

「と言うと？」

「先生たちに流すんだよ。他の場所に向かってくれるように。」

「・・・なるほど。それは確かに効果的だ。」

「でしょう？」

「ああ。流す情報の内容は任せてくれ。確実に騙してみせよう。」

「うん。よろしく。」

須川はそう告げると、駆け足でこの場を離れていった。

「僕ら是一对一じゃ勝てないからね！コンビネーションを重視して！」

明久の指示が飛んだ。  
その思惑は彼しか知らない。

「だりやりやりやりやあああああああつ！」

「レイン、下がって！」

「わかった！」

「まだいける？」

「十分！まだ何十人はいける！」

「明久、人数が少ない場所があるぞ！」

「焔、そっちに行つて！」

焔、レインもまた、頑張っていた。

一方、Fクラス。

タツタツタツ・・・

「お、誰か走つてるな？（ガラッ）」

走っていたのは須川だった。

「参謀！」

「What's happen, Mr. Sugawara？」

「吉井隊長から偽情報を流してほしいと言われて。」

「内容は？」

「まだ考えておりません！」

「雄二、何か希望はある？」

レオンが雄二の方を向き、聞いた。

「いや、特に希望はないな。」

「他の皆は？」

他の全員にも聞く。

「私は・・・ないかな？」

「私も。」

レオンはそう聞いて少し考え出した。

「・・・参謀？」

「・・・よし、須川隊員、耳を貸しなさい。絶対効果がある内容だから。」

「はい。」

レオンは須川に耳打ちした。

「・・・これなら確かにやれます！」

「一言半句間違うなよ？」

「了解！」

須川はまた走っていった。

「雄二、僕もそろそろ暴れたいんだけど？」

「待ってる。切り札は、とっておくべきだろ？」

「そうだったな。わり、忘れてた。そんじゃ、キラ起こす。」

レオンが起こそうとして、一斉に、

『やめて／ろ！！』

と言った。

「今度は大人しくやるつもりだったのに・・・」

レオンは落ち込んだ！

「しょうがない、キラ、起きて。」

レオンはキラを揺すった。

「う・・・ん・・・。レオン。戦況は？」

「今は前線部隊が撤退、補給中。明久率いる中堅部隊が交戦中。」

「わかった。けど、なんでフェイトちゃんが横で寝てるの？」

「暴走した+あれの原因だから当て身かまして気絶させた。」

「あれって・・・な、なるほど。」

キラは見た光景に啞然とした。

「あ、それと、もちよつとフェイトの傍にいて？」

「いいけど・・・なんで？」

「慌てふためくフェイトが見たいから。」

「あ、あはは・・・。」

キラは苦笑するしかなかったとか。

「ところでレオン君、なんて内容なの？」

「それは・・・おっと、今は言わない。」

なのはレオンが指示した内容を聞いた。が、はぐらかされた。

「教えてくれてもいいじゃない。」

「放送までのお楽しみ、ということだ。」

「むう。でもレオン君、策士なんだね、本当に。」

「敵を騙すには先ず味方から、ってね。騙すわけではないけど。それに、僕は策士じゃないよ？あの二人に比べれば全然。」

「伏龍、鳳雛に比べれば、かな？そんなわけないと思うけど・・・」

「そうかな・・・。。。。元気にしてるかな・・・二人とも・・・。」

「

レオンの呟きは、誰にも聞こえなかった。

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その5

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その4（後書き）

今回、実はまたキャラ増やしたいなー、と思ったので二人ほど布石をしました。

いつ出するか、はDクラス戦後なのは確定です！

次回から後書きコーナーを作ろうと思います！

司会などはプリニーのアルス君に頼んであります。



**第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その5（前書き）**

その5です。

今回から後書きコーナーを作ります！

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その5

「塚本、このままじゃ埒があかない！」

「もう少し待っている！今数学の船越先生も呼んでいる！」

しばらく拮抗した状況が続けていると、Fクラスにとって好ましくない会話が聞こえた。

（明久：さてどうしよう。いよいよ僕も戦闘を行わないといけな  
かもしれない。）

明久がそう考えていると、  
ピンポンパンポン。

《連絡致します。》

校内放送が流れ出した。

（明久：この声は須川君！そうか、職員室に直接向かったら先生を  
呼びに来たDクラスの生徒に見つかる可能性があるから放送室に行  
ったのか！ファインプレイだよ須川君！）

《舟越先生、船越先生、》

（明久：しかも呼び出し相手は丁度話題に上がった船越先生。最高  
だよ須川君！）

《吉井明久君が体育館裏で待っています。》

（明久：・・・あれ？須川君？）

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。》

（明久：ひいひい！なんて危険なコトを！相手はあの舟越女史だよ？わかってる？婚期を逃して、ついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった、あの舟越女史だよ？確かに体育館裏に向かつてくれるだろうし、僕が来るまで何時間でもその場を離れないだろうけど、その分僕の貞操が大変なことに！）

「吉井隊長・・・アンタあ男だよ！」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

「明久・・・君、凄いよ！やっぱり隊長だ！」

前衛部隊の仲間たちが感動にむせびながら明久に握手を求めてくる。

（明久：違う、違うんだよ！僕はそんな指示を出してはいない！）

「おい、聞いたか今の放送。」

「ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちにきてるぞ。」

「あんなに確固たる意志を持つてる奴らに勝てるのか・・・？」

Dクラスからそんな呟きが聞こえてくる。

（明久：お願い！戦場に良い影響を与えないで！どんどん否定しにくくなってしまっ！）

「お前ら！明久の死を無駄にすんじゃねえぞ！」

「絶対に勝つぞ！」

「おおおおおおっ！」

（明久：ああっ！うちのクラスの士気にまで良い影響を！もうやめてえっ！）

「隊長、この勢いで押し返しましょう！」

「……………」

「……隊長？」

「……す、」

「す？」

「須川あああああつっ！」

明久の叫び声とともに、彼の恨み手帳にまた一つ名前が追加された。

放送があつてのFクラス。

ピンポンパンポン。

「……THREE、」

レオンはカウントを始めた。

《連絡致します。》

「……TWO、」

「レオン、何のカウントだ？」

《船越先生、船越先生、》

「……ONE、じきに結果がでるから、待ってて。」

「う、うん。」

《吉井明久君が体育館裏で待ってます。》

「キターーーーーー!!」

『あはははははははは！』

レオンの叫びとともに、Fクラスに笑いがかきました。

「れ、レオン、これ、最高！」

「これはまだ序の口！」

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。》

「ヒイイイイツハアアアアアアツ！やってやったぜえええ！」

「れ、レオン、お前、たった少しの時間であれをか！？」

「ぶくく・・・当たり前、前だよ。あはははは！」

笑いは止まらない。

「美波、どう？君の怨みを込めたこの放送は？」

「最高！」

ただ。

「よ、吉井君が・・・そんな・・・」

その一言が笑いを止めた。

「み、瑞希！？冗談だから、冗談！」

「え、あ、そうだったんですか！？」

「信じ込んでたみたいだね・・・」

「一途・・・なのかなあ？」

そして。

「ん・・・」

フェイト、復活。

「あ、目が覚めた？」

「キラ・・・？なんで目の前にいるの・・・あれ、私・・・キラが・・・目の前に・・・？・・・っ！（覚醒）きゃああああああっ  
！」

フェイト、絶叫。

「フェ、フェイトちゃん・・・？」

「フェイト、大丈夫？」

アリシアとなのはが聞く。

フェイトは顔を赤くして俯いたまま、

「キラに・・・寝顔・・・見られたよ・・・／／／  
と、言った。

「恥ずかしいことなのかな・・・」

「どうなのでしょう・・・？私は恥ずかしいですけど・・・。」

このは、優はそう話していた。

レオンは、

「フェイトの覚醒ドッキリ、成功！やたっ！」  
などと喜んでいた。

そして。

「よし、明久の死は無駄にするな！弔い合戦で行くぞ！」

「おおーっ！」

さらに。

【須川 あああああっ！】

明久の叫び声。

皆、また笑い出した。

「なのは、聞きたいコトがあるんだけど、いいかな？」  
「なに？」

「あの血の池って、誰が作ったの？」

フェイトはムツツリーニが作った血溜まりをみて言った。

「誰が・・・って、フェイトちゃんだよ？」  
「えっ!？」

なのはの答えに驚くフェイト。

そして。

「フェイトちゃん、すっごい妄想してたよ？心配するくらいだったよ？」

「う、嘘・・・」

フェイトは腰が抜けた。

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その6



### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その5（後書き）

「後書きコーナーっす！」

「はい始めましたッス。メインはオレ、アルスっす。」  
「アシストのレインです。」

「今回は最初だから説明だね。」  
「そうなるッスね。じゃあ、お願いするッス。」

「はいはい。まずはキャラ説明コーナー。専らメインはこれになるかな？読んで字のごとく、キャラ説明だよ。ただし、オリジナルに関して、だけど。」

次に、質問コーナー。これはくるかわかんないけど・・・きたらやるね。でも、一回につき二、三通くらいかも。ネタバレはしないからね。

最後に、結果紹介コーナー。これは行われている募集の現状を伝えるものだよ。」

「今回は結果コーナーっす。」

今募集しているのは二つあるッス。そのうちの「バカテスメンバー以外で誰に酔わせるか」について発表ッス！

現在の投票は一票で、アリシアに入ってるッス！  
まだまだ募集中ッス！

感想、質問も待ってるッス！」

「そしてSAKI様、ありがとうございます！」

「それでは次回、またお会いしましょうッス！」  
「それでは！」

第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その6（前書き）

その6です！少し長くなりました！

今後は原作と少し変えていきますので。

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その6

「よし、明久たちの援軍に行くぞ！」

「雄二、僕もOK？」

「レオン、お前だけだ。高町、先行していけ！」

「あ、うん！」

なのはは走っていった。

「俺たちも行くぞ！」

「おおおおおっ！」

「僕は残るんだ。まずフェイトちゃん起こさなきゃ・・・」

キラは残り、フェイトを起こした。

「フェイトちゃん？フェイトちゃん？起きて？」

「はっ！」

「気がついた？」

「う、うん。皆は？」

「明久君たちを助けに行った。」

「皆、大丈夫かな・・・？」

フェイトは心配していた。

キラ命といってもだ。

「大丈夫だよ。」

キラは無事を確信していた。

廊下。

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻ってこない！やられたか！？」

盛り上がった士気のまま戦うことしばし、残念ながら戦力差の影響が現れ始め、次々と景気の悪い報告が出始めた。

工藤・森川が戦死（補習室送り）。明久の部隊は残り7人になってしまった。

（明久：そろそろ限界だろうか？）

「吉井君、後少し持ちこたえて！今は私だけだけど、後ろに坂本君とかがいるから！」

明久が撤退を考え始めていると、そんな声が聞こえてきた。

明久たちの後方になのはの姿があった。

「援軍か！合流される前に吉井たちを全滅させろ！面倒なことになるぞ！」

（明久：マズい！まだ距離がある！合流する前に全滅させられたら僕らは全員補習室送りだ！）

「西村雄一郎、戦死！」

あと6人。

（高町さんは・・・後少し！）

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！Fクラス田中も行きます！」

（明久：くっ！田中君も捕まったか！）

『Dクラス

鈴木一郎

VS

Fクラス

田中明

化学

92点

VS

67

点

』

刃の餌食になる田中の召喚獣。

これで残り5人。

「ま、間に合った・・・」

なのは、到着。

そして、

「試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

（明久：レオン？どこに？）

「どんどん行くぞおっ！」

Dクラスも突っ込んでくる。

『Dクラス

鈴木一郎

VS

Fクラス

柴崎功

点	化学	25点	VS	66
---	----	-----	----	----

鈴木、撃破。

「先生、Dクラス笹島圭吾行きます！試験召喚！<sup>サモン</sup>」

（明久：更に相手が！疲弊している柴崎君じゃ押さえきれない！）

「Fクラス高町、笹島君に勝負を挑みます！試験召喚！<sup>サモン</sup>」

「Fクラスレオン、複数名の召喚獣を討伐しまあぁあつす！」

なのはが笹島に、レオンが多数の相手に戦いを挑んだ（レオンは特攻と言うべきだが）。

（明久：柴崎君が生き残った！）

『Dクラス	笹島圭吾	VS	Fクラス
-------	------	----	------

高町なのは

化学	99点	VS
----	-----	----

365点	『
------	---

『Dクラス	生徒x5	VS	Fクラス
-------	------	----	------

レオン

化学	計539点	VS	3570点
----	-------	----	-------

『

「なんだあの点数は！？」

「3000点オーバーだと！？」

Dクラスの生徒たちは驚きを隠せなかった。

「いつけえええつ！」

「おらおらあ！死神サマのお通りだあつ！」

なのは、レオンが倒した。

そのとき、中野が明久の所に突っ込んできた。

「吉井明久！その首級貰った！」

「負けてたまるかああつ！」

敵召喚獣が助走をつけて突っ込んでくるのに合わせ、

「試獣召喚！」

叫んだ直後、足元に現れる魔法陣。

そして現れる、特攻服に身を包んだ明久の召喚獣。

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久！貴公の相手を……………あ  
があつ！」

明久の肩にいきなりの激痛。

（明久：痛いっ！何も敵が突っ込んでくる正面に出てこなくてもいいじゃないか！痛みのフィードバックって結構辛いのに！）

「この部隊長はバカだ！俺一人で充分だから、皆は残りを！複数で  
囲んで戦え！」

バカにした言い方。

「くたばれ吉井！」

「そうはいくかつ！（ヒョイツ）」

「なっ！？」

豪快に転ぶ中野の召喚獣。

「（相手が驚いている今がチャンスだ！）ああっ！霧島さんのスカーフが捲れているっ！」

『なにいつ！？』

Dクラスの男子はおろか、Fクラスの男子、更にはDクラスの女子まで振り返った。

明久は次の行動に出る。注意が逸れた一瞬を利用して、近くの窓に思いつきり上靴を投げつける。

ガシャアアン！

破碎音とともに、窓が砕け散る。

「な、なんだ！？なにごとだ！？」

突然の出来事にその場の全員の注意が更に逸れた。

「うわっ！島田さん！そんなものをどうする気だよ！」

明久は自分の身の保身のための小芝居をうちながら、壁に備え付けられている消化器を掴み取り、安全弁を引き抜く。

ブシャアアッ！

景気の良い音と共に溢れ出る消化器の粉末。



「う、うわっ！ なんだ！？」

「ぺっぺっ！ こりゃ消化器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

視界が遮られた。

「島田さん、キミはなんてことを！」

明久、もう一芝居。

「Fクラスの島田め！ なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！ 彼女にしたいくないランキングに載せてやるからな！」

「そうだ！ 在学中には彼氏のできない状況にしてやる！」

「そんなのあつたんだ・・・」

「・・・でも、男らしくてステキ・・・。お姉様・・・。」

「ど、同性愛！？」

（明久：・・・なんだか骨の一、二本じゃ済まない事態を引き起こしてしまった気がする。す、済まない、島田さん。君の犠牲は無駄にしない！）

明久は少し自分の行動を後悔した。

「だあああっ！」

明久は粉を吐き出しつくして空になった消化器を天井のスプリンクラームがけてブン投げる。

ガン！ シュワアア・・・

スプリンクラーにあたり、作動した。水滴が辺りに舞う粉を落とし始める。

「待たせたな、吉井！鍵宮！五十嵐先生！Fクラス、近藤吉宗が行きます！試験召喚！」

『Dクラス                      中野健太                      VS                      Fクラス

近藤吉宗

化学

43点

VS

91

点

』

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

敵部隊長、塚本の撤退命令がすぐ近くから聞こえた。

「深追いはするな。俺達も明久の部隊や高町たちを回収したら一旦戻るぞ。」

こちらは雄二の指示。

「さて、無事なようだな。明久。」

「うん、まあね。」

「敵は・・・僕の敵はどこだあっ！」

「退いたぞ？」

「嘘っ！？」

彼らは部隊を立て直す為、荒れに荒れた戦場を後にした。

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その7

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その6（後書き）

「後書きコーナーっす！」

「後書きコーナー第二回ッス！」

「今回は前回と何も変わってないからキャラ紹介です。」

「今回は・・・優を紹介するッス！」

春原 優

16、

黒髪、髪の長さは肩にかかるくらい。

実力はAクラス中堅。

運動、料理は普通。

ランクは、翔子と同じCランク。（何のランクかはアニメで。）

キラが好きになった理由は後ほど。

「・・・以上ッス！」

「次回は・・・このは？あれ、オリキャラじゃないはずなのに・・・」

「

「とモノ2のキャラとはいえ名前だけだから・・・らしいッス。

詳しい紹介をするッスよ！」

「感想や投票など、お待ちしてまーす！というか、お願いします！」

「では、また次回ッス！」

**第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その7（前書き）**

その7です。

長くなりました。

今回は後書きコーナーはちょっと違います。

では。

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その7

教室に戻り。

「明久、よくやった。」

雄二がらしくもない言葉を口にした。

（明久：どういう風の吹き回しだろう？）

明久は疑問に思いながらその顔を見る。

晴れやかな顔だった。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな。」

「（やっぱり！僕の不幸を喜んでやがる！許せん！今すぐにでも窓から突き落としてやりたいけど、今の僕は雄二に構っている暇はない。もっと肅正を加えるべき重要な人物がいるんだから。）雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「（おおっ！もうすぐ戻ってきてくれるんだ！よし、落ち着け僕。大丈夫、大丈夫。包丁は家庭科室からパクってきたし、靴下には砂も詰めた。）やれる、僕なら殺れる・・・！」

「やるなっの。」

「即席でB」作んなって。」

明久はおかしかった・・・

「ちなみにだけど。」

レオンが言うが明久は聞いていない。

「あの放送を指示したのは僕だよ。」

「シャアアアッ！」

明久、レオンを襲う。

「あ、船越先生。」

「ちいつ！」

明久、掃除用具入れに隠れる。  
障害物を全て倒して。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか。」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、  
頃合じやろう。」

「・・・・・・（コクコク）」

「よし！Dクラスの連中を絶滅危惧種にしてやるぞ！」

「しなくていいと思いますが・・・」

「とにかく、Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

皆教室から出ていく。

（明久：僕も行きたいけど、船越女史がいるからいけない！くそっ  
！このままではレオンを取り逃がしてしまう！）

「あ、あのね吉井君。」

フェイトは明久に声をかける。

「船越先生が来たのは・・・嘘だよ?」

(明久：・・・嘘?)

そして。

ダアン!

「ひゃっ!?!」

「逃がすか、レオン!」

明久が掃除用具入れの扉を蹴り開け、廊下に飛び出した。そのとき、フェイトが驚いた。

「キラあゝ・・・怖かったよあゝ・・・」

「だ、大丈夫だから。(レオン、また敵作っちゃったな・・・)」

フェイトは半泣きでキラに抱き着き、キラは慰める一方、レオンを心配していた。

廊下。

「下校している連中にうまく溶け込め!取り囲んで多対一の状況を作るんだ!」

雄二の声が廊下に響く。



「そつちから回り込め！俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を……」

「日本史で……」

Fクラスの連中がDクラスの連中を取り囲んでいる姿が見られる。

『Dクラス塚本、討ち取った！』

一際大きな声があがる。

塚本が討ち取られたのだ。

しかし、明久には関係ない。

「レオン、どこだ！」

明久はレオンを探す。

「（奴は背が低いから見つけにくいけど……いたっ！）レオン、首を洗って……」

明久がレオンのところに駆け寄ろうとしたとき。

「援護に来たぞ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

「Dクラスの本隊だ！ついに動き出したぞ！」

Dクラスの本隊が動いた。

これで双方の主戦力が（Fクラスはそうでもないが）集まっていることになる。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本雄二を獲りにいけ！他のメンバーは囲まれている奴を助けに行き、高町や泉戸を討ち取るんだ！ただし、レオンには挑むな！」

平賀の号令の下、あつという間に雄二やなのは、このはの周りがDクラスメンバーで囲まれる。

（明久：雄二が敵に囲まれているから、僕がレオンに近づけない！くそおつ！僕の憎き敵があつ！）

「Fクラスは一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

よく通る雄二の声。

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追い詰めて討ち取るんだ！」

しかし。

「Dクラス大野姫子、Fクラス泉戸さんに古典勝負を挑みます！」  
「しまっ・・・！」

召喚される大野の召喚獣。

『Dクラス

大野姫子

VS

Fクラス

泉戸このは

古典

98点

VS

58点

□

点差がある。

(このは：ま、負けちゃう・・・)

「Fクラスキラ・ヤマト、泉戸このはの代わりとしてこの勝負を受  
けます！試獣召喚<sup>サモン</sup>！」

キラがついに参戦した。

『Dクラス

大野姫子

VS

Fクラス

キラ・ヤマト

古典

98点

VS

4586点

』

「Fクラスフェイト・T・ハラオウン、Dクラス青野君に総合科目  
で勝負を挑みます。試獣召喚<sup>サモン</sup>！」

『Dクラス

青野洋一

VS

Fクラス

フェイト・T・ハラオウン

総合科目

1035点

VS

3865点

』

フェイトも同時に参戦をした。

「なのは。大丈夫？」

「ありがと、フェイトちゃん。文系だったから危なかったあゝ。」

「大丈夫？」

「キ、キラ・・・君・・・。」

キラ、フェイトがこのは、なのはへと駆け寄る。

「なんだ、あの二人は!？」

「Aクラスが二人!？」

「ヤマトの召喚獣、なんて姿なんだ!」

「あんな姿、見たことないぞ!」

キラ、フェイトの登場に、慌てだすDクラスの本隊。

「Fクラスの皆はすぐに退いて!この戦域にいるDクラスの人に総合科目で挑ませていただきます!」

キラ、一対多の宣言。

「向かうな!あいつには敵わない!」

しかし、退いている生徒を追うDクラス。

『Dクラス	生徒×15	V S
Fクラス	キラ・ヤマト	
総合科目	計1470点	V S
45829点		』

「やめろ、もう!」

そうキラが叫んだ瞬間、キラの召喚獣の腕輪が光った。

「なっ・・・」

その声が聞こえた頃には、突っ込んでいった15人全員の召喚獣が両肩と腰、手に持つライフルの計五門から放たれた閃光によって、

全滅していた。

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その8

### 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その7（後書き）

「後書きコーナーっす!」

「はい始まりました、後書きコーナーっす!」

「今回は予定を変更しまして・・・」

「なにかあるツスカ?」

「実は前（3/14）に山田花太郎さんの小説の感想におじゃましたときに、レオンのこと伝えて、お見舞いにつて・・・これを・・・貰ったんだ・・・。」

「な、なんスカそれ!？」

「シヤマル&リフィル作クッキー・・・」

「さ、さあそんなことでレオンに来ていただきましたツス!」

「お見舞い貰ったって聞いたけど・・・」

「うん、これ。」

「クッキー?ま、いったただっきまーす!」

「おお、豪快にいったツス。」

「ふむふむ。表面はザクザク、中はぐちゃくちゃ、甘すぎず、辛すぎる味わいが・・・んゴパツ」

「ぎゃああああッス!殺人ツスカ!？」

「だ、大丈夫!？」

「ふ、大丈夫。あの川を渡ればいいのだろう?」

「だめー!（ドスッ!）」

「はっ!」

「あ、蘇生したッス。」

「い、今なら瑞希の化学兵器も大丈夫な気がする……。レイン・  
・覚悟。」

「え、ちょ、まっ……。」

「インフェルノデバイダー!」

「わああ!」

「許さん!」

「ま、また次回おあいしましよーッス!」

**第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その8（前書き）**

その8です。

今回は少し短いです。

では、どうぞ。



### 第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その8

そのころ、明久は。

（明久：あ、あれは！近衛部隊がないほどに防備が薄い！チャンス！）

明久は素早く平賀の下に駆け出す。

「向井先生！Fクラス吉井が・・・」

「Dクラス玉野美紀、試獣<sup>サモン</sup>召喚。」

「なっ！近衛部隊！？」

突如現れたのはDクラスの女子。

（明久：いくら下校中の生徒に紛れているとは言え、やっぱりFクラス所属に見えるヤツの動きには注意しているのか！）

「残念だったな、船越先生の彼女クン？」

勝ち誇った平賀の顔。

「ち、違う！あれはレオンが勝手に・・・」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん、彼に祝福を。」

「わかりました。」

「ちくしょう！後一步でDクラスを落とせるのに！」

「何を言うかと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの間人が近づいたら近衛部隊が来るに決まっている

だろう？ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど。」

平賀がフンツと鼻を鳴らして明久を一瞥した。

（明久：ううっ、ム力つく！）

明久はそれに対抗して、片目をつむって応えた。

「それは同感。確かに僕には無理だろうね。だから・・・」

もったいぶって一息入れて、

「姫路さん、よろしくね。」

「は？」

「何をいつてるんだ、この馬鹿は？」といった顔をしている平賀。

「あ、あの・・・」

そんな彼の後ろから、申し訳無さそうに瑞希が肩を叩いた。

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど？」

今だ現状を理解できていない平賀。瑞希がFクラス所属だなんて普通は誰も思わない。

「いえ、そうじゃなくて・・・」

もじもじと言いつらそうに体を小さくする瑞希。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします。」  
「あ、こちらこそ。」

「その・・・Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます。」  
「・・・はあ、どうも。」

「あの、えっと・・・さ、<sup>サモン</sup>試獣召喚ですつ。」

『Fクラス                      姫路瑞希                      VS

Dクラス                      平賀源二

現代国語                      339点                      VS

129点                      』

「え、あ、あれ？」

戸惑いながらも召喚獣を構えさせ、相對する。

「ご、ごめんなさいっ!」

その獲物に似合わず素早い動きで相手に肉薄する瑞希の分身。  
相手の反撃も許さず、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの決着となった。

それまでの戦闘ライン。

「フェイトちゃん、皆退いた？」

「レオンと吉井君以外は!」

「わかった!・・・っ痛っ!」

「!」

キラの召喚獣がなにがしらダメージを受けたのだろっ、キラの頬に傷がついて血が流れていた。

「ええっ！？ちょ、キラ君！？」

「やっぱりフィードバックが強いね・・・」

「俺や明久以上に強いな。」

キラや焰、優が話していたら、

「・・・・・・・・誰？キラを傷つけたのは？（ゴゴゴゴゴ・・・）」

フェイトの後ろに修羅がいた。

「レオン！フェイトを止めてくれ！あれだと誰か殺しかねん！」

「くっ！全員、フェイトと僕の間、それと後ろに立たないで！最悪  
気絶するぞ！」

レオンがそう叫んだ瞬間、道が開いた。

「フェイト（バチバチバチバチ・・・）・・・少し（バチチチチチ・  
・・・）・・・気絶してろおおおっ！（ドオオオオオオン！）」

音が聞こえた瞬間、フェイトの前にレオンがいて、フェイトがそのまま前のめりに倒れた。

「レ、レオン、一体何をしたのじゃ！？」

「気絶させた。腹部に一撃食らわせて。」

「えげつないのお・・・」

その一瞬で全員が、

「ヤマトに怪我させないようにしよう・・・」

と、思ったとかどうか。

次回、第三問

「初陣と犠牲と召喚戦争」

その9

第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その8（後書き）

「あ、後書きコーナーっす・・・」

「前回、レインがもらったお土産で、大変なことになったッス。それで、今の現状は・・・」

「ガントレットハーデイス！」

「ほぼ二人になるっ！」

「カーネージ・・・シザーッ！」

「超スピード！」

「・・・こんな感じになってるッス。」

「今回は泉戸このはについて、説明するッス。」

泉戸 このは

16、

姿はととモノ2の戦士科女子の姿だと思っていただければ。  
ただ、髪は長めで、腰くらいはある。  
実力は紹介で述べたとおり。

フェイトにある部分で劣等感を持っている。

キラに好意を持った理由は別の小説で。

「・・・以上ッス。次回は焰を紹介するッス。」

「どつつっせい！」

「ごぶっ！」

「レイン・・・落ちたッスね。じ、じゃあ今回はこのへんで。また次回ッス〜！」

三月語です。

新しくモンスターハンターものの小説を書き始めました！

そちらの方もよろしく願います！

第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その9（前書き）

皆さん、お久しぶりです！

お待たせしました！

そして、Dクラス戦終了です！

そのために長くなりましたが・・・

では、どうぞ！



### 第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その9

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおおおつ！』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台とおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな。」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「レオンも凄い奴だぜ！」

「坂本万歳！レオン万歳！」

「姫路さん愛しています！」

代表である雄二、参謀を勤め果たしたレオンを褒め称える声がいたるところから聞こえてきた。

さっきまで雄二やレオンがいた方を見ると、がっくりとうなだれているDクラス生徒たちの奥でFクラスの皆に囲まれている姿があった。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつか。」  
「恥ずかしいから。止めてくれない？」

頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見る雄二と頭を掻くレオン。  
照れている。

「坂本！握手してくれ！」  
「レオン！俺と握手を！」

二人はもう英雄扱い。この光景を見れば、どれだけ皆が教室に不満があっただかがわかる。

「レオン！」  
「明久？」

明久は颯爽と駆け寄って、

「僕もレオンと握手を！」

手を突き出した。

「ぬおおっ！」

ガシッ。

「雄二・・・！どうして握手なのに手首を押さえるのかな・・・！」  
「押さえるに・・・決まっているだろうが・・・！フンッ！」  
「ぐあっ！」

手首を捻りあげられ、悲鳴を上げ持っていた包丁を取り落としてしまふ明久。

「・・・。」  
「・・・。」

「雄二、レオン、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね。」

「・・・。」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな全身にとてつもない痺れがあああっ！」

「今、何をしようとした？」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を全身が素晴らしく痺れるううっ！」

「誰かー。ペンチあるかー？あれば持ってきてー。」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「・・・チッ。」

（明久：か、解放された・・・。尋常じゃないほど痛かった・・・。  
というか、ペンチを何に使う気だったんだろう？）

「・・・ブツブツ・・・。」

なにかつばやくレオン。

「・・・生爪・・・。」

（明久：二度と逆らわない！）

その遙か後ろでは。

「ねえ鍵宮君、キラ君・・・どうしたの？」

「保健室連れてったが？」

「今頃、屋上にいるね・・・。」

「私、連れてくる！」

「わ、私も！」

フェイト、優が屋上に向かって走って行った。

「あの歌、歌ってるよ・・・きつと。」

「レイン、なにか知ってるの？」

レインがキラについてつばやいたとき、アリシアが聞いた。

「うん。たまにだけど、歌ってる時があるの。聞いていたけど、かなり悲しい曲だったな・・・。」  
「私たちも行ってみよ?」

なのは、アリシア、このはも行った。

S i d e 屋上

屋上には、キラがいた。

「・・・・・・・・・・。・・・・・荒れ果てた道、傷付いた身体・・・・・・・・・・  
羽を休める、ことはいらぬ・・・・・・・・。」

そして、歌っていた。

悲しい雰囲気のを。

「・・・・・・」 (カチャ・・・・) キラ・・・・?」っ! フェイトちゃん・・・・?」



そして屋上に一つの歌が聞こえた。

「凄い悲しい歌だよ……。ぐすつ。」

「涙が……。止まらない……。」

ドアの後ろで聞いていたなのは、アリシア、このはは、その歌の雰  
囲気に泣いていた。

S i d e e n d

「まさか姫路さんやヤマト君がFクラスだなんて……。信じられん。」

ヨタヨタと歩み寄る平賀の声。

「あ、その、さっきはすみません……。」「

瑞希が違う方向から駆け寄る。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

平賀が可哀相に見える。だが、仕方がないのだ。勝てば英雄、負ければ戦犯。それが代表なのだ。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

明久はそう聞いた。

「いや、その必要はない。」

雄二は誰もが予想し得ない返事をした。

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ。」

それが当然だと言っかのように告げる雄二。



「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに。」

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

打倒Aクラス。それが明久と雄二の到達点。

「でもそれならなんで標的をAクラスにしないのさ？おかしいじゃないか。どうせ敵に回すのだからこんな回りくどいことをしなくても・・・」

「少しは自分で考えたら？そんなだからさ、明久は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて言われてるんだよ？」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」「レオン、近所の小学生じゃなかったか？」

「・・・人違いです。」

「まさか・・・本当に言われたことがあるのか・・・？」

（明久：み、見ないで！そんな目で僕を見ないで！）

明久に対しある種の畏怖の目を向ける雄二。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。」

「それは俺達にはありがたいが・・・それでいいのか？」

「もちろん、条件がある。」

当然だ。

「一応「一応などと言ったあ、おのれは何様のつもりだ?」・・・聞かせてくれ。」

レオンが脅したため、平賀は言い方を改めた。

「レオン、脅すな。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ。」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

「Bクラスの室外機か。」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう?」

その話もごもつともである。

事故に見せられれば嚴重注意で済み、三ヶ月もの間最低設備で過ごすという状態から逃れられるのだから。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「雄二の作戦の一つでしょ？」

「ああ。次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。」

「・・・そうか。ではこちらにはありがたくその提案を吞ませて貰おう。」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていていいぞ。」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ。」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っているだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。」

そしてDクラス代表、平賀は去っていった。

「さて、皆！今日はご苦勞だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

『あじゃじゃしたー。』

雄二が号令をかけると、皆雑談を交えながら帰りの支度をしに行った。

そこへキラたちが戻ってきた。

「あ、キラ！ケガ、大丈夫？」

「あ、うん。平気だよ。」

「ところで高町たちはなぜ泣いておるのじゃ？」

「ひつく・・・だつてえ・・・」

「キラが・・・キラがあ・・・ぐすつ。」

なぜ泣いているのかを泣きながらなのはとアリシアが説明した。

「それは・・・泣ける話じゃのう・・・」

「だよね・・・ひつく・・・」

「も、もう泣き止んで、ほら。」

「でも・・・」

「ふええええ・・・」

キラが宥めようとするも、全く意味は成さない。  
一番酷いのは優だ。号泣と言っても過言ではない泣き方になっている。

「キラの言つとおりじゃ、泣き止んだ方がよいぞ。」  
「うん・・・  
ぐすつ・・・」

なのはやアリシアは泣き止んだが、優だけはまだ泣き止んでいなかった。

「雄二、僕らも・・・」

明久が雄二に帰ろうと言おうと雄二に話しかけたが、雄二は瑞希と話していた。

瑞希はまっすぐに雄二を見ていた。

二人とも明久に気付いていないかのようだ。

（明久：あれ？もしかして・・・僕は存在を認識されていない？まさか眼中にないとか？ちくしょう！それだったら・・・スカート捲り放題じゃないか！）

『チャンスだぜ明久。パパッと捲っちまえよ。あんな可愛い子のスカートの中なんて、そうそう拝めるもんじゃねえぜ？』

（明久：はっ！？お前は僕の中の悪魔！？くそっ！僕を悪の道に誘惑しに来たな！舐めるなよ！僕の正義の心が負けるものか！）

・・・。  
・・・。  
・・・。

（明久：・・・あれ、天使は？僕の中の天使は！？ちよつと、出てきてよ！これじゃ僕には悪の心しかないみたいじゃないか！）

明久が悶絶しているうちに雄二と瑞希の話が終わったらしく、雄二が明久に近寄ってきた。

明久は、自分の天使が一向に出てこないことに疑問を感じていた。

「さて明久。そろそろ帰るぞ。」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの?」

「ああ。これで決心も固まっただろうし、な?」

「ひゃっ!?!」

雄二が問いかけると、ボンツと音が聞こえてきそうなほどに瑞希の顔が真っ赤になった。

「ふーん、そつか。よくわからないけど、それじゃ帰ろうか。姫路さん、またね。」

「あ、はい!さようなら!」

顔を赤くしたまま見送手をブンブンと振る瑞希に見送られて、明久と雄二は教室を後にした。

『・・・捲つても、いいんじゃないかな?』

(明久：僕天使、出てくるの遅いよ!しかもスカート捲り肯定してるし!)

ピリリ・・・

キラの携帯になにかが届いた。

「メール？誰からだろ・・・」

From レオン

Subject 待ち人あり

「れ、レオン・・・いつの間に帰ってたんだ・・・でも、待ち人  
って言われてもな・・・」

キラは内容を見た。

本文

今玄関の前にめっちゃ人がいる。

僕鍵ないから早く来てくり。

あと、妹、Sもいるよ。

「妹、Sって・・・あれ？エルルは料理学校行ってるはずだしアル  
ティは管理局にいたはず・・・。とりあえず急がないと！皆、ゴメ  
ン！先に帰るね！」

「え、ちょ、キラ！」

行かないで、と言うようなフェイトを置いて、キラは帰った。

「・・・もう。私だけじゃどうしようもないよ・・・」

フェイトは残されたメンバー（なのは・このは・アリシア・優）をどうまとめるかに困っていた。

「それにしてもさ。」

「ん？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンなら他の方法でも壊せたと思うけど？」

「ああ、そのことか。」

帰り道。

「理由は他にもある。クラスの皆を試召戦争に慣れさせる為だとか、他のクラスにプレッシャーを与える為だとか、自信をつけて士気を上げる為だとか。」



「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」  
「目的はあくまでAクラスだからな。Dクラスの設備を手に入れることで一部の奴らが満足して試召戦争に反対し始めるかもしれないだろう？ そうならない為と、不満によるモチベーションを維持する為だ。」

まさに、神童再び、という感じだ。

「Aクラスに勝てるかな？」

「無論だ。俺に任せておけ。」

「・・・ありがとう。僕のわがままの為に。」

「別にそんなわけじゃない。試召戦争は俺がこの学校に来た目的そのものだからな。」

ふと雄二が遠くを見る。

「目的の為に、明久にだってきっちり協力してもらうからな。とりあえずは明日の補給テストで。」

「・・・ぐう。（そういえば明日はテストを受けるんだった。）」

「ゲームばかりしてないで、寝る前に少しくらい勉強しておけよ？」

「はいはい。教科書くらいは読んで・・・ん？」

明久は自分の鞆の軽さに気付いた。

「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」  
「・・・あほ。さっさと取って来い！」  
「うう・・・。んじゃ、先に帰っていいよ。」  
「もちろんだ、待ってるわけがないだろう。」  
「わかっていたけど、薄情もの。」

明久はあと少しで家に着くところで学校へ引き返した。

「あのあほ。・・・ん、キラ。どうしたんだ、そんなに慌てて。」  
「はあ、はあ・・・さっきレオンからメールが来て・・・はあっ・・・」

キラは雄二にメールを見せた。

「待ち人ってなあ、おい。しかも妹、Sなんてひとくくりにするか？」  
「レオンだからね・・・」  
「それなら仕方ないな。早く行ってやれ。」  
「ありがとう、また明日！」

キラは再び走って行った。

「忙しいな。さて、俺も帰るとするか。」

雄二も帰路についた。

「はあ、やれやれ。」

明久は学校に着いた。

「たっだいまー。．．．なんて．．．」

「よ、吉井君!？」

「あれ、姫路さん？」

我が家のように入った教室にいたのは、瑞希がいた。

「どどどどうしたんですか？」

瑞希は慌てている様子。

明久は座っている席(?)を見た。

卓袱台の上には可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。

「あ、あのっ、これはっ・・・」

（明久：まるで雄二へのラブレターに使うような便箋と雄二へのラブレターに使うような封筒を用意しているみたいだけど、使い道がわからない。）

『現実を見る。明らかにラブレターだ。』

（明久：黙れ僕の中の悪魔！僕はそんな虚言に騙されはしない！だいたい、そこまで言うからにはこれがラブレターだという証拠はあるのか！？）

「これはですね、そのっ・・・」

「うんうん。わかってる。大丈夫だよ。」

「えっと・・・ふあっ!？」

卓袱台につまづき転げる瑞希。

その拍子に隠そうとしていた手紙が明久の前に飛んできて、その一文が目に入る。

《あなたのことが好きです。》

「・・・・・・・・。。。」

『・・・これ以上ない物的証拠だと思うが?』

「・・・・・・・・。。。」

『わかっただろう？これが現実だよ。』

「・・・・・・・・。」

『さ、諦めて認めようぜ？』

明久は飛んできた手紙を綺麗にたたみ、瑞希に返した。

そして一言。

「変わった、不幸の手紙だね。」

『コイツ認めない気だ！』

（明久：何を言っただこの悪魔め！もう騙されないからな！？）

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど・・・」

「そんなことしないで、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。ああ大丈夫。スタンガンなら隣のクラスの山下君に借りてくるから。」

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから。」

「嘘だ！それは不幸の手紙だ！実際に僕はこんなにも不幸な気分になっっているじゃないか！」

「吉井君。」

瑞希が暴れる明久を抑えようとして手を握っていた。

「落ち着いてください。そんなに暴れると身体をぶつけて怪我をしますよ?」

明久の中に望まない現実が浸透し始める。

「・・・仕方ない。現実を認めよう・・・」

がつくりと膝をつく明久。

「その手紙、相手はウチのクラスの・・・」

「・・・はい。クラスメイトです。」

顔を真っ赤にしながらも迷いなく答える瑞希。

相手は雄二という、明久の考えは確定した。

「・・・そっか。でも、そいつのどこがいいの?そりゃ確かに、外見はそれなりだとは思っけど。」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、もちろん外見も好きですけど!」

「憎いっ!あの男が心底憎い!」

「そう、ですか・・・?」

「うん。外見に自信のない僕には羨ましくて。」

「え？どうしてですか！？とっても格好良いですよ！私の友達も結構騒いでいましたし！」

「え？ホント？」

（明久：自分で言うのもなんだけど、なんて酔狂な友達なんだ。）

「はい。よくわからないですけど、坂本君と二人でいる姿を見ては『たくましい坂本君と美少年の吉井君が歩いているのって絵になるよね』ってよく言っていました。」

「良い友達だね。仲良くしてあげてね。」

「『やっぱり吉井君が受けなのかな？』とも。」

「前言撤回。その友達とは距離をおこう。姫路さんにはまだちょっと早いと思う。（僕が雄二と・・・おえっ。）・・・それにしても、外見もつてことは、中身が良いの？」

「あ、えーっと・・・はい・・・」

「そうだね。肝臓とか頑丈そうだね。」

高く売れそうである。

「それは身体の中身です。」

「じゃ、まさかありえないとは思っけど、そいつの性格が？」

「ありえなくありませんっ！」

瑞希にしては大きな声。

「（そこまで雄二に好意を寄せているなんて・・・）・・・そいつ

の性格のどこがいいの？」

「や、優しいところとか・・・」

「（や、優しい？僕を騙してDクラスにボコらせた、あの性格が優しいと？）今から番号を教えるから、メモの準備はいい？大丈夫、とっても腕の良い脳外科医だから。」

「別に気が変になったわけじゃありません！」

（明久：そんな馬鹿な！？あんな性格を優しいと評するなんて、姫路さんはどんな酷い環境にいたんだ！？）

「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで・・・私の憧れなんです。」

その真剣な口調からは、茶化すなんてできそうにもない程の強い想いが感じられた。

「その手紙・・・」

「は、はい。」

「・・・良い返事が貰えるといいね。（とても邪魔できるワケがない。そこまで好きになった相手なら、クラスメイトとして応援してあげたいくらいだ。）」

「はいっ！」

うれしそうに笑う瑞希を見て、明久は雄二を心の底から本当に羨ましいと思った。



次回、第E X問 「客と妹と同居人」

**第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その9（後書き）**

今回でDクラス戦終了しました！

次回はEX話で待ち人（Byレオン）の話をします！

次回をお楽しみに！

## 第EX話「客と妹と同居人」（前書き）

今回は番外編です！

前からお知らせしていたメンバー、それと突発的に追加したメンバーがいます！

では、どうぞ！

## 第EX話「客と妹と同居人」

明久が瑞希と話していた頃。

「はあっ、はあっ・・・ね、レオン・・・」  
「近くまで来て待ってたよ。」

キラは自宅の近くまで来ていた。

息絶え絶えだが。

「ここから客は見えると思うけど？」  
「き、客？・・・あ、あの尖った帽子やポニーテール、特徴のあるあの髪型は・・・」

キラは急いで階段を駆け上がった。

「や、やつぱり・・・」  
「あ、義兄さん！」  
「久しぶりっ！」

キラに最初に気がついたのはアルティとエルル。

「ご、ご主・・・じゃなくて・・・、キラ！」

「え、ええと・・・」

「キラ！」

「（兄様／キラ）、お帰りなさい！」

「はわわ、ごつ、ご主人様、お帰りなさいまちなえ！」

「朱里ちゃん、ご主人様はダメだって・・・」

桃香、愛紗、凧、蓮華、流琉、朱里、雛里がそれぞれの言葉でキラを迎えた。

「あ、あの・・・さ、どうして皆がここに？・・・というか、僕の家なのに僕が客になった気分だ・・・」

「エルルと流琉以外は皆長期間休暇を貰ったから、皆でこっちに来たんだ」

桃香がキラに説明する。

「エルルと流琉以外は・・・って、じゃあ二人は？」

「私は飛び級しすぎて卒業扱いになっちゃって・・・」

「私はもともとエルル姉様と一緒にいましたから・・・」

「つまり、行く当てを無くしたから来た・・・」

『（コク。）』

二人の話を聞き、キラは自分の意見を言う。

その意見に肯定の意を示すように頷く二人。

「ねえキラ？上がった方が楽じゃない？」

「あ、そ、そうだね。」

キラはレオンに言われて慌てて鍵を開けた。

『お邪魔しま（ゝ）す（失礼します・・・）！』

家の中。

「皆は、これからどうするの？」

突拍子にレオンが聞いた。

「私は義兄さんと同じところへ行きたいなあ・・・」

「あ、私もいいかな!？」

「私もゝ!」

アルティが自分の要望を言い、エルルと桃香がそれに同意する。

「学園長の許可が貰えるならね……。愛紗と凧と蓮華はどうするの？」

「私は……。一緒に行きたいわ……」

「私もです……。ですが……」

「どう名乗ればいいのか……」

全員が同じ悩みを持っていた。

「真名は……。ダメだね……。一番ごまかしやすいといえませんがしやすいけど……」

「それ、いいと思うけどなあ……」

「ダメです！真名を呼ばせるなど！」

キラが真名の使用を考えたが否定。

桃香がすぐに意見を肯定するが、愛紗がダメだしをした。

「真名なら史実の人物と被らないからいいんじゃない？」

「うっ……。それはそうだけど……」

「我慢は大事。この世界は皆の世界と違うんだから。」

「……。朱里と雛里はどう思う？」

「えと、そのほうがいいと思いますよ。」

「わ、私もそう思います・・・」

「・・・軍師がそう言うならば、仕方ないな。」

レオンの意見に言葉を詰まらせる蓮華。

さらに追い撃ちをかけようとして、愛紗を追い詰める。

愛紗は朱里・雛里に意見を求め、あっさり肯定され、意見に乗ることにした。

「学校行く組を優先するね。桃香と愛紗と蓮華は楽。姓と真名で名前作れるから。問題は・・・」

「わ、私ですか・・・？」

レオンは、凧を見据えた。

凧は急に振られたために少し戸惑った。

「だって、真名が1文字しかないんだよ？」

「うぐ・・・」

レオンが凧を弄っていた間。

「楽・・・進・・・文・・・謙・・・。ダメだ、名前が思い浮かば



ない・・・」

キラが風の偽名を考えていた。

「一番マシなのは楽文だと思うよ？」

「楽文　風か・・・」

「わ、私はそれでいいです！」

レオンが出した案に焦りを見せつつも肯定した風。

「とりあえず、学校行く組はこれで決定だね。後は留守番組だけど、・・・桃香たちみたいなのでごまかしきくね。OK？」

『（コク）』

レオンが留守番組の名前案を出し、その同意は得られた。

「それで、この荷物は・・・」

「え、これ？服とか料理道具とか。」

「いや、中身じゃなくて・・・。」

「一緒に住むからだよ？」

「・・・それはそれで困る気が・・・」

ピンポン。

「誰だろう？はい！」

キラは玄関に向かった。

カチャ。

「あれ、フェイトちゃん？どうしたの？」

「さっきクロノから連絡があって、アルティたちがここに……来たっ……て……」

来ていたのはフェイトだった。

フェイトは玄関を見て言葉を詰まらせた。

「ふ、フェイトちゃん？」

「キラ、なんで女の子の靴が沢山あるの！？……もしかして私、捨てられちゃうの！？」

「す、捨てるって……」

「捨てないで！お願い！」

「いや、なにか勘違いしてない？」

「キラ〜？なに騒いでるの・・・ってフェイトか・・・」

「蓮華あ〜！なんなのこの靴はあ〜！？私、私・・・捨てられちゃうの!？」

「あ、あの、フェイト・・・落ち着いて？捨てられないから!」

「じゃあこの靴は!？女の子の靴は誰のなの!？」

「全員知っている人のだから!」

フェイトの暴走を止めるのに10分かかった。

翌日から桃香・愛紗・凧・蓮華・アルティ・エルルは学校へ行くことになった。

「・・・これをどう説明すればいいんだろうか・・・。FFFが気になるな・・・」

キラは明日以降のこの事態の説明に困っていた・・・。

「ところでさ、来たのはこれだけ？」

「いえ、天和と蒲公英が来てますが・・・」

「いないよ？」

「探してきます!」

愛紗と凧が二人を探しに行った。

数分後、連れて来た。

「ごめんね。」

「あはは・・・」

「悪気ある？」

二人を責めるレオン。

天和が涙目になってしまったので皆で止めた。

ついでに天和が学校に行く組に加わった。

次回、第四問 「編入と脱走と必殺料理」

## 第EX話「客と妹と同居人」（後書き）

名前の紹介です。

基本的には、姓 真名としました。

例：朱里の場合

諸葛 朱里

こんな感じです。

凧の場合は、ちょっと特殊です。

彼女だけ捻りました。

次回からちゃんと出ますし、Bクラス戦までになります。

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その1（前書き）

今回、また新キャラが出ます！

ちなみにそのキャラ、布石ありましたが気づいた人いますでしょうか？

では、どうぞ！

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その1

Dクラスとの戦いがあつたその翌日。

明久はいつも通り学校に向かった。

「おはよー。」

「おつす、明久。」

「おう明久。時間ギリギリだな。」

「ん、おはよう雄二、焰・・・あれ、なんか皆ソワソワしてるね。なにかあつたの？」

明久が教室に着いた時、雄二が英語の教科書を持ったまま、焰が寝転がったまま挨拶をした。それを返した明久。同時にクラスメイトの雰囲気がいいつもと違うことに気付く。

「俺は知らん。」

「あー、これな。今日、転入生と編入生が来るらしいからな、女子だと願っているんだよ。」

「なるほど・・・あ、雄二、皆には何も言われなかったの？」

「ん？何がだ？」

「Dクラスの設備のこと。折角勝ち取ったのに占領しないから普通は不満に思うよ？」

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない。」

「ふーん。」



クラスメイトが素直に言うことを聞いたのは、昨日の雄二の働きを評価したからだろう。

「それよりお前らはいいいのか？」

「何が？」

「は？」

「昨日の後始末だ。」

（明久：はて、昨日の後始末……。ああ、レオンを殺ることか。）

明久は雄二の話にレオンのことに気がついた。

焰は別のことで顔が青ざめた。

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされたり黒焦げにされると分かっていながら行動するなんてありえないよ。」

「いや、レオンの始末じゃなくて・・・」

「明久、二人で大人しく殺されようぜ・・・」

「一体何が言いたい・・・」

「吉井っ！鍵宮っ！」

「ぐぶあっ！」

「おぶうっ！」

明久の台詞が突然の拳で遮られる。

焰は同時に殴られた。

「し、島田さん、おはよう・・・」

「よ、よお、島田・・・」「おはようでもよおでもないわよっ!」

随分といきりたっている美波。

倒されている明久の位置からは美波のパンツが見えそうだ。

焰の位置からは確実だ。

「アンタたち、よくも昨日はウチを見捨ててくれたわね! 吉井、ア  
ンタはそれだけじゃ飽き足らず、消化器のいたずらと窓を割った件  
の犯人に仕立てあげたわね・・・!」

(明久：・・・おお、そういえば。)

「・・・酷いな、お前。」

「おかげで彼女にしたいくないランキングが上がっちゃったじゃない  
!」

「そんなんあつたんかい・・・」

(明久：まだ上がる余地があつたことが意外だ。)

「・・・と、本来は掴みかかっているんだけど、」

美波が急に冷静になる。

（明久：掴む前に殴っているから充分だと思っただけど・・・）

「アンタたちにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる。」

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ。」

「いや、そうじゃなくてね？」

「ん？それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど、」

「・・・おいおい、明久死ぬな、これ。さらば、明久。お前のことは忘れない。」

「え！？な、何々！？何で別れの言葉を！？」

美波が楽しそうに、本当に心から告げる。

焰は明久の命の終わりを悟ったらしく、すぐに別れの言葉を言った。

それに焦る明久。

「監督の先生、船越先生だつて。」

明久はそれを聞いた瞬間、扉を開けて廊下を疾駆した。

「あと鍵宮、アンタには「嫁」が来てるわよ。」

「はあっ！？そんなのいるわけ「焰」！！」・・・な・・・い・・・」

スパァン！

勢いよく扉が開けられた。

開けられた扉の先にいたのは自称「焰の嫁」の水河 涼だった。

「ほゝむゝらあゝ！」

ドスッ！

「ねこげんきつ！？」

飛びついた涼の頭が焰の鳩尾に直撃、焰は不思議な悲鳴を發して倒れた。

「ようやく見つけた・・・！なんで焰がFクラスにいるの！？」

「だ、誰のせいだと思っているんだ・・・」

「え、誰？」

「お前だ・・・」

「てへっ」

涼が舌をちろつと出した瞬間、クラスの連中がいつの間にか黒衣を身に纏っていた。

「これより、異端審問会を始める……。罪人、鍵宮焰……。お前はAクラス女子・水河涼とつきあっていることを我々の目の前で堂々と曝した。諸君、この事実には相違はないな？」

『相違ありません！』

「相違だらけだあ！つか、須川あ！なにしてんだあ！第一、俺はこんなペタンコは好きじゃねえ！」

「ぺ、ペタンコゆーな！」

焰は突然始まった異端審問会に猛抗議した。

その時に出た「ペタンコ」という言葉に涼が抗議した。

「被告、言い残すことは？」

「知るかああああああ！」

「きやつ！」

焰は自分に乗っかっている涼を払いのけ、廊下を疾駆した。

『鍵宮焰あ！貴様は許さんぞおおおおっ！』

FFFも焔を追って廊下を疾駆した。

その頃生徒用玄関では。

キラが学校に到着した。

「時間ギリギリ・・・・・・・・って、何で下駄箱の形が変わってるんだろう・・・・」

キラの下駄箱は膨れ上がっていた。

「考えてても仕方ないか・・・（カチャドザザザザザ）うわああああ・・・」

下駄箱を開けた瞬間に出てきたのは、何故ここまで詰めれたのか分

からない程の手紙だった。

（ちなみに全部ラブレターである）

その手紙でキラは埋まってしまった。

そして数秒後。

「ま、間に合ったあ……」

「ぎ、ギリギリ……」

『はあ、はあ……』

ルカ、なのは、フェイト、アリシアが到着した。

少し苦しそうなのは、走ってきたからだ。

「……？あの山……なんだろう……」

なのはは不自然に出来上がった山（In      キラ）に気がつく。

「あれ、開いている下駄箱って……」

ルカがそう言った瞬間。

「ちょっと待っててね！」

「すぐに助けるから！」

アリシア・フェイトが手紙の山を崩し始めていた。

「一体何の騒ぎ・・・うおっ!？」

鉄人、登場。

「に、西村先生！キラが、キラが・・・」

「ヤマトがどうした・・・！まさかこの中にいるというのか！」

「そのまさかです！」

「よし、手伝おう！」

鉄人も加わって、キラ救出は進んだ。

三分後、キラは無事救出された。

「一体何なんだこの手紙の量は？」



「さ、さあ・・・」

この事態に呆れる鉄人と、鉄人の疑問に微妙な答えで返したルカ。

「ね、姉さん、キラが、キラが目を覚まさないよ!?ど、どうしよう!?じ、人口呼吸するしかないのかな!?」

「お、落ち着いてフェイト!気を失っただけだからその必要はないよ!」

「にはは・・・」

二人の前では、ハラオウン姉妹が慌てており、なのはが苦笑いをする、という光景が見られた。

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その1（後書き）

今回も後書きコーナーはお休みします。

前々回キラが歌っていた歌について説明します。

キラが歌っていたのは、Cheerful+Colorfulの「生マレタ理由」（違っていたらごめんなさい）です。

他にも候補はありましたが、キラの状況に合っているのはこの曲かな・・・と思って・・・

次回、ついに転入します！

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その2（前書き）

第四問その2です！

今回、ついに転入（ついにとして扱って良いのだろうか・・・）します！

そして・・・おっと、ここから先はお楽しみ。

では、どつぞー！

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その2

「えー、今日はテストの前に編入生の紹介です。皆さん、入ってきてください。」

福原先生の紹介で、そろそろ教室に入ってくる。

『うおおおおおおっ！』

男子勢が叫ぶ。

何せ、入ってきたのは女子ばかりだったからだ。

「はい、ようやく全員入りましたね。では、自己紹介をお願いします。」

「じゃあ、私から……。アルティ・ヤマトです。好きなことは……」

アルティを先頭に、エルル・桃香・愛紗・凧・蓮華・天和が自己紹介をした。

アルティとエルルが名を出した瞬間、机に突っ伏したキラに視線が集中した。

紹介が終わり。

「き、キラ、あの二人、兄妹なの？」

「義理の・・・ね・・・。うああ・・・」

美波はすぐにキラに聞いた。

キラは朝のダメージが残っているのか、言葉少なに答えた。

「ねえ義兄さん、レオン、このクラスって、いつもあんななの？桃香とか蓮華とかが告白されては撃沈させてるけど・・・」

アルティが指差したその先では・・・

「り、劉さん、僕と付き合ってください！」

「ごめんなさい。（笑顔で）」

「フラれたああああ！でも許せる笑顔だああああああ！」

「孫さん、俺と・・・」

「無理よ。」

「ごふあっ！でもそのツンツンした性格がまた・・・」

たった今、二人が撃沈した。

「キラはこんなだから僕が答えるね。いつも・・・だよ。女子が少ないからね、女に飢えているから。」

「そ、そこまでなんだ・・・」

アルティはキラとレオンに質問をした。

レオンがすぐに答え、エルルはその答えに笑うしかなかった。

「ところでヤマト姉妹、今日テストがあるの知ってるよな？」

雄二が二人に聞いた。

「一応。あ、私のことはアルティって呼んで？」

「私はエルルって呼んでくれないかな？」

「わかった。知ってるようなら大丈夫だな。」

「でも、勉強なんて全然出来ないわよ？」

「私も・・・」

勉強できないことに不安になる二人。

「大丈夫だ。明久というバカでもここにいるんだから。」

「どれだけバカなの？」

「至高のバカだな。」

「いや、究極のバカじゃな。」

「・・・・・・完全なバカ。」

「ちよつと！？皆してバカバカって言わないで！」「うわわっ！ど、どこから・・・？ていうか、そ、そこまでバカって言われるなんて・・・」

いつの間にか秀吉とムツツリーニが来ていた。そして明久のバカについて自分の意見（？）を言った。

その直後、どこまで走っていたのか分からない明久がいきなり突っ込んだ。

エルルは登場とそのことに驚いた。

そしてテストが始まった。

「うあー・・・づがれだー・・・」

明久は卓袱台に突つ伏す。

とりあえず四教科が終了した。

ただでさえテストは疲れるのに、明久は船越先生と一悶着あつたため余計に疲れていた。

ちなみに明久は船越先生に近所のお兄さん（三十九歳／独身・・・お兄さん？）を紹介してあげていた。  
ついでに昨日の呼び出しもその件だということにした。

「うむ。疲れたのう。」

いつの間にか明久の近くに秀吉が来ていた。

「・・・・・・・・（コクコク）」

ムツツリーニも。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな。」

勢いよく立ち上がる雄二。



昼食のメニューが素晴らしく重そうだ。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ。」

「アルティやエルルとかも誘うけど・・・」

「問題ない。少しくらい増えても構わないさ。」

「それじゃ、混ぜてもらうね。」

「・・・・・・・・（コクコク）」

ムツツリーニが頷いているのは下心のせいだろう。

（明久：ムツツリーニ、島田さんに下心を求めても無駄だということ。）

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」

「滅相もございません。（な、なんて恐ろしい勘なんだ。）」

「まあいいわ。とりあえず皆を呼んでくるね。」

美波は皆を呼びに行った。

S i d e      美波

「アルティ〜！エル・・・ル・・・」

な、何が起こったの！？

美波が見たもの。

「あ、あはは・・・やったよ、私、燃え尽きたよ・・・」

「エルル！まだ燃え尽きちゃダメ！義兄さんにお昼食べてもらうんでしょ！？」

「・・・そうなんだけど・・・体が・・・」

それは、真っ白に燃え尽きたエルルとどうにか復活させようとするアルティだった。

「あ、アルティ・・・。エルル・・・どうしたの？」

「あ、美波・・・。エルルがテストで燃え尽きたのよ・・・」

エルル、勉強嫌いみたいね・・・

「あ、美波。エルルどうしたの？」

「燃え尽きたって・・・」

アリシアも来た。

「た、高町さぁん！？」

「なのは!？」

「にやはははは・・・だ、ダメ、動けない・・・あ、お花畑だあ・・・わゝい、幸せだよ・・・」

「ちよ、そこは高町さんにとっての幸せな場所じゃないですよ!？」

「な、なのはゝ！ルカと結婚できなくなるよ・・・」

「にやははゝ、にやははゝ・・・」

「・・・なのはちゃん、もうダメみたいだよ・・・？お昼なのに・・・」

優とフェイトの声がしたのでそつちを見るとそこでも燃え尽きが。

「なのはまで燃え尽きたって・・・」

「あ、ところで一緒にお昼食へに行かない？食堂で。」

「あれ？瑞希がお弁当作ってくるって言ってなかったっけ？」

「あ・・・」

そうだった！瑞希が料理作ってくるんだった！

「忘れてたわ。アリシア、ありがとう。」

「何かしたわけじゃないのに・・・まあいいか。あっちの皆やキラに言えばいいんだよね？」

「お願い！」

「わかった。皆で先行ってて。」

「アリシア、ありがとう！」

美波は雄二達の方へ行った。

「お弁当の約束？」

「うん。瑞希が作ってくるって。」

二人は、このあと起こる惨劇を知らないでいた。

S i d e e n d

「アリシアから聞いたけど、瑞希が料理を作ってくるって話を忘れてるわよ？」

「そうだったか？俺はてっきり明久に作ってくるって思っていたんだが・・・」

「そんなわけないよ。」

「あ、あの。皆さん・・・」

瑞希が話しかけた。

「姫路さん、どうしたの？」

「あの、お昼ですけど、その、昨日の約束の・・・」

瑞希はもじもじしながら皆を見る。

「たった今話題に上がっていた弁当かの？」  
「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ！」

瑞希は身体の後ろに隠していたバッグを出した。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」  
「ああ、そうだな。ありがたい。」  
「そうですか？良かったあゝ・・・」

瑞希は安心したのか、ほにやとした笑顔を作った。

「むー・・・っ。瑞希って、意外と積極的なのね・・・」

美波は明久を親の仇のように睨んできた。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう？」

「そうだね。（こんな腐った畳と男の臭いしかしい場所で頂いて良いものじゃない。）」

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ。」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「明久からすれば」珍しく気遣いを見せる美波。

「悪いな。それじゃ頼む。」

「おっけー。」

雄二は疑うことなく受け入れた。

（明久：僕だったらそのまま連れて行かれてボコられるのを警戒するんだけど。）

「きちんと俺達の分をとっておけよ？」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね。」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる。」

雄二と美波は財布を持って教室を出ていった。

「僕らも行くのか。」

「そうですね。」

「ワシは燃え尽きた者を連れて来るつもりじゃ、少し遅れるかもしれない。」

「あまり遅くならないようにね。」

「わかっておる。アルティ、アリシア。燃え尽きた二人を屋上に運んでくれんかのう？」

「いいわよ。あ、でも一人じゃ無理だから誰かに手伝ってもらな

いと・・・愛紗ー！手伝ってー！」

「はい、今行きます！」

「エルちゃんとなのはちゃん、大丈夫かなあ・・・」

「そ、それは私に聞かれても・・・」

アルティは愛紗に協力を頼み、桃香、凧がそれに続いた。

蓮華や天和も一緒である。

「キラ、大丈夫？」

「平気・・・」

フェイトはキラについていた。

ちなみに焰は。

「来るなああああ！」

「いーじゃん別にー！私も料理作ってきたんだよー！？」

「前にお前の料理で死にかけたんだ、今更食えるかよ、んなもん！」  
「食べてー！」

「断る！」

涼と校内で追いかけてこ（？）をしていた。



#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その2（後書き）

「後書きコーナーっす！」

「みなさん、ほんっとーにお久しぶりッス、アルスっす！今回はオレ一人ッス。」

「まずは投票状況ッス！」

現状、アリシアだけが・・・と思ったら、キラにも一票入ったッスカ！？

お、驚きッス・・・

と、いうわけで、男子部門も急遽開催ッス！

機嫌は女子部門と一緒にッス！どしどし応募するッス！

そして今回は焰の紹介ッス！

鍵宮 焰

男、17（誕生日が4月2日）

元「風牙」。力が強く、頭も（本当なら）良い。

水河 涼が大嫌い。理由としては、勝手に婚約者として扱われたこと、料理が果てしなくマズイこと、がある。

以上ッス。

次回は未定ッス！

それでは、また次回お会いしましょうッス！」

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その3（前書き）

第四問その3です！

瑞希の料理がついに炸裂！  
犠牲者多発！

誰かは本文で！

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その3

遅れていた秀吉が追いつき、屋上に着いた。

「天気がよくてなによりじゃ。」

「そうですねー。」

絶好の弁当日和。

ちなみに燃え尽き組は・・・

「・・・空はこんなに青いのに・・・」

「私たちは真っ白・・・」

「こ、これ、もう重症じゃないですか？」

どこかで聞いたことがあるような台詞を言っていた。

「じゃあ、なのはだけ治療してみるね。」

「高町さんだけ・・・？」

優はフェイトがなのは「だけ」を治療すると言ったことに疑問を感じた。

「なのはー。ルカが来たよー。」

「ルカ君が！？どこ！？どこ！？」

「うん、治療終了」

「だ、騙すのが治療・・・ですか・・・」

「なのはちゃんはルカ君にご熱心だからね。名前聞いたら飛び起きるよ？夜だろうと。」

「そ、そこまで・・・」

なのは、復活。

事実とこの話は話に啞然とする優。

「・・・あれ、ルカ君は？」

「ごめんね、なのは。あれ、嘘なの。」

「もー！フェイトちゃん！」

「痛っ！痛い痛い！な、なのは、痛いから・・・」

なのははフェイトをポカポカと叩いた。

「あとは、エルルだけだね。」

「私が無理矢理復活させてみましょうか？」

「愛紗ちゃんだといけない気がする・・・」

「寧ろ殺してしまいそうな気が・・・」  
「なっ！？そつ、そんなこと私がするわけが・・・」

エルル復活方法に愛紗が提案する。

すかさず桃香と凧が否定した。

「・・・よし。・・・あー！どこかで見たことがある気がする俺様主義な人が弁当を捨てようとしてるー！」

「あー！だめー！捨てないでー！」

「だめええええええええええ！」

ドンッ！

「ヴぁーちえ！」

アルティが俺様主義な人が弁当を捨てようとしているという嘘をつき、このはがそれに便乗した。

それを阻止しようとしてエルル復活。

犠牲はレオン。

「・・・あれ？俺様主義な人は？」

「嘘。そんな人いないよ。」

「そつかぁ。良かった・・・」

「それよりもエルル、今なにか下敷きにしてるのわかる？」  
「え？」

このはに言われ、エルルは自分の体の下を見た。

「んむー！むー！」

「わあああ！レオン、ごめーん！」

衝突した反動でレオンはエルルの下敷きになっていた。

エルルがすぐにどいたため、レオンは無事だった。

「ぜはー、ぜはー……。某戦略シミュレーションゲームのキャラの台詞を真似るかもしれないけど……。胸で溺れ死ぬかと思った……」

「レオン、小さいからね……」

「ホント、生きててなによりね。」

「ていうか、その表現はどうなのかな……」

レオンの無事に安堵する皆。

何気にアルティがつっこむ。

「つかエルル、帰ったら勉強推定2時間な……」

「やめてー！そんなことしたら真っ白どころか死んじゃうよー！」  
「す、推定・・・」

「私、レオンがエルルの勉強嫌いを肅正しようというのに！」  
「どこかの赤い人の真似してもダメー！」

レオンがエルルに勉強させると言った（エルルからすれば死刑宣告）  
。

「おーい、早くしないとなくなっちゃうよー・・・」  
（ヒョイ）「って、ずるいぞムツツリーニっ！」

明久が燃え尽きた組を呼んだとき、動きの素早いムツツリーニがエ  
ビフライをつまみ取った。

そして、流れるように口に運び・・・

「・・・・・・・・（パク）」

ボタン！

ガタガタガタガタ！



豪快に頭から倒れ、小刻みに震えだした。

「・・・」  
「・・・」  
「・・・」  
「・・・」

明久と秀吉とレオンとレインが顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

瑞希が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「え、な、何があつたの!？・・・って、土屋君!？」

なのはが騒動に気付く。

「・・・（ムクリ）」

（レイン：おお、起き上がった!）

「・・・（グッ）」

（レイン：お、親指を立てた！）

（レオン：ムツツリーニ！あんだ、あんだあ男だ！）

多分、『凄く美味しいぞ』と伝えたいのだろう。

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ！」

ムツツリーニが伝えたいことが伝わったのか、瑞希が喜ぶ。

（明久：ムツツリーニ、それならなぜ足が未だにガクガクと震えているんだい？僕にはK O寸前のボクサーにしか見えないよ。）

「良かったらどんどん食べてくださいね？」

瑞希は嬉しそうに勧める。

明久的には目を虚ろにして身体を震わすムツツリーニが忘れられない。

（明久：・・・秀吉、レオン、レイン。あれ、どう思う？）

明久は瑞希に聞こえないくらいの小さな声で秀吉・レオン・レイン

に話しかける。

（秀吉：どう考えても演技には見えん。）

（レイン：いや、あれはマジだよ。）

（明久：だよね。ヤバイよね。）

（秀吉：お主らは身体は頑丈か？）

（明久：正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから。）

（レイン：同じく。てかさ、あれは頑丈どうここの話でないと思うのは僕だけ？）

（レオン：いやいや、僕もそう思ってたから・・・）

ちなみに、表情は笑顔のままだ。

瑞希にこの会話と驚愕を気取らせるわけにはいかない。

（秀吉：ならば、ここはワシに任せてもらおう。）

男気ある秀吉の台詞が囁かれる。

（明久：そんな、危ないよ！）

（レオン：死ぬよ！？）

（秀吉：大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ。）

（レイン：た、タフな内蔵・・・。あれ？ジャガイモの芽って確か毒だったと思うよ・・・）

（明久：でも・・・）

（秀吉：安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じて・・・）

外見は美少女でありながら、誰よりも男らしい台詞を言おうとしたところで、

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二登場。

「あつ、雄二。」

止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク。

ボタン！・・・ガシャガシャン、ガタガタガタガタ！

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの！？」

遅れてやってきた美波が雄二に駆け寄る。

「四人……間違いない。コイツは、本物だ……」

その前、向こうでは……

「義兄さん、今日お弁当作ってきたんだ。」

「……失敗作……ないよね？」

「大丈夫……だと思う……」

「え、エルルちゃんは料理上手だから大丈夫だよ。」

エルルがキラに弁当を食べてもらっていた。

「じゃあ、この卵焼きから……」

パク。

ボタン！

突然キラが頭から倒れた。

「え、義兄さん！？」

「エルル、一体何をしたの！？」

「特に何もしてないよー！な、なんで！？私も食べてみる！」

パクッ！

ふらぁ・・・

「お塩だと思っていたのに・・・」

ぱた。

キラとエルルが同時に倒れた。

「キラぁ！目を、目を覚まして！」

「エルル、死んだらダメ！生きて、生きて義兄さんに料理を作ってあげるんでしょ！？」

フェイトとアルティがそれぞれを揺する。

『まさか・・・塩酸と水酸化ナトリウムの化学反応塩（塩酸風味）  
（が使われていた／だった）なんて・・・』

二人ともそう言っ て気を失った。

「あー、もー！なんでキラばっかりこんな目に『ガシャン！』なっ、  
なに！？」

アリシアが愚痴を漏らしていたとき、 なにか金属質のものが落ちた  
音がしたのでそっ ちを見た。

なにがあつたのか。

それは、雄二が倒れたときに出た音だった。

「ええー！？あつちでは坂本君があー！？」

「さっきの土屋君、そして坂本君・・・」

「もしかして！」

「いやいや、毒はないな・・・」

なのはが驚き、フェイト・このは・アリシアがそれぞれの推理を出し合っていた。

「ご、ごめんなさい・・・義兄さん・・・」

「え、エルルが悪いわけじゃないよ・・・うぐっ・・・」

「今度は、ちゃんと確認しよ・・・ガク。」

キラとエルルが同時に倒れ、意識を失った。

明久達はムツツリー二同様激しく震える雄二を見る。

すると、雄二は倒れたまま明久達の方をじっと見て、目でこう訴えていた。

『毒を盛ったな?』

と。

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ。』



『僕らがいつ毒を盛るのさ？そんな暇あるかい？』

明久達も目で返事をする。

いつも一緒に行動しているが故にできる技。

こんな時便利だ。

「あ、足が・・・攣ってな・・・」

瑞希を傷つけないようにウソをつく雄二。

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな？」

「うむ、そうじゃな。」

「うん、そうだね。そうに違いない。きっとそうだろう。」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど？」

事情がわかっていない美波が不思議そうな顔をする。

（明久：余計なことを言い出さないうちに退場させた方がいいかもしれない・・・）

明久がそう思ったとき。

「あ、美波、今右手をついてるあたりだけどさ、  
ん、何レオン？」

（明久：レオン？）

「さっきまで虫の死骸があつたよ。（嘘よん）」  
「ええっ！？早く言つてよ！」

美波が慌てて手をよける。

（明久：ここらへんは一応女の子みたいだ。それにしても、レオン、  
ナイス！）

「Sorry, You should washing your hand.」

「れ、レオン？何て言つたの？」

「ごめん、手を洗ってきた方がいいよ、って。」

「もう、英語で言わないでよ！でも、そうするね。ちょっと行つてくる。」

（明久：ひ、秀吉、レオン何て言つたかわかる？）

（秀吉：ワシに聞くでない。ワシにもわからんのじゃ。）

（レイン：確か、『ごめんなさい。あなたは手を洗ってくるべきですよ。』だったはずだよ？）

（明久・秀吉：さすがレイン（じゃ）！）

明久達がレオンの英語で議論していたとき、美波が席を立った。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう。」

「全くだね。」

「可哀相に、ね。」

はっはっは、と男三人と二匹で朗らかに笑う。

「皆、さっきからどうしたの？・・・っってお弁当だ。私ももらうね。」

「

「私も気になってたんだ。私ももらうね。」

「瑞希ちゃん、私にもちょうだい！」

そんな中、なのはとアリシア、天和が来て瑞希の弁当に気付く。

「えっ！？」

「た、高町！？アリシア！？張！？」

「や、やめ・・・」

『いただきまーす。』

パク。

『あつ・・・』

ボタン！

ガタガタガタガタ。

なのはもアリシアも天和も頭から倒れ、全身をガタガタと震えはじめた。

「た、高町さん！？アリシアさん！？張さんも！？」

（明久：ま、間に合わなかった・・・）

（秀吉：もうダメじゃな・・・。これは絶対ばれたのう・・・）

（レオン：なのはのバカあ！アリシアのバカあ！天和のバカあ！）

それぞれがばれたと思った。

しかし・・・

「高町さん、アリシアさん、張さん、大丈夫ですか？」

「にはは・・・美味しくて気絶しちゃったただだから安心して・・・」

「こんなおいしいお弁当、食べたことなくて・・・」「そ、そうだ

よ。だから安心して！」

「そ、そうですか？よ、良かったあ・・・」

（レイン：か、回避した！瑞希に対していい感想を言った！）

（雄二：さすが高町とアリシア、そして張・・・）

なのはとアリシアと天和がいい感想を言ったので瑞希は安心した。

そんな二人に驚く五人（といっても三人と二匹）。

（レオン：二人ともよく堪えたね・・・）

レオンが例のひそひそ話をなのはとアリシアと天和にした。

（なのは：だって、本当のこと言ったら瑞希ちゃん傷ついちゃうから・・・）

（アリシア：皆のために作ってきたんだもん、マズイなんて言えないよ。）

（天和：マズイなんて言ったら傷ついちゃうからね。）

三人が瑞希を気遣った発言をした。

一方、その後ろでは明久達が必死に作戦会議を行っていた。

(雄二：明久、今度はお前がいけ！)

(明久：む、無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！)

(秀吉：流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る・・・)

(レオン：僕は嫌だからね！)

(レイン：僕も絶対食べないから！)

(アリシア：私、絶対食べないから！)

(なのは：私も嫌だよ！)(天和：私も嫌かな・・・)

(明久：雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！)

(秀吉：そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが？)

(明久：そんなことないよ！乙女心をわかってないね！)

(なのは：そんなことないよ！)

(レイン：わかってないのはむしろ明久の方だと・・・)

(明久：ええい、往生際が悪い！)

明久がついに動いた。

「あつ！姫路さん、あれはなんだ！？」

「えっ？なんですか？」

「何々？」

明久の指した明後日の方向を瑞希が見る。

天和も釣られて見た。

（明久：おらあっ！）

（雄二：もごああっ！？）（なのは・アリシア：ええええっ！？）

その隙に明久は雄二の口の中一杯に弁当を押し込んだ。

なのはとアリシアが行為に驚く。

目を白黒させていたため、明久とレオンが顎を掴んで租借するのを手伝う。

ご飯はよく噛んで。

「ふう、これでよし。」

「危機は去った・・・」

「・・・お主ら、存外鬼畜じゃな・・・」

「え、えげつないなあ・・・」

「もう死んじやったんじゃないかな・・・」

秀吉やなのは、アリシアが何か言ってるが気にしない二人。

雄二が更に激しく震えているが気にしない。

「ごめん、見間違いだったよ。」

「あ、そうだったんですか。」  
「そうなの!？」

こんな古典的な手にもひっかかる瑞希と天和。

純粹すぎて不安にもなる。

「お弁当美味しかったよ。」馳走様。」

「うむ、大変良い腕じゃ。」

「愛紗に学ばせたい腕だね。」

遠くで「へくしっ!」と、愛紗のくしゃみが聞こえた。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで。」

視界の隅で倒れている雄二がフルフルと力無く首を振る。

「そうですかー。嬉しいですね。」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

明久が倒れている雄二に水を向ける。



意識があるから応えられるはずだろう。

「う．．．うう．．．。あ、ありがとうな、姫路．．．」

雄二の台詞を聞いた皆が一斉に

ヤバイ、目が虚ろだ。

そう思った。

「そういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が．．．」

「ああ、あの店じゃな。確かに評判が良いな。」

「え？そんなお店があるんですか？」

明久は話題逸らしにかかる。

「評判といえば、海鳴の『翠屋』という喫茶店も評判が良いと噂じや。」

「へえー。」

「あ、私の実家、そこまで有名なの？」

「嘘っ!？」

「嘘じゃないよ。なのはの所喫茶店だから。結構有名だよ?」

「そうなんだ。今度今日のお礼に雄二がおごってくれるってさ。」

「てめ、勝手なこと言っただの。」  
「いーじゃん。」

作戦成功・・・？

「あ、そうでした。」

瑞希がポン、と手を打った。

「ん？どうしたの？」

「実はですね・・・」

「ごそごそ、と鞆を探る。」

「デザートもあるんです。」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

雄二が命がけで明久の作戦を止めにかかる。

（雄二：明久！俺を殺す気か！？）

（明久：仕方がないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！こ

こは任せたぜっ！)

(なのは：む、無責任だ・・・)

(アリシア：逃げたね・・・)

(雄二：馬鹿を言うな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われても  
でんもんはでん！)

(明久：この意気地なしっ！)

(雄二：そこまで言うならお前にやらせてやる！)

(明久：なっ！その構えは何！？僕をどうする気！？)

(雄二：拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれ  
る！歯を食いしばれ！)

(明久：いやああ！殺人鬼iiiiii！)

(なのは：だっ、ダメ！)

(アリシア：それはマズイ！マズイって！)

(天和：皆仲良くしなきゃ！)

(レイン：天ちゃん、的外れなこと言ってる気がするよ？)

(天和：あれ？)

雄二が拳を握り、あわや肉弾戦というところで、秀吉がすっと立ち  
上がった。

(秀吉：・・・ワシがいこう・・・)

(明久：秀吉！？無茶だよ、死んじゃうよ！)

(雄二：てめえ、俺のことは率先して犠牲にしたよな！？)

(なのは：確かに率先して犠牲にしてたね。)

(アリシア：明久ひどい！鬼畜！)

(秀吉：大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい  
消化不良程度じゃろう。)

そこまで言つと、確かに毒までも無効化する秀吉なら大丈夫かもしれないと思えて来る。

「どうかしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「あ、もしかして・・・」

瑞希が顔を曇らせる。

（その場にいる全員：もしかして嫌がつているのがバレた！？）

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ！」

容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス（のように見えるもの）だ。箸で食べるのはほぼ無理だ。

「取ってきますね。」

スカートを翻し、階下へ消える瑞希。

チャンス到来。

「では、この間に頂いておくとするかの。」

戦場に向かう戦士のように秀吉が容器を手取る。

「・・・すまん。恩に着る。」

「ごめん。ありがとう。」

申し訳なさで俯きがちな明久達にフツと軽く笑いかけ、秀吉は言った。

「別に死ぬわけではあるまい。そう気にするでない。」

「そ、それもそうだね!」

「ああ! 秀吉、頼んだぞ!」

「木下君、頑張つて!」

「うむ。任せておけ。頂きます。」

容器を傾け、一気にかきこむ秀吉。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあっ!」

また一輪、花が散った。・・・命という、儚い花が。

「・・・木下君・・・」

「・・・雄二。」

「・・・なんだ？」

「・・・さつきは無理矢理食べさせてゴメン。」

「・・・わかってもらえたならいい。」

自称『鉄の胃袋』は白目で泡を吹いていた。

容器にまだ半分ほど残して。

「あれ？皆どうしたの？秀吉なんて白目向いて・・・デザートも残してるじゃない。私がもらっね。」

「アルティちゃん！ダメえええ！」

なのはの制止も虚しく、アルティはヨーグルトもどきを食べた。

「美味しいじゃない。ちょっと酸味が強ゴばあっ！」

また一輪、命という儚い花が散った。

その頃の焔。

「うおお、動けない！」

「さ、食べて？」

「食うか！」

「はい、あーん」

「ぐむあっ！」

涼は焔の口を無理矢理開けてウインナーを押し込んだ。

「・・・なんだ、上達しゴばあっ！」

ドサッ！

「あれ、どうしたの焔。・・・焔、焔あ！」

「昔と・・・変わってねえ・・・」

そう言い残して気を失う焔だった。

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その3（後書き）

今回は3カ所で被害が。  
どうでしょうか？

あと、本当に投票をお願いします！  
一票だと寂しいので・・・

それでは、また次回！



#### 第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その4（前書き）

お待たせしました、第四問その4です！

今回、お願いとお知らせが後書きにありますので。

では、どうぞ！

#### 第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その4

「そういえば坂本、次の目標だけど・・・」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん。」

激しい昼食を終え、復活した皆でのんびりお茶をすする。

特に秀吉とアルティには大量にお茶を飲ませている。

お茶には殺菌成分があるらしい。

ちなみに美波はお茶にしかありつけていない。本人は憤慨していたが、明久達からとしては感謝してもらいたいくらいだった。

当事者の一人のはずのレインは、奥の方で何かしていた。

「え・・・い・・・に打たれ・・・、あ、テンポ違う・・・」

「レイン、何してるの？」

「ほわあっ！」

「きゃっ！」

後ろから話し掛けられ、悲鳴をあげるレイン。

「な、なんだ、天ちゃんか・・・。驚かすなよ・・・」

「ごめーん。それで、何してたの？」

「実は、去年先輩が『清涼祭』でバンドやっててさ、やりたいなって思ってたね……。それで、今覚えた曲をドラムだけ演奏してたの。」

「ふうーん……。」

「レイン、バンドやりたいの？」

「おおー！？……。フェイトか。うん、そうなんだ。去年の先輩のやつ見てね。……。あ、天ちゃんとフェイトにちょっとお願いがあるんだけどさ、ボーカル頼めない？」

『え？』

フェイトも話に参加した。

レインはふと思った頼みを二人に聞いた。

「ダメかな……」

「私はいいよ？」

「私は……。ちよつと考えさせて？」

「いいよ、頼んだのこっちだし。」

天和は快く承諾。フェイトはちよつと迷った。

「じゃ、早速練習しよ？」

「いやさ、次戦争よ？抜けていいの？」

「雄二君に頼んでくる！」

「作戦会議が終わってからね……」

天和がすぐに動こうとしたのでレインは止めた。

「ところで、ボーカルとドラムは決まったけど、あとは？」

フェイトが思った疑問を出した。

「キーボードはキラに頼んだんだ。ホントに。」  
「ボーカルやる！」

フェイト、ボーカル希望。

「キラ、キラ！」  
「う．．．ん、レイン．．．？」  
「起きた。バンドだけどさ、ボーカルが決まったよ。」

レイン、報告。

「へえ．．．。誰？」  
「天ちゃんとフェイト。」  
「フェイトちゃんが！？」

フェイトがボーカルやることを聞いて驚くキラ。

「うん。後で練習するけど、時間ある？」

「あるけど・・・」

レインのバンド立ち上げの話は進んでいた。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ。」

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

（明久：僕らの目標はAクラスだ。通過点に過ぎないBクラスを相手にする理由がわからないんだな。僕もわかんないし。）

「正直に言おう。」

雄二が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない。」

戦う前から降伏宣言。雄二らしくない。

「それには理由がある。まずは・・・」

雄二が勝てない理由を説明した。

こちらの方が点が少ないこと。

上位十三人が特にヤバいこと。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる。」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか。」

明久が美波の台詞を引き継ぐように間に入る。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ。」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う。」

（明久：使う？Bクラスを？なににどうやって？）

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

「え？も、もちろん！（知らない。）」

（瑞希：吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ。）

瑞希の助け舟。

「（なるほど、そうだったのか。）設備のランクを落とされるんだよ。」

「・・・まあいい。BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ。」

「そうだね。常識だね。」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい。」

「ムツツリーニ、レオン、ペンチ。」

「了解、爪切りもあるなり。」

「・・・準備万端。」

「ややつ？僕を爪切り要らずの身体にする動きがつ！」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ。」

また瑞希のフォロー。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね。」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする。」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと

攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに攻め込むだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう。」

「そうすればうまくいくね。」

「・・・黒いね・・・」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな。」

「なるほどねー。」

「二番手と戦った後に休む暇なく連戦。勝っても何も得られず。戦略としても最高ですね。」

雄二が説明、明久・アリシア・愛紗が賛同する。

なのはは何を言えいいのかわからずただ感想を言った。

「じゃが、それで問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じやが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに・・・」

「それに？」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじやろうか？こちらに姫路やキラ、ハラオウン姉妹にレオンがいるのは既に知れ渡っていることじやろう？」

FクラスがDクラスに勝ったわけを知ると、当然注目が集まる。

瑞希やキラ、レオンやフェイトにアリシアなどの存在は周知の事実



だ。

そうなれば相手も対策を講じてくるはず、である。

「言われてみればそうだよー。」

「そのへんに関しては考えがある。心配するな。」

皆の不安とは対照的に自信満々な雄二。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる。」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど。」

勝算がなければこんなことは言い出さないだろう。

「で、明久。」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い。」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか。レインとかに行かせればいいじゃないか。」

（明久：今更どの面下げてそんなことを。）

「レインはどうやら打ち合わせしているようで無理みたいだな。・・  
・やれやれ。それならジャンケンで決めないか？」

「ジャンケン？（問答無用で行かされるよりはマシか。）OK、乗った。」

「よし、負けた方が行く、で良いな？」

明久は雄二にコクリとうなずいて返す。

「あ、じゃあ僕も参加していい？」

「珍しいな、おまえが参加するなんてな……。まあ、いいだろう。」

レオン、参加。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいい。」

そんな雄二の提案。

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ。」

明久はジャンケンの構えを取りながら雄二に告げる。

「そうか。それなら俺は……」

「僕は……」

（明久：さて、二人はどう考えるだろう。僕がそのまま正直にグーを出すと思うのか？それとも裏をかいてくると思うのか？）

「明久がグーを出さなかったらブチ殺す。」

「明久がグーを出さなかったら感電死させる。」

（明久：ちよっ・・・！何その心理戦！？）

『ジャンケンポン！』

「わああっ！」

パー（雄二、レオン）      グー（明久）

「決まりだ。行つて来い。」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する。」

真つすくな目で雄二が明久を見る。

（明久：騙されるもんか！そうやってまた酷い役割を押し付ける気なんだ！）

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい。」

「そつか。それなら大丈夫だねっ。（これは僕にしかできない任務だ。責任重大だぞ。）」

「でも、お前不細工だしな・・・」

「そうだね・・・」

溜息混じりに雄二とレオンが呟く。

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ。」

「実質5度じゃな。」

「5度だね。」

「しょぼ！」

「皆嫌いだっ！（一年間の日数365日と混ぜっちゃっただけなのに、人のちよつとした間違いを馬鹿にして！ちくしょー！）」

「とにかく、頼んだぞ！」

明久は雄二の言葉を背中に受けて、行ってしまった。

「そういえば、さっきからレイン達は何を打ち合わせしているんだ？」

「僕は知らないなあ。」

「高町は？」

「全然知らない。」

「近くに行く？」

「そうだな。」

雄二・レオン・なのはがレイン達に近づいていった。

「あとはベースとギター……」

「あれ、雄二？」

（レイン：ギクウツ！）

「何してるんだ？」

「あ、坂本君。実は、レインがバンドやりたいたって。」

「ちよっ！天ちゃん！」

「いずれ言うんだから、結局ばれるんだよ？隠す意味ある？」

「……ない。」

「バンドか……。そういう系のアニメでも見たんだろ？」

「いや、去年の『清涼祭』で……」

「なるほど。で、あと何が不足してるんだ？」

「ベースとギター。」

「四人いて不足二つ！？」

「フェイトと天ちゃんがボーカル、キラがキーボード、僕がドラムだから。」

「ボーカル二人……」

「ベースなら焰に聞いてみる。あいつなら確かやれたはずだ。」

「ギターなら僕がやるよ。」

「雄二、レオン、ありがとう！」

「成功しろよ？」

「必ず！」

レインと雄二との間に、『バンドの成功』という約束が交わされた。

#### 第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その4（後書き）

前書きに書いたお願いとお知らせです。

まずはお願いから。

レインたちのバンドで、「この曲演奏してほしい!」というリクエストを募集します!

（基本、アニソンでお願いします。）

予定としては、フェイトソロ1、天和ソロ1、ツイン3としています。

それで、お知らせですが、これと、前から募集していた『バカテスメンバー以外で誰に酔わせるか』についての投票を、5月18日に締め切ります!

リクエストや投票、お待ちしております!

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その5（前書き）

第五問です！

いつもより短くなってしまいました。

では、どうぞ！

#### 第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その5

この後レインはどうか焰と会うことができ、バンド協力、しかもベースで頼むことができた。

「・・・言い訳を聞こうか。」

午後のテストも無事終了し、放課後。

明久はBクラス生徒の暴行で千切れかけた袖を手で押さえながら雄二とレオンに詰め寄った。

『予想通り(だ。)'』

「くきいー！殺す！殺し切るー！」

「落ち着け。」

「ぐふあっ！」

(明久：み、鳩尾強打・・・)

「喋んな、貧乏人。」

「あがばばばばばばー！」



（明久：そして電気ショック……。あんまりだ……）

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あまり寝てるんじゃないぞ。」

「真面目に勉強しろよー。」

爽やかに言い残して教室を出ていく雄二とレオン。

「（げ、外道め……。）うう……。腹が……。身体が」

明久の腹がズキズキと痛み、身体は痺れている。両方の効果が切れるまで動けそうにない。

（明久：誰も心配して保健室に連れていってくれないなんて、僕って嫌われているんだろうか？姫路さんなら駆け寄ってきてくれそうな気がするんだけど。）

明久が首だけ巡らすと、瑞希がまだ教室に残っているのが見えた。

鞆を抱え込んでキョロキョロとあたりを見回している。かなり挙動が不審で、何かを警戒しているように見える。

「（……。ああ、そういえば昨日手紙を書いていたんだっけ。もしかして、それをどこに置くべきか考えているのかな？）よ、よいし

よ．．．」

明久は、それ以上見たら悪い気がして、匍匐前進で教室を後にした。

〈音楽室〉

「初練習だけど、フェイトも天ちゃんも大丈夫？」

「だ、大丈夫！」

「なんとかなるよ！」

レインの声掛けに答える二人。

「二人とも、落ち着いて。」

キラが落ち着かせる。

「今日はボーカルの練習が主かな？やるのは『恋華大乱』だよ。歌詞、これね。」

『・・・』

「じゃ、他のところで練習してくるわ。」

「後で合わせるからねー！」

「わかってるよ！」

フェイトと天和は歌詞を見て話しはじめた。

焰は別行動で練習を開始した。

ちなみに、音楽室の使用許可を取った相手は鉄人だ。  
許可を貰った時、鉄人は

『お前らの成功、祈ってるぞ。』

と激励していた。

「ねえレイン、歌詞分担できないかな？」

「どういうこと？」

「一番をどっちかが、二番は歌わなかった方が歌う、という感じで。」

「いいかも。それで、どうわけるの？」

「一番が天和で、二番が私。サビは基本的に二人で歌って、最後のサビを先に天和、そして私が歌って三行目から二人で。どうかな？」

「・・・いいかも！でもフェイト、二番、歌詞だいぶ難しいよ？」

「頑張る！」

そして練習が始まった。

「『~~~~』・・・よし！歌えた！」

「天ちゃん覚えるの早いな！。音程も合ってる。」

「えへへー。」

「『真紅の・・・』・・・なんて読むのこれ？」

「これは・・・薔薇はなむぎだよ。」

「じゃあもう一回サビから・・・『~~~~』~~~~』どどどどか  
な・・・」

「うん、いいよ。間違えてない。」

「良かったあ・・・」

練習を続け、6時。

「よし、覚えたぜ！いつでもいけるぞ！」

焰、帰還。

「お、やっとなるな。」

「西村先生。」

「今から合わせてみるのでちょっと聞いてもらえますっ..」

「いいだろう。」

そして、ギターは無いが出来上がった歌を聞いてもらった。

（都合上、最後のサビだけですBY作者）

『~~~~~』

パチパチパチパチ・・・

「・・・たった3時間でここまで出来るとは・・・流石だ。」

鉄人は拍手をしていた。

「お前なら成功できる。そう祈ってるぞ。」

『はいっ!』

鉄人は激励をし、去って行った。

「今日は遅いし、帰ろっか。」

「そうだね。」

「お腹すいた〜！」

「天ちゃん、帰ったらご飯あるんだから、我慢我慢。」

「そうだね・・・お腹すいたぁ・・・」

練習が済み、帰宅した。

次回、第五問

「戦争と卑怯と『万死に値する!』」

前編

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その5（後書き）

今回、バンド曲を1曲だけ出しました。

『真・恋姫無双〜乙女大乱〜』のOP、『恋華大乱』です。

従って、募集するのはあと4曲となりました。

ご協力、お願いします！

次回からBクラス戦、開戦です！

**第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」前編 その1(前書き)**

今回からBクラス戦です!

タイトルの台詞は、ちゃんと意味があるんですよ。

では、どうぞ!



第五問 「戦争と卑怯と」万死に値する!」前編 その1

第五問

次の憲法の（ ）を埋めなさい。

『何人も、（ ）（ ）の定める手続きによらなければ、その（ ）（若しくは）（ ）を奪はれ、またはその他の（ ）（ ）を科せられない。』

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

『何人も、（ ）法律（ ）の定める手続きによらなければ、その（ ）生命（ ）若しくは（ ）自由（ ）を奪はれ、またはその他の（ ）刑罰（ ）を科せられない。』

教師のコメント

正解です。これは憲法第三十一条の法廷手続きの保証の問題です。

レインの答え

『何人も、（ ）法律（ ）の定める手続きによらなければ、その（ ）生命（ ）若しくは（ ）自由（ ）を奪はれ、またはその他の（ ）罰則（ ）を科せられない。』

教師のコメント

正解・・・と言いますが、最後だけ間違えてしまいましたね。

吉井明久の答え

『何人も、（人）の定める手続きによらなければ、その（権利）若しくは（良識）を奪はれ、またはその他の（刑）を科せられない。』

教師のコメント

当然といえば当然ですが。

フェイト・T・ハラウンの答え

『何人も、（キラ）の定める手続きによらなければ、その（行動）若しくは（活動）を奪はれ、またはその他の（自由）を科せられない。』

教師のコメント

なぜヤマト君が出てくるのか不思議です。

レオンの答え

『何人も、（魔王<sup>なのは</sup>）の定める手続きによらなければ、その（意思）若しくは（行動）を奪はれ、またはその他の（全力

全壊な一撃」を科せられない。』

なのはのコメント

なぜ私が魔王なのかを、じっくり聞かせてほしいなあ・・・

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終わったところだ。

総合科目勝負なんてやったものだから、補給のテストが多くなった。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおおおおおっ！』

一向に下がらないモチベーション。Fクラスの唯一の武器と言える。

「今回は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

『おおおおおおっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希、高町なのは、レオンに指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「が、頑張ります！」

「う、うん！頑張る！」

男のノリについていけない若干引き気味な二人が一步前に出る。

『うおおおおおおっ！』

一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。

とりあえず今回は廊下での戦闘は勝ちに行けらしい。戦力もFクラス66人中52人を注ぎ込む。

ここにはAクラスの実力を持つ瑞希やなのは、『死神軍師』レオンがいる。廊下での戦闘はまず取れるだろう。

「System All Clean, ZERO-SYSTEM,  
Standby Ready・・・」

「レオン、なにしてるの？」

目を閉じ、自分の中にシステムがあるかのような発言をするレオン。

天和が気になって話しかける。

「天ちゃん、今レオンに話しかけるのはダメ。」  
「え、そうなの？」

キンコーンカーンコーン。

昼休み終了のベルが鳴り響く。

ついにBクラスとの決戦が始まった。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

「ZERO - SYSTEM , START ! 行くよ、なのは、瑞希  
！」

「は、はい！」

「わかった！」

敵を教室に押し込むことが目的。

それには勢いが重要になる。

前線部隊52名はほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。今回のFクラスの主武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、なぜか長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのが理由だ。一気に勝負をかけたい時にはありがたい先生だ。

他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

立ち合いの教師を多くして一気に駆け抜ける作戦だ。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面を見ればゆっくりとした足取りで歩いてくるBクラスのメンバーの姿があった。

人数は十人程度。あくまで様子見といったところか。

「生かして帰すなーっ！」

物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス

野中長男

VS

F

クラス

近藤吉宗

総合

1943点

VS

764点

『

（明久：なっ！？なんて強さだ！まさに桁が違う！）

□ Bクラス

金田一裕子

V S

Fクラス

武藤啓太

数学

159点

V S

69点

□

□ Bクラス

里井真由子

V S

Fクラス

君島博

物理

152点

V S

77点

□

圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていく。

止めを刺される前にフォローをしないと戦力が激減してしまう。

明久がきちんとフォローがされているか、戦力は分断されていないかを確認していると、

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「ごめ、んね……。遅れ……。ちゃった……」

息を切らせて瑞希となのはがやってきた。

「来たぞ！姫路瑞希と高町なのはだ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。

その声を聞き、Bクラス生徒の目つきが変わった。

明らかに二人を警戒している。

「姫路さん、高町さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

「は、はい。行って、きます。」

「い、行って、くるね。」

そのまま戦場に紛れ込む二人。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします。」

「Bクラス金田一裕子、高町なのはさんに数学勝負を！」

「え、私？」

二人とも早速勝負を挑まれる。

「律子、私も手伝う！」

「金田一、援護するぞ！」



その後ろから、さらに一人ずつ召喚を開始。

よほどの警戒だ。

『サモン試獣召喚！』

喚声に答えて魔法陣が展開。

敵はそれぞれ、剣と槍、斧と双剣を構え、瑞希のは大剣を軽々と持ち、なのはのは杖だった。

そっくりな召喚獣。ただし、

「あれ？姫路さんと高町さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので・・・」

「私は理数系が強いから、結構解けたんだ。」

「？結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

デフォルメされた二人の召喚獣は武器の他に左手首に腕輪をしていた。

「そ、それって!？」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない!」

「ヤバい、逃げよう!」

「ダメ、勝てつこないわ！どうすればいいの！？」

（明久：あ、そういえば腕輪をしているってことは・・・）

「じゃ、いきますね。」

「これ、どう使っただろ？」

瑞希は手をキュッと握り込む。その動きに合わせて瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

なのははその動きを真似てみた。

なのはの召喚獣は持っている杖を前に向けた。

「ちょっと待ってよ！？」

「律子、とにかく避けないと！」

「ヤバい、なにが来るかわからない！」

「避けるべきよね！？」

大げさなくらい横に跳ぶ敵四人の召喚獣。

その直後、瑞希となのはの召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

「きゃあああっ！」

「り、律子！」

瑞希の召喚獣の左腕から光線がほとばしったかと思つた瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれた。

『Fクラス

姫路瑞希

V S

B

クラス

岩下律子&菊入真由美

数学

4 1 2 点

V S

1 8 9 点

&

1 5 1 点

』

なのはの方は、杖の前に桜色の球体ができていた。

「な、なんだあれ!？」

「あ・・・あ・・・」

二人は震えた。

「いつけえええつ！」

桜色の球体が二体に向かって放たれた。

その砲撃は『スターライト・ブレイカー』そのものだった。

「うわああああああ！」  
「いやああああああ！」

二体の召喚獣とともに二人の犠牲者が出た。

『Fクラス	高町なのは	V
Bクラス	野中長男&金田一裕子	S
数学	435点	V
153点	&	S
90点		』

同時に。

「うわわわわっ！」  
「危なっ！なのはあ！もつと周りを見てよ！」  
「ごめーん！」

なのはが放った砲撃が、アルティとエルルに直撃しかけた。

腕輪をしているということは、特殊能力を持っているということだ。

「い、ごめんなさい。これも勝負ですのっ！」

大きく避けてバランスを崩した敵に肉薄し、大剣を振り下ろす瑞希の召喚獣。

相手の武器ごと一刀両断し、決着は一瞬でついた。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「金田一と野中もだ！」

「なっ！そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、高町なのは、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残り六人に驚愕の表情が浮かぶ。無理もない。

（明久：というか二人とも、強すぎ。）

「み、皆さん、頑張ってください！」

「皆、頑張つて！」

二人の指揮官らしくない指示。だが、効果は絶大だ。

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

「高町さんサイコーッ！」

信者急増中。

「二人とも、とりあえず下がって。」

「あ、はい。」

「うん。あ、皆！『死神軍師』到着したよ！」

「来たか！我等が軍師！」

「負けることはもうないぞ！」

レオンの到着で自軍の士気は上がり、敵の士気はさっきのと相まって大きく下がった。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

そんな相手の指示が聞こえてくる。

狙いは成功した。

「十数名残してすぐに前線部隊は撤退！敵の代表は根本恭二だ！」

「根本だと！？」

「あの卑怯野郎か！？」

レオンの撤退に理由。

「ねえ秀吉。根本って、あの根本恭二？」

「うむ。」

根本恭二。

とにかく評判が悪い。

『カンニングの常連』、『球技大会で相手チームに一服盛った』、  
『喧嘩に刃物は当装備然<sup>デフォルテ</sup>』など。

「なるほど。戻っておいたほうが良さそうだね。」

「雄二に何かあるとは思えんが、念の為にの。」

レオンの撤退命令に、十数名残しての撤退が始まった。

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その1（後書き）

ようやくBクラス戦が開戦、なのはと瑞希の召還獣の腕輪が力を見せました。

次回、教室に事件が・・・

楽しみに！



第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その2 (前書き)

第五問その2です!

今回は がキれます、黒くなります!

では、どうぞ!

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その2

「・・・うわ、こりゃ酷い。」

「まさかこうくるとはのう。」

「卑怯、だね。」

教室に引き返した明久達を迎えたのは、穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャーペンや消しゴムだった。

「酷いね。これじゃ補給がままならない。」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな。」

「根本ってヤツ、器小さいなあ・・・」

「あまり気にするな。修復に時間がかかるが、作戦に大きな支障はない。」

「雄二がそう言うならいいけど・・・（なんか微妙に気になる。）」

そんな中。

「ああっ!」

「フェイト?」

「どうしたの、フェイトちゃん?」

フェイトは自分のシャーペンを持って、

「誕生日にキラがくれたシャープンだったのにいっ！ー！うわあああああ・・・」

と言い、泣き出してしまった。

「あれ、私のシャープン、無事だ。」

「なんでなのはちゃんのため無事なんだろう？」

「魔王の逆鱗に触れなかったん」

「レオン、私が魔王ってどういうことなのかな・・・？」

「そのまんまのいゝみでゝすよん。」

「少し・・・頭冷やそうか・・・？」

「ダメ、なのはちゃん我慢して！？今レオン君を殺したら戦力が激減しちゃう！」

「放して！レオンにお仕置きしないといけないの！」

なのはが暴走、それを止めるのは。

「うわあああああ・・・」

「フェイト・・・落ち着いて？私もシャープン折られたから・・・」

「だからって、だからってこんな仕打ち酷いよ・・・」

泣き崩れるフェイトと慰めるアリシア。

「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているのに気づかなかったの？」

昼休みまでは戦闘開始から今までの間にやられたであろう嫌がらせ。それなら教室にいたはずの雄二が気づかないわけがない。

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた。」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな。」

「それ、承諾したの？」

「そうだ。」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路や高町や春原以外は、な。」

（明久：あ、そっか。）

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると本番は明日ということになる。」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね。」

「あ、明日・・・ですか？」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路や春原、キラにレオンの個人の戦闘力の方が重要になる。」

局所的な戦闘になるか瑞希などが止めを刺すか。

「だから受けたの？皆が万全の態勢で勝負できるように。」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い。」

（明久：そっか。それならいいけど。でも、そうすると何かがおかしい。いくら机に嫌がらせをしたいからといって、その為だけに僕らと対等な条件の協定を申し出てくるなんて。根本恭二はそんな甘い男なのだろうか。僕にはとてもそうは思えない。）

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうも何かされているかもしれん。」

そう言っていると、秀吉は教室を駆け足で行った。

「ん。雄二、あとよろしく。」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう。」

「吉井、私も一緒に行くよ・・・」

「待てフェイト！戦力をあまり削りたく・・・うおっ！？」

「根本恭二・・・。絶対に、絶対に許さない・・・！私の大切な物を壊した報い、必ず受けてもらう・・・！」

「なのはちゃん、フェイトちゃんが怖いよ・・・」

「わ、私もあそこまで怒ったフェイトちゃん見たことないよ・・・」

「

フェイト、激怒。その怒りは味方ですら恐怖した。

「あ、明久。連れていってくれ。このまま教室にいらしたら何を  
しだすかわからんからな。」

「わ、わかった。」

雄二達に背を向け、二人は走り出した。

そこまで全力で走っていなかったのか、秀吉にすぐ追いついた。

「なんか、まだまだ色々やってそうだね。」

「そうじゃな。この程度で終わると思えん。気を引き締めた方が  
良さそうじゃ。」

（明久：次はどんな姑息な手段で来るのだろうか？全く、そっちの  
方が戦力が上なんだから、正面から来てくれてもいいのに。）

「ところで明久よ、」

「ん？なに、秀吉？」

秀吉が見た先には・・・

「根本・・・、許さない・・・！この怨み、絶対に晴らす・・・！」

かなり黒い感情に染まったフェイトがいた。

「なぜハラウン妹がいるのかが知りたいのじゃが・・・」

「さっきの事態でね、雄二が連れてけ、ってさ。」

「なるほど・・・。放置しておくと何をしているか全くわからんからう・・・。」

秀吉も理解した。

そうしているうちに戦場が見えてきた。

「では、くれぐれも用心するんじゃぞ！」

「秀吉もね！」

「明久、気をつけてねー。」

「レオン！なんでここに！？」

「暇だから。それとフェイトのストッパーで。」

秀吉、レオンと警告し合い、それぞれの部隊に戻る。

「吉井！軍師殿！戻ってきたか！」

出迎えたのは須川。

「待たせたね！戦況は？」

「かなりマズいことになっている！」

「え！？どうして！？」

向こうから本隊が出てきた様子もない。

「島田が人質にとられた！軍師殿対策もとったようだ！」

「なっ！？」

「僕対策？」

（明久：今度は人質か！卑怯な手段の王道じゃないか！）

（レオン：なんだ・・・って！ま、まさか・・・あの姿は・・・！？）

「おかげで相手は残り四人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

現在、敵と睨み合いになっている。

「・・・そうだね。とりあえず戦況を見たい。」

「まずどうなつて・・・」『この声はレオン様！？』・・・（ルナと  
リルの声だ・・・最悪。）すまない、逃げるわ。」

「レオン！？なんで・・・」



明久が気になって聞いた。

答えはすぐわかった。

『レオン様〜!!!』

「来るなあ〜っ！」

レオンは逃げ出した！

敵にいた二匹のポケモンが追いかけて行った。

「・・・あとで異端審問会を開こう。」

「了解した。戦況を見たいなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる。」

須川が前を歩き、明久が後に続く。

部隊の人垣を抜けると、そこには須川が言ったとおり二人のDクラ生徒と捕らえられた美波及びその召喚獣の姿があった。

そばには補修担当講師もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

まるでドラマだ。

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら召喚獣に止めを刺して、この女を補修室送りにしてやるぞ！」

美波を捕らえている敵の一人が明久を牽制してくる。

（明久：・・・そうか。数少ないウチの女子前線メンバーをただ戦死させるんじゃなく、人質にとって補修室送りをちらつかせ、こちらの士気を挫く作戦か。うまいやり方だ。

このまま攻め込めば、僕らが相手を倒す前に島田さんに止めを刺され、補修室送りにされて辛い思いをさせてしまう。

・・・問題ないな。）

「・・・隊長？」

「総員突撃用意iiiiiiiiっ！」

「・・・了解。」

「隊長それでいいのか！？ハラウン妹もやめろ！」

（明久：仕方ないさ！戦争に犠牲はつきものなんだ！決して日頃痛め付けられている仕返しじゃなく、これは指揮官として必要な判断なんだ！）

「ま、待て、吉井！」

敵から待ったコールがかかる。

「こいつがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「馬鹿だから。」

「殺すわよ。」

（明久：え？何？どうして人質にされている島田さんに僕が気圧さ  
れているの？）

「・・・私の獲物ターゲットの策略に嵌まったから・・・」

「くっ・・・。ハラオウンはわかっていたか・・・。こいつ、吉井  
が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に  
向かったんだよ。」

（明久：なんだって！？）

明久、驚く。

「島田さん・・・」

「な、なによ？」

美波の顔が心なしか赤い。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」  
「違うわよ！」

（明久：恐ろしい。これじゃオチオチ保健室で昼寝もしていられない。）

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？それでも心配したんだからね！」

「（え・・・？）島田さん、それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ぶいっ　顔を背ける美波。

（明久：そっか。僕のことを心配してくれたのか。あの島田さんが・・・）

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく」

「総員突撃iiiiiiiiっ！」

「了解！」

「どうしてよっ！？フェイトも止めてよ！」

（明久：どうして？そんなの決まっているじゃないか！）

「あの島田さんは偽者だ！変装している敵だぞ！」

（明久：変装する相手を間違えたな！あの島田さんにそんな優しさがあるわけがない！）

喜々として僕を殺りにくるに決まっているじゃないか！

「おい待てって！コイツ本当に本物の島田だって！」

狼狽するBクラスの生徒。

「黙れ！見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に……」

「倒す……」

「や、やめ……」

□ Bクラス 鈴木二郎 VS F

クラス フェイト・T・ハラオウン

英語W 33点 VS

110点

□ Bクラス 吉田卓夫 VS F

クラス 須川亮

英語W 18点 VS

59点

死にかけ二人はすぐに撃破された。止めも。

「ぎゃあああ……」

「たすけてえ……」

近くにいた補修講師に連行される二人。

「（さて、残りは・・・）皆、気をつけろ！変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

明久曰く的美波もどきだ。

「よ、吉井、酷い……。ウチ、吉井のこと本当に心配していたのに……」

「まだ白々しい演技私のを続けるか！この大根役者め！（島田さんはそんな台詞を吐いたりはしない！）」

「本当だよ！本当に心配したんだから！」

「取り囲むんだ。いくらBクラスでも、この人数なら勝てるから！」

「本当に、『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！コレ本物の島田さんだ！（こんな嘘に騙されるのは彼女以外いない。）」

「えっ!？」

「・・・島田さん、大丈夫だった？」

床に座り込む美波に手を差し伸べる。

フェイトは我を取り戻した。

（明久：くそつ。Ｂクラスめ、なんて卑怯な真似を。）

「・・・」

素直に明久の手に掴まり、立ち上がる美波。

「無事で良かったよ。心配したんだからね。」

「・・・」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

「・・・」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「・・・」

「（なんか、やりにくい。）あー、島田さん。実はね？」

「・・・なによ？」

やっとリアクションを返した美波。

明久はそのことに大してお礼の気持ちを込めて、最高の笑顔を作った。

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いていたんだよ？」

明久は殺されかけた。

「美波・・・ごめんね？私、気が動転してて・・・」

「フェイト・・・。いいわ、気にしてないし。フェイトに何かあったんでしょ？」

「うん・・・」

「理由は聞かない。謝ってくれたんだし、それでいいわ。」

「・・・ありがとう。」

明久の死体（笑）の隣でフェイトが美波に謝っていた。



第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その2（後書き）

ついにフェイトがキレました。

新登場のポケモンの説明です。

ルナ ピッピ

お月見山に築かれた国の姫。

レオンに一目惚れして今は追っかけ。

Bクラス。

リル ラルトス

まだ『なきごえ』しか使えないときにポチエナの群に襲われ、そこをレオンに助けられて惚れた。

『レオンのため』に技を拾得した。

Bクラス。

二人とも追っかけです。

次回は秀吉が・・・

レオンが・・・

レインが・・・

お楽しみに！

第五問 「戦争と卑怯と」万死に値する！」 前編 その3「（前書き）

またまたお久しぶりの投稿です、遅くなってしまい申し訳ありませんでした！

今回は明久・美波・レオン逃追劇の始まりです。

では、どうぞ！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』 前編 その3」

「・・・ここはどこ？」

明久が目を覚ますと、明久の視界に汚い天井が入った。

「あ、気が付きましたか？」

近くから聞こえる可愛らしい声。

声の主は瑞希だった。

「心配しましたよ？吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたようなけがをして倒れているんですから。」

その後方では、レオンがくすくす笑っていた。

「明久さまぁ・・・くくくく・・・」

「レオン！笑わないで!？（でも姫路さん、それ正解。）」

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ?」

（明久：いや、あれは戦争というよりは一方的な虐殺だったような・  
・。）

「ちょっと色々あつてね。それで試召戦争はどうなったの？（身体  
の節々が猛烈に痛い・・・）」

「今は協定どおり休戦中だよ。続きは明日になるね。」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害も少  
なくはないがな。」

雄二がFクラスの被害を書いたメモを読み上げる。

すべて予想の範疇だが、Fクラスの被害もかなり大きい。

廊下戦は圧勝に見えるけどそれはFクラスがほぼ全力を注いだ結果  
で、全体としては決して良い状態ではない。

「ハプニングはあつたけど、今のところ順調つてわけだね。」  
「まあな。」

相手は『あの』根本恭二、絶対に何か企んでいると踏む。

「・・・・・・軍師。（トントン）」  
「ムツッリー二、何か変わったことはあつた？」

全員が気がつけばムッツリー二がレオンのそばにいた。

この日はムッツリー二は情報係で、先頭には直接参加せずに周囲を警戒していた。相手の動きを逃さずチェックするためだ。

「・・・・・・・・・・Cクラスの様子が怪しい。」

「Cクラスの様子が怪しいだと？」

「・・・・・・・・・・（コクリ）」

ムッツリー二の話はこうだ。

Cクラスが試召戦争の用意を始めているとのこと。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな。」

「卑怯にも程があるわね。」

「本当だね・・・・・・・・」

雄二の言うことに賛同するアリシアとなのは。

（明久・雄二の言うとおりこの戦争の勝者を相手に戦うつもりなのだろう。疲弊している相手ならやりやすいだろうから。）

「雄二、レオン、どうするの？」

「んー、そうだなー・・・・・・・・」

「そりゃあ・・・・・・・・」

雄二とレオンはちらりと時計を見る。

四時半。

まだそんなに遅い時間じゃない。

「Cクラスと協定を結んだほうがいいね。」

「Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っただけで脅してやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ。」

「だよー。ですわよねー。」

「レオン、オカマになってるよ・・・」

「Cクラスが僕らと協定を結ぶのはそう難しくない話ではないかもしれないね。」

「よし、それじゃ今から行ってくるか。」

「そうだね。」

明久は痛む身体に活を入れて立ち上がる。体に異常はなさそうだ。

「秀吉とキラは念の為残ってくれ。」

「ん？なんじゃ？ワシやキラは行かなくて良いのか？」

「秀吉、お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作

戦に支障があるんでな。キラは、制圧のための戦力温存だ。」

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう。」

「う、うん。わかった。」

素直に引き下がる秀吉と、少し引き気味なキラ。

（明久：でも、雄二の言う念の為に何を想定してのことだろう？）

「じゃ、行くぞや。いざというときはレインを盾にしていこう。」

「酷っ!?!」

秀吉・キラ・このはを残して、明久・雄二・瑞希・ムッツリー・フェイト・なのは・レオン・レインというメンバーでCクラスに向かった。

「吉井、アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれるのよ。」

「それって吉井が悪いのか？」

廊下に出たところで、ハンカチで手を拭っている美波とカバンを肩に担いでいる須川に会った。

「あ、島田さんに須川君。ちょうどよかった。Cクラスまで付き合っ  
つてよ。」

明久は万が一自分が使者をやっている時のようにCクラスの生徒にボコられそうになった時、この人数では心もとないし、瑞希を守るための人材も必要だと考えた。

だから二人の友人に声をかけたのだ。

「んー、別にいいけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ。」

盾、もとい仲間ゲツト。

「急がんとCクラスの代表が帰ってしまうぞい。」

「うん。急ごう。」

こうして更に美波と須川を加えた十人でCクラスへと向かうことになった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げた。



Cクラスにはまだかなりの人数が残っていた。

ムツツリー二の情報通り漁夫の利を狙って試召戦争の準備をしているのだろう。

「私だけど、何か用かしら？」

明久達の前に出てきたのは、まじりつけの無い黒髪をベリーショートにした気が強そうな女子、小山。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に「雄二、待ちな。」レオン、何かあるのか？」

雄二が不可侵条約を結ぼうと話し始めた時、レオンが口をはさんだ。

「根本恭二・・・お前のやろうとしていることはまるっとお見通しだ！諦めて出てこい！」

「何い！？」

レオンが根元がCクラスにいるという。

「確か協定では試召戦争に関する行為を一切禁止すると言ったはずなのにね・・・どこかに隠れて不意打ちをしようとするなんてバカのとる行動だよ？」

「ぐっ・・・」

「おお、本当にいた！」

「そしてそこには誰か先生がいるはずだね、きっと。それこそそっちが協定を破ったことになるね。さあ、不可侵を破ったと認める！」

「ちっ……。だが、代表は最前列にいる！坂本を打ち取れ！」

根元が叫ぶと同時に取り巻きが動き出した。

その背後には先ほどまで戦場にいた、小柄な数学の長谷川先生がいた。

「長谷川先生！Bクラス芳野が償還を……。」「

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！試獣<sup>サモン</sup>召喚！！」

Bクラス芳野が雄二に対して攻撃しようとしたところを、間一髪で須川が身代わりになる。

須川のファインプレイだ。

「くっ、逃げるぞ皆！」

「くそっ！」

「須川、ここは任せたぞ！」

「了解です、軍師殿！」

「須川君、僕も手伝う！」

「レインは残るな！」

「あああああ……。」「

戦闘を開始した須川に背を向け、明久たちはCクラスから離脱しようと駆け出した。

『Bクラス	芳野孝之	V S	Fクラス
須川亮			
数学	161店	V S	41点
』			

「逃すな！坂本を、せめてレオンを打ち取れ！」

背後から聞こえてくる根本の指示と複数の足音。

はつきりと言うと不利。

根本はさっきの戦いで瑞希が数学を消費していることを知っているだろう、効果的な戦法だ。

「・・・あ、僕西村先生に呼ばれていたのを思い出した！」

「鉄人に！？なんで！？」

「訳あり！」

レインは階段で一人別れて行った。

「一人別れたぞ！あつちを一人追うんだ！」  
「来るなあ〜！」

一人だけレインを追って行ったらしい。

「はあ、ふう……」

「はあ、はあ……」

「瑞希、大丈夫？」

廊下を走っていると、瑞希となのはが遅れ始めた。二人とも運動が得意でない上に瑞希のみ身体が弱いからこの全力疾走は厳しそうだ。

「あ、あの、さ、先に……行つて、ください……」

「お、お願い……」

息絶え絶えに二人が言う。このまま二人を連れていたら確実に追いつかれる。

Fクラスとしてはここで二人を失うわけにはいかない。

主戦力の瑞希や理数系に強いのはがいなくては明日の戦争がどうなるかわからない。

「雄二、レオン！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受ける！二人は姫路さんや高町さんを連れて逃げてくれ！」

明久はその場に立ち止まり振り向いて、遅れて走ってくる雄二、瑞希、なのは、レオンとすれ違う。

（明久：まさかこの僕がこんなことを言う日がくるなんて。男らしくて格好良いかな？）

「よ、吉井君、私のことは、気にしないで」

「だ、大丈夫、だから」

「・・・わかった。ここはお前に任せる。」

瑞希となのはの言葉を遮り、雄二が答える。

さすが雄二、感情に流されず、今必要な処置を正しく把握している。

「・・・・・・・・（ピタッ）」

「いや、ムツッリーニも逃げてほしい。多分明日はムツッリーニが戦争の鍵を握るから。」

一緒に立ち止まったムツツリー二。

（明久：気持ちはありがたいけど、ムツツリー二にも重要な役割があるはず。ここで失うわけにはいかない。）

「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら。隊長殿？」  
「僕は？」

明久の隣には一緒になって立ち止まった美波とレオンがいた。

「島田さん、頼めるかな？レオンはみんなを送り届けてほしいんだ。」

「はいはい。お任せあれっと。」

「雄二に任せりゃいいでしょ。雄二ならやってくれるなら。」

笑いながら追っ手が来る方向を見つめる美波と明らかに任せっきりなレオン。

「……………（グッ）」

ムツツリー二は明久たちに親指を立てて走り去った。

「・・・さて、どうするの、隊長どの？」

「・・・何も考えてなかった・・・」

「はあっ!？」

立ち止まったはいいが、無策だった明久。

「大丈夫、僕に策がある。少しでも時間を稼げるいい策がね。」

レオンが自信満々に言った。

「いたぞ！Fクラスの吉井と島田とレオンだ！」

「ぶち殺せ！」

正面から追っ手がやってくる。長谷川先生も一緒だ。

「Bクラス！そこで止まれ！」

相手の氣勢を削ぐように、明久は強い口調で呼び止める。

「いい度胸だ。たった三人で食い止めようつてのか？」

「いや、その前に長谷川先生に話がある。」

レオンが強い語調で話をする。

（美波：レオン、策って何？長谷川先生に訴える気？）

（明久：そうだよ！何をする気なのさ！？）

（レオン：見てて、相手の弱みを突いて見せるから。『死神軍師』の本領、見せてあげるさ。）

心配する美波と明久と小声でやり取りするレオン。

「なんですか、レオン君。」

長谷川先生が前に出てきた。

「Bクラスが協定違反をしていることはご存知ですよね？」

「いえ、Fクラスが協定違反をしたと聞いてきただけですょ？Bクラスは何もしてないですし・・・」

あくまでしらを切る作戦に出る。



（美波：あの根本のことだからうまく言っているでしょうね。）

「それに、休戦協定を先に破りに来たように見えたが・・・。  
そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは戦争云々以前に人としてどうかと・・・」

先生の少々厳しい意見。

（明久：ここまでは予想通りだけど、どうするの？）

「では少し先生に聞きましょう。相手が協定違反をするかもしれないとして教室に潜入・待ち伏せを仕掛け、僕が気付かなかつたら協定違反だと訴えてそのまま雄二を打ち取ろうとした。それこそ協定違反なのではないでしょうか？そして、あの場に教師が潜んでいたことが決定的なBクラスの協定違反の証拠としてあげられないのですか？明らかに戦闘の意思を持ち、協定を破ろうとしている気のあるほうを守ろうとするなんて、審判を務める者としてどうなんですか？公平性を保つべき立場の者がそんな不公平な扱いをするなんて、審判失格ですね・・・」

一気にたたみかけるようにレオンが言う。

その言い方は、相手に何も言わせないように、すべての弱みを完全に突き切るといった感じだった。

「くっ・・・かかれえーっ！」

全ての弱みを握られてしまったBクラスの生徒が向かってきた。

教室。

「坂本君、吉井君は、大丈夫、なんですか・・・？」

「もちろんだ。ほかのやつらならともかく、明久ならなんとかなる。それに、レオンもいるからな。」

「でも・・・」

「確かにアイツは勉強ができない。でもな、学力が低いからといって、全てが決まるわけじゃないだろう・・・？」

「そ、それは、どういう・・・？」

「あのバカも、伊達に『観察処分者』なんて呼ばれてないってコトだ。それに、『死神軍師』だっている。そう簡単にやられると思うか？」

「そうですね。」

そのころのレインは・・・

「おっしやあーっ！全滅させたあーっ！・・・西村先生、話って何ですか？」

「あー、バンドの件なんだが・・・」

「まさか無理になったとか・・・？」

「課題曲込みのコンテスト方式になった。課題曲はそれぞれのバンドで違うらしく、どれだけ原曲に近づけるかが勝負らしい。」

「でも、なんで変ったんですか？」

「そればかりは俺も知らん。」

「マジすか・・・」

第五問 「戦争と卑怯と」万死に値する!」 前編 その3」(後書き)

さて、明久らが追われ始めました。

『死神軍師』はどう動くのか・・・

お楽しみに!

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その4 (前書き)

少し短い今回の話、明久が頑張ってます!

レオンが役に立ってませんが・・・

では、どうぞ!

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その4

『サモン  
試獣召喚!』

追っ手が声を揃えて召喚獣を呼び出す。

走って逃げているが、この先は行き止まり。明久たちが戦闘区域に入るのは時間の問題だ。

「吉井、レオン、どうするのよ!」

「どうするって言われても、どうしよう!」

「僕が囷になる?」

「それはダメ! いいから何か考えなさい!」

美波と明久とレオンが怒鳴りあうように会話をする。

「よし、こうしよう! まず島田さんが四人を引き付ける!」

「ふんふん、それで?」

「僕が逃げ易くなる。」

「馬鹿。」

「・・・アンタとは一度決着をつける必要がありそうね。」

廊下の終わりが見えてきた。この先には壁と窓しかない。

「それじゃ島田さんが召喚獣を喚んで、」

「喚んで？」

「僕の盾になる。」

「死になさい！」

「うわ、突然どうしたの！？キレル十代！？」

「十代でなくてもキレルよ、それ・・・」

明久は走りながらも起用に拳を打ち込んでくる美波をいなす。

ついに行き止まりになった。

壁を背にして振り返ると、走ってくる敵の姿が見えた。

「ちよろちよろ逃げ回りやがって。疲れるだろうが！」

「というか、別にこいつらを追いかける必要はなかったんじゃないか？」

「いや、意味はある。今ここに『死神軍師』レオンがいるからな、あいつを打ち取れば戦況は一気にこちらに傾くさ。」

「雑魚二人はさっさと片付けて、本命を倒さない？」

明久たちが逃げ切れないことがわかると四人は好き勝手なことを言い始めた。

「ちょっと、好き勝手言ってくれるじゃないの。」

好き勝手言っ相手に食ってかかる美波。

「だって・・・なあ？」

「だって、なによ？」

「お前ら、最低クラスじゃん。」

（明久：なんてことを言うんだ！ここは言い返さないと！）

「クラスは最低じゃないぞ！メンバーが最低なだけだ！」

『（吉井／明久）は（黙ってなさい／黙ってる）！』

（明久：あれ？フォローしたのに怒られたよ？）

「Fクラスだからって甘く見ないことね。」

「そうか？所詮Fクラスだろ？」

「なら、自分で確かめることね！試獣<sup>サモン</sup>召喚っ！」

美波が喚び声をあげる。

それに応えて、何度か見た小さな美波が現れた。

「上等だ！実力差を思い知らせてやる！」



美波と言いつつに合っていたBクラスの男子が召喚獣を動かした。刀を手にしての突進。

細かい動作ができないための単純な攻撃だが、威力は十分だ。

「このおっ！」

美波も同じように召喚獣を突っ込ませた。

（明久：ああ、島田さんの召喚獣が力の差で倒され・・・）

「Bクラス	工藤信二	VS	Fクラス
島田美波			
数学	159点	VS	171点
「			

「お前、本当にFクラスか・・・？」

（明久：いや、対等にやり合ってる！どういうことだ！？）

「ふふつ。数学を選んだのが間違いだったわね。これなら漢字が読めなくてもなんとか解けるのよ！」

（レオン：おお、美波が格好良い！）

「ちなみに島田さん。古典の点数は？」

「一桁よ。」

（レオン：言い切った！これはこれで男らしいぞ！？）

「工藤君、フォローしようか？こんなので補修室送りにはなりたくないでしょう？」

「・・・くつ。頼む。」

悔しそうに唇を噛む工藤。確かにFクラス相手にこれは屈辱だろう。

そして美波はいよいよ苦しくなった。

鏑迫り合いで身動きが取れない今、敵が増えたら勝ち目はないだろう。

「島田さん、フォローしようか？こんなので補修室送りにはなりたくないでしょう？」

「足手まといよ。」

「酷いつ。」

悔しくて唇を噛む明久。

（明久：扱いが悪いですっ！）

しかし、明久にも遊んでいる暇はなくなった。痛みや疲労があるうとも、逃げることはできなくなった。

「……試獣召喚<sup>サモン</sup>。」

明久の足下に見慣れた魔方陣が描かれていく。数学の点数に応じた強さを持つ明久の召喚獣が徐々に姿を現し始めた。

精悍な顔立ち。

しなやかな形態。

軽やかな動き。

喚び出すために感じる絶対的な強さが顕現する。

「吉井は構うな！見るからに雑魚だ！」

「返せっ！僕の格好良い描写を返せ！」

「どきなさい雑魚でヘナチヨコ！」

「島田さん、君は僕の味方じゃないの！？あと、全く関係ない罵倒も混ざってるよ！（確かに持つてる武器が木刀だし、弱そうに見えちゃうかもしれないけど……。この状況はまさに四面楚歌（うち一人はクラスメイト）だ。」

「この状況はキツイわね・・・！」

美波が表情を歪ませる。

勝っているとは言え、点数は僅差、当然皆見の召喚獣も消耗が激しい。

「それじゃ、さようなら。」

そこに切り込むBクラス女子。

美波の召喚獣は攻撃を避けられる状態じゃない。

「（ここは僕の出番だ！）えい、足払いっ！」

召喚獣を走らせ、横から敵の足を引っ掛ける。

「ああっ！」

明久を無視していた上に、召喚獣の扱いに慣れていない相手は簡単によるめいた。

「更につ！」

明久の召喚獣が敵に木刀を叩き込み、完全に体勢を崩させる。

「いいいよいよおーっ！」

明久の召喚獣が勢いよく倒れこむ敵の後頭部を？み、地面に叩きつけた。

ゴン、と硬い音が廊下に響いた。

『・・・え？』

その場の皆の口から驚きの声が漏れる。

「さて、明久に火がついた。僕の仕事は・・・追跡部隊の殲滅だ。二人が逃げ切った後、『死神』の力をお見せいたそう・・・」

喧噪の中、レオンはそう呟いた。

第五問 「戦争と卑怯と」万死に値する！」 前編 その4（後書き）

明久がかなり頑張っていました！

レオンの最後の意味深な台詞、その内容が『死神』の由来です・・・

さあ、次回はいよいよ（色々な意味で）長かった第五問、終わります！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その5（前書き）

明久と美波の仲が進展した（？）その5です。

地味にキラがいなくなってますが、そこは気にしない方向で・・・

では、どうぞ！



第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その5

『Bクラス	真田由香	VS	Fクラス
吉井明久			
数学	166点	VS	51点
『			

先程の戦闘の参考用の点数が表示された。

(明久：は、恥ずかしい！トリプルスコアですよ!?)

「なんでだよ！真田の点数の方が高いはずだろ！？なんであんな弱  
そうな召喚獣にやられてるんだよ！」

Bクラス工藤が先生に問いかける。

「・・・別に先生が何かしているわけじゃないけどね・・・」

レオンが何気に呟いた。

「あれ？私の召喚獣、まだ生きてる。」

先程地面に叩きつけられた真田の召喚獣が起き上がった。

「明久の召喚獣の攻撃の威力、全然ないね・・・」

「吉井、どういうこと？」

「んー・・・。まあ、《観察処分者》の数少ない利点ってトコかな？（Dクラス戦で最初に皆の戦闘を見て思い出したことがある。それは、召喚獣の操作は難しいっていうことだ。）」

力が異常に強い上に手足の長さは本来の自分とは違う召喚獣、この感覚にはそう簡単に慣れるもんじゃない。

だからこそ、基本的に突撃とかの単純操作しかできずに点数の差で勝敗が決定してしまう。

「利点って？」

「要するに、召喚獣を使うのに慣れてるってことかな？」

明久には《観察処分者》として幾度となく召喚し、痛みや疲労のフィードバックを受けて感覚を共有してきたというアドバンテージがある。

他よりは多少細かい動作をさせることも可能だ。

「ぐ、偶然よ！」

敵が再度刀を構えて突撃してくる。

「（さっきので怯んでくれると嬉しかったんだけど。）うりゃっ。」

振り下ろされる刀に対して、明久の召喚獣は横から合わせるように木刀をぶつける。

点数でもわかるように力の差は三倍以上、正面からやりあったら木刀語と真っ二つだから、必然的に明久の召喚獣の防御方法は力を流すような形になる。

「・・・つく！」

相手の刀が外に外れる。隙だらけになった。

「はぁあっ！」

駆け抜けるように胴を薙ぎ、そのまま一回転して追撃の面。

『Bクラス	真田由香	VS	Fクラス
吉井明久			
数学	126点	VS	51点

表示される点数に若干の修正が入った。

（明久：やっぱり僕の召喚獣は弱いなあ・・・）

「・・・本気でやった方がいいな。」

「Fクラス相手に四対二っていうのも嫌だけど、そうも言っていないな。後ろの『死神軍師』も落とさないといけないしな・・・」

後ろの二人が前に出てくる。

「あ、いや、できれば二対二のままでもいいな、なんて・・・」

「吉井、違うわ。四対二じゃないわ。」

「ん？援軍でも来てくれたの？」

「五対一よ。」

「島田さん、この状況で君は僕を裏切るっていうのかい？そしてレオン、君は手伝ってくれないの!？」

「今戦況計算、同時に殲滅用の装備を考案中・・・」

（明久：一体僕はどこまで嫌われているんだ？）

「行くぞコラア！」

チンピラっぽい掛け声とともに切りかかってくる敵召喚獣。それを屈んで召喚獣によけさせる明久。

「こ・・・のっ！」

「ちょこまかと！」

（明久：ひいっ！更に二体が追加された！これはよく聞くリンチってやつでは？）

敵同士が一直線上に並ぶように召喚獣を動かす明久。

相手を倒すことよりも囲まれないことの方が重要だ。

「一撃当たれば倒せるのに・・・！」

「全然当たる気がしねえ・・・」

「メタルス イムみたいなヤツだな。」

「（そこまで弱くはないやっ！）・・・んしょっ、と！」

ムキになって大振りになった敵の懷に飛び込み、パンチを合わせる。

・・・命中！

同時に殴った明久の拳が痛む。ダメージのフィードバックだ。

「さて。ウチらも続きを始めましょうか？」

「・・・くつ。悪い！いったん引かせてもらう！」

一対一となれば勝ち目の薄い工藤が撤退していく。

罅迫り合いで消耗もしていたようで、賢明な判断。

「（これで三対三。いや、レオンは戦おうとしないし島田さんも消耗しているから三対一か。）島田さん、アレを！」

手が空いた美波に指示を出す明久。

目線の先にあるのは前にも使った消火器だ。

「了解！」

抱え上げ、安全弁を引き抜く美波。

（明久：これで逃げ切れる・・・）

「・・・」

「（・・・はずなのに、彼女は全く動かない。なんで？）は、早く使って！」

「うーん。どうしよっかな？」

凄く楽しそうな笑顔を作る美波。

「し、島田さん！何が望みなの！？（こ、こんな時に島田さんの本性が出てきた！いつまでも三対一なんてキツイのに！）」

「望み？うーん、そうね・・・」

「今なら大抵の言うことは聞きます！」

「それじゃ、まずは呼び方から変えてもらいましょうか。」

「変える！変えさせて頂きます！」

「じゃ、今後ウチはアンタのことを『アキ』って呼ぶから、アンタはウチのことを『美波様』って呼ぶように。」

「み、美波様！これでいい！？」

「今度の休み、駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな？」

「おのれ！僕が塩水で生活しているというのになんという贅沢を・・・

・ああっ！おごります！おごらせて頂きますから置いてかないで美波様！」

責める美波にレオンは・・・

「おおっ・・・美波が黒いね・・・。怖いね・・・」

なんて言っていた。

「よろしい。じゃ、最後に・・・」

「まだあるの！？もういいでしょう！？」

美波、とっても楽しそう。

「ウチのことを愛してるって、言ってみて？」

「（くうっ！調子に乗って！あとで覚えてるよ！？）ウチのことを愛してる！」

明久的に一言一句間違いなく復唱する。

（明久：これで文句ないだろう！）

「・・・ばか。」

ブシャアッ！



噴き出す消火剤。

粉まみれになりながら、明久たちは脱出に成功した。

（明久：それなのに、島田さんの機嫌がとても悪かったのはなんでだろう？）

教室。

「キラ、いるか？」

「アスラン？」

アスランがFクラスに立ち寄った。

「例の腕輪が完成したんだ。実験も兼ねてになるが、早速修正に入るか？」

「うん。今のままじゃ足手まといになるからね・・・」

「・・・屋上の方が今の時間、誰もいないはずだよな・・・」

「多分ね・・・」

「キラ、アスラン、一体何の話をしているんだ？」

キラとアスランが話をしているところに焰が割って入る。

「ああ、これは・・・」

「僕の過剰フィードバック修正用の腕輪なんだ。」

「なるほどな・・・。キラは仕方ないよな・・・」

「だから、ちよつと行ってくるね。」

「ああ。」

キラはアスランに連れられて教室を出た。

廊下。

消火剤の粉がすべて落ち切った後・・・

「・・・おい、『死神軍師』がただ一人残っているぞ？」  
「こいつ、自殺願望か？」

レオンに対し好き勝手に言う三人。

「僕が自殺願望者だと言いたいのかい・・・？」

「じゃなかったら何だっというんだよ？」

「じゃあ・・・教えてあげるよ・・・。僕は・・・」

「お前らを殲滅する殺戮希望者だ！」

この瞬間、その三人の補修室送りが確定した。

その三人は鉄人に補修室に連れて行かれていた間、

『アイツは死神じゃない……。』『閻魔』だ……。』

という、うわ言を全員が言っていた。

「あー、疲れたー・・・」

「よ、吉井君！無事だったんですね！？」

明久が戸をあけると瑞希が駆け寄ってきた。

「（揺れる胸部がとても眩しいな・・・）うん。このくらいなんともいであっ！」

明久が感じた爪先を踏み抜かれる感触。

（明久：今日は特に扱いが悪い気がする。）

「ふんっ！」

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも・・・」

「（キッ！）」

「あ。い、いや。美波。」

射殺するような眼光で明久を睨む美波。

（明久：さすがに『様付けはしなくてもよい』とは言われたけど、

呼び方は変えなきゃいけないらしい。呼び慣れないから困るなあ。」

「・・・随分二人とも仲良くなつたみたいですね？」

「え？これで？（仲良しは脅迫を受けた拳句足を踏みつけられたりはしないはず。）」

「お。戻ったか。お疲れさん。」

「無事じゃったようじゃな。」

「ん。ただいま。・・・あれ、キラは？」

雄二と秀吉が明久に近づいてくる。ムツツリー二も明久を見て小さく頷いていた。

あまり心配はしていなかったみたいらしい。

そんな中、明久はキラがいないことに気がついた。

「キラは明久が戻ってくるちょっと前にアスランと二人で屋上に向かったぞい。何か、「キラの召喚システムの問題の修正」の為だと言っておったのう・・・」

「『召喚システムの修正』・・・。あ、フィードバックの問題の修正かな？」

「たぶんそうだろ。それを知っているのか、フェイトも泉戸も移動していないしな。」

「私たちもいますが・・・」

「あ、そういえば関たちもいたな。・・・さて、お前ら。」  
「ん？」

今この場に残る全員を見回して雄二が告げる。

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい。」

（明久：向こうもそれが狙いなのだから、僕らが勝ったとしたら間違いない息つく暇を与えずに攻め込んでくるだろう。）

「じゃあどうするの？このままじゃ勝ってもCクラスの餌食になっちゃうよ？」

「そうじゃな・・・」

「心配するな。」

頭を悩ますのはや秀吉に雄二が野性味たっぷりの活き活きとした顔で告げる。

「向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある。」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ。それに、さっきのことだが、レオンが追っ手を秒殺殲滅したらしい。」

『うわぁ・・・』

全員がレオンの殲滅報告に引いたのを最後に解散となり、続きは翌

日へと持ち越しになった。

次回、第六問

「戦争と卑怯と『万死に値する!』」

後編



第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 前編 その5（後書き）

レオンがついに、『死神』の片鱗を見せました。

明久は相変わらず弄られてますが・・・

次回はいよいよ後半に入ります！

お楽しみに！

第六問 「戦争と卑怯と」万死に値する!」 後編 その1(前書き)

第六問、Bクラス戦後半です!

雄二の作戦とは・・・?

では、どうぞ!

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 後編 その1

第六問

以下の問いに答えなさい。

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

『good - better - best  
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は - erや - estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

高町なのはの答え

『good - god - gone』

教師のコメント

『良い』『神』『goの過去分詞』

消し跡が残っていたので苦し紛れに書いたことがよくわかります。  
よく頑張りました。

レオンの答え

『先生、僕日本ピカチュウだから英語でなくてもいいじゃん？』

教師のコメント

あとで職員室に来るように。

「皆・・・大変なことになった・・・」

朝、レインが沈痛な面持ちで告げた。

「今回の清涼祭、バンドコンテストになった・・・」

『嘘っ!?!』

「本当。西村先生が言ったからね。」

「鉄人が言っただんじゃ信じるしかないね・・・」

「でも、なんでだろうね?」

「この学園の軽音部があまりにもダメだからじゃないのか?練習もしないし、目立った活動や成績すらないから・・・」

『さもありなん・・・』

「とっ、とりあえず今日は戦争の途中なんだし、練習は終わってからで・・・」

「そっ、そうだね、終わってからの方がいいね。」

音楽室での話だった。

「昨日言っていた作戦を実行する。」

同日朝、教室に登校した明久らに雄二は開口一番そう告げた。

「作戦？でも、開戦時刻はまだ先よ？」

現時刻：午前八時半。開戦予定時刻は九時。

「坂本殿、気でも狂いましたか？」

「関、さり気なく酷いことを言うな。作戦実行先はBクラス相手じゃない。Cクラスの方だ。」

「なるほどな。それで、一体何をする気だ？」

「秀吉にコイツを着てもらう。」

そう言って雄二が鞆から取り出したのは文月学園の女子の制服。

「ねえ坂本君、それ、どう手に入れたの？」

「まさか・・・」

「高町もアリシアも変な想像をするな！」

「まあ、それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

（明久：いや、男としては大いに構った方がよさそうな気がする。  
けど、秀吉だし。）

「くくく・・・雄二、あんたもなかなか策士だなあ・・・」

「れ、レオン？」

「レオンは分かったみたいだな。秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう。」

「なんで？」

雄二の作戦が分からず、頭を捻る面々。

「レイン、秀吉をちよつと外させてくれ。」

「い、いいけど・・・」

「作戦の意味がよく分からんのじゃが？」

「わかんないけど・・・とにかく。」

レインは秀吉をトイレまで誘導した。

「さて、この作戦の意味を僕から説明するよ。さっきの女子の制服もともと秀吉は女子に近いでしょ？そんなものを着たらますます秀吉は女の子らしくなって、Aクラスの木下優子と見分けがつかなく

なる。秀吉と彼女は一卵性双生児かと思うほどよく似ているし、違うのはせいぜいテストの点数と話し方ぐらいしかないはず。それが狙いのさ。」

『な、なるほど・・・』

「ところでレオン、昨日一人で何をやっていたんだ？」

「ん？・・・無双。」

『む、無双！？』

雄二の問いにさらりと答えるレオン。その答えに一斉に引き気味になるFクラス面々。

「昨日は楽しかったなあ・・・。一瞬で全員を補修室送りにできたんだもん・・・」

『し、『死神軍師』だ・・・』

全員に訪れた戦慄と安心感。

もしレオンが敵に回っていたら・・・と思うと、ぞっとする話である。

「と、とりあえず秀吉を連れてきてくれ・・・」  
「り、了解しました。」



・・・

「とりあえず作戦は分かったのじゃが・・・、いささか不安じゃのう・・・」

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ。」

「う、うむ・・・」

「ちよつ、ちよつと木下君!？」

「こ、ここで着替えるの!？」

「・・・はうつ（ふらぁ・・・）」

「お、おい、春原!・・・ダメだ、気を失った・・・」

雄二から制服を受け取り、その場で生着替えを始める秀吉。

その瞬間、焦り始めたのはとフェイト、気を失った優。

さらに・・・

（明久：な、なんだろうこの胸のときめきは。相手は男なのに目が離せない!）

「・・・・・・・・!!（パシャパシャパシャパシャ!）」

明久は秀吉から眼を離せなくなっており、ムツツリーに至っては、指が擦り切れるんじゃないかというくらいに凄い速さでカメラのシャッターを切っていた。

ときめいているのは明久だけじゃなかった。

「よし、着替え終わったぞい。・・・ん？皆どうした？」

（明久：きつと僕らは皆とても複雑な表情をしているんだろうな・・・）

「さあな？俺にもよくわからん。」

「おかしな連中じゃのう・・・」

（男子の殆ど：いや、絶対おかしいのは（秀吉／木下）の外見だつて！どうしてそんなに色っぽいんだ！？）

「んじゃ、Ｃクラスに行くぞ。」

「うむ。」

雄二が秀吉を連れて教室を出ていく・・・前に。

「あ、ちよい待ち。」

「レオン？」

「これ付けてってくれ。何が起きているのか教室の奴らに伝えないとね・・・」

レオンは秀吉の制服の首筋に小さなマイクを付けた。

「・・・あ、僕も行くよ。」

明久もその後を慌てて追いかけた。

しばらく歩き、Cクラスを目の前にして立ち止まる明久たち。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉。」

Aクラスの使者になりすます以上、Fクラスの明久や雄二が同行するのはまずい。

よって、明久らは離れた場所から様子を窺うことにする。

「気が進まんのう・・・」

あまり乗り気ではない様子の秀吉。

「そこを何とか頼む。」

「むう・・・。仕方ないのう・・・」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前ならできるはずだ。」

秀吉は演劇部のホープで、演技が達者である。勉強は苦手だが、他の面に抜群に秀でているのだ。

「はぁ……。あまり期待はせんでくれよ……。？」

溜息と共に力なくCクラスに向かう秀吉。

「雄二、秀吉は大丈夫なの？気が重そうだし、うまくいくか分からないし……。別の作戦を考えておいた方が……。？」

「多分大丈夫だろう。」

「（本当かなぁ……。どうにも乗り気でない秀吉が気になるんだけど。メンタル面の影響が演技に出なければいいけど……。）心配だなぁ……。？」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ。」

雄二が口に指を当てる。

二人のいる地点から声は聞こえたりはしないだろうが、念の為明久は指示に従うことにした。

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえてくる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

(明久：うわぁ・・・)

「流石さすがだな、秀吉。」

「うん。これ以上ないってほどの挑発だね・・・」

開口一番豚呼ばわり。もうこれ以上何も言わなかつたがCクラスの敵意は間違いなくAクラスに向かうだろう。

<な、なによアンタ!>

<話しかけないで!豚臭いわ!>

(明久：自分から来たくせに豚臭いって……。もう突っ込みどころが多すぎだよ秀吉・・・)

<アンタ、Aクラスの木下ね?ちょっと点数良いからっていい気に

なってるんじゃないわよ！何の用よ！>

知名度としては秀吉よりも断然Aクラスの優子の方が高い。

今の秀吉は女装しており、見分けがつくはずもない。

まして相手は怒っており冷静な観察力を保っているわけもない。

完璧な作戦である。

<私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達<sup>あなた</sup>なんて豚小屋で充分だわ！>  
<なっ！？言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！？>

（明久：別にFクラスとは言っていないぞ小山さん！）

<手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達をふさわしい教室に送ってあげようかと思うの。>

（明久：ねえ雄二、演劇部ってここまで出来ないダメなのかな？  
それとも、うちの学校が異常なのかな？）

（雄二：・・・聞くな。俺にだって分かん。）

<ちようど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！>

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉は教室を出てきた。

「これで良かったのかのう？」

どこかスッキリした顔で明久たちに近寄る秀吉。

「ああ。素晴らしい仕事だった。」

<Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！>

（明久：うわあ、小山さんのヒステリックな声が聞こえてくる・・・。  
作戦はうまくいったようだけど・・・、なんだろうこの罪悪感は。）

「作戦もうまくいったことだし、俺たちもBクラス戦の準備を始めるぞ。」

「あ、うん。」

「レオン！そつちも準備を始めてくれ！」

雄二が秀吉の首筋につけられたマイクに向かってそう言った。

十分後に試召戦争が始まる。

明久たちは早足でFクラスに向かった。



## 教室

「なあレオン、お前さっき秀吉に何したんだ？」  
「まあまあ焦るな焦るな。これ聞いてりゃ分かるさ。」

レオンが教卓の前に置いたのはスピーカー。

そこから・・・

《はぁ・・・。あまり期待はせんでくれよ・・・（ガラガラガラ）》

秀吉が気乗りじゃないままドアを開ける音がした。

「これって・・・」

フェイトが何かに気づいた様子。

「さあ、昨日の雪辱を晴らす瞬間だ。」

レオンがそう宣言した瞬間・・・

《静かになさい！この薄汚い豚ども！》

『・・・これ、木下（君）だよ（な／ね）・・・？』

スピーカーから聞こえた声に啞然とした面々。

《な、何よアンタ！》

《話しかけないで！豚臭いわ！》

「ぷくく・・・あっはははははっ！ひいっ！ははははは・・・

」

秀吉の罵倒に笑うレオン。

「れ、レオン、笑うのはちょっといけないんじゃないかな・・・？」

「そ、そうだよ・・・。さすがにこれは酷過ぎるよ・・・。」

「なのはもフェイトもＣクラス代表に嵌められたの忘れちゃった？」

『そんなことないけど・・・』

レオンの意見に言い返せないのはとフェイト。

「私はどうなったのか知らないけど、嵌められたのなら言い返せないよね・・・。」

その場にいなかったこのははレオンの意見に賛同していた。

「ところで兄さんは？」

不意にアルティがキラの所在を聞く。

「キラなら多分、屋上にいるんじゃないかな・・・？」

「屋上に？なんでだろ・・・？」

「多分『例の腕輪』と召喚獣の調整でもしてるのかもね、アスランと。」

「そっか・・・」

キラのいない理由を知り安堵するアルティ・エルル。

そして・・・

《レオン！そっちも準備を始めてくれ！》

雄二の連絡が。

「・・・我らが大将の命令だ！野郎ども！戦いの準備じゃあつ！」  
『おおおおおつ！！！！』

レオンの掛け声に一斉に殺る気になる。

「俺たちが負けるはずねーんだ！」  
「こっちには『死神軍師』がいるんだ！」  
「Bクラスがなんぼのもんじゃい！」  
「うわ、江戸っ子らしいのが混ざってる・・・」

その事実は何気に引いたアリシアだった。

そして・・・

午前九時となり・・・

B  
ク  
ラ  
ス  
戦  
が  
開  
戦  
し  
た  
。

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 後編 その1(後書き)

今回はレオンが笑わせたいと思います。・・・スピーカーでね!

次回、『万死に値する!』がついに出版!

誰が言うかは・・・

楽しみに!

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 後編 その2（前書き）

第六問その2です。

今回、『万死に値する』を誰かが言います。

それが誰なのかは本文で。

では、どうぞ！



第六問 「戦争と卑怯と」万死に値する！」 後編 その2

「ドアと壁をうまく使うんじゃない！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

九時から開戦したBクラスとの試召戦争は、FクラスがBクラス前という位置から進軍を開始した。

レオンの指示は、『敵を教室内に閉じ込めろ、何人戦死しても構わない』

そんなわけでレオンの指示を遂行しようと戦争をしているわけだが、Fクラスに一つ問題があった。

瑞希の様子がおかしい。

本来は前線部隊総司令官であるはずの彼女だが、一向に指示を出す気配がない。

それどころか何も参加しないようにしているように、明久の眼に映った。

「勝負は極力単教科で挑んで！補給も念入りに！」

そんなわけで今指揮をとっているのは副司令の秀吉と副司令補佐のアルティ。

この数時間はレオンの指示通りうまくやれている。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が少ない！援軍を頼む！」

押し戻された左の出入り口にいるのは古典の竹中先生。

Bクラスは文系が多いため、強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破させる可能性が出てくる。

「姫路さん、左側に援護を！」

レオンの作戦では午後に瑞希が担う重要な役割があるとのこと、明久的にはそうそう瑞希に頼るわけにはいかないが、この場合仕方ないと諦める。

「あ、そ、そのっ・・・！」

その肝心の瑞希が、戦線に加わらず泣きそうな顔をしてオロオロしている。

（明久：マズい！突破される！）

明久が突破の危険を感じた瞬間・・・

「明久、瑞希が動けない原因は他にあるみたい！僕が竹中先生を排除してくるから瑞希の心のケアを頼むね！」

「レオン！？大丈夫なの！？」

「おやおや？『死神軍師』の力を見誤っているようだね？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど・・・」

「じゃ、任せた！」

レオンは明久に瑞希のことを任せ、竹中先生の所へ向かった。

レオンは人込みの間を縫うように走り、竹中先生の耳元でこう囁いた。

「・・・先生、ツラ、ずれてますよ・・・」

「っ!!!？」

頭を押さえて周囲を見回す竹中先生。

そして・・・

「少々席を外します！」

レオンの目論見通り少しの間が出来る。

「古典の点数が残っている奴は左側の出入口口へ！消耗した野郎は補給に戻りやがれ！・・・『レオンの脅迫辞典』国語分類編』を使うことになるうとはね・・・」

何気なくぼそつと呟いたレオン。

だが、レオンの行動によりFクラスは少し持ち直したはずだ。

「姫路さん、どうかしたの？」

明久は瑞希に声をかける。

（明久：なんだか分からないけど様子がおかしいし……。この原因がはつきりしないと動きが取れないし……。）

「そ、その、なんでもないですっ!」

ブルブルと大きく首を振る瑞希。

あまりに大きな動き故に、本当に何かあったことがバレバレだ。

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし……。」

「ほ、本当になんでもないんです!」

そう言う瑞希の顔は相変わらず泣きそうな顔のままだ。

（明久：……。絶対におかしい。）

「右側出入り口、教科が現国に変更されました!」

「数学教師はどうした!」

「Bクラス内に拉致された模様!」

「おいおい……。これじゃBクラスの思うつぼだね……。」

「私が行きますっ!」

そう言つて瑞希が戦線に加わろうとしたが・・・

「あ・・・」

突如動きを止めうつむいた。

（明久：なんだろう、何かを見て動けなくなったようだけど・・・）

（レオン：瑞希の見ていた方に何が・・・？）

明久とレオンが瑞希が見ていた方を眼で追つた。

その先には窓際で腕を組んで二人を見下ろす卑怯者　根本恭二  
の姿があつた。

（明久：根本君がどうかしたのかな？）

（レオン：根本に何かあるのかな？）

見にくいが目凝らして観察する。レオンに至つては千里眼状態になつていた。

『っ！っ！』

二人は、彼が手にしている物を見た。

何の変哲もない、手に入れようと思えば普通に手に入る物だが、逆にいくらお金を出しても買えない物でもある。

彼が持っていた物・・・

それは三日前の放課後、瑞希が恥ずかしがって明久から隠した、あの封筒だった。

「・・・なるほどね・・・。そういうことか・・・。」

「・・・酷いことを・・・。昨日の協定からおかしいと思っていたんだ・・・あいつが、あの卑怯者が対等な条件の提案をするとかさ。」

つまり、あの時点で瑞希の無力化の算段が立っていた訳になる。

「姫路さん。」

「は、はい・・・？」

「具合が悪そうだからあまり戦線に加わらないようにしてね。」

「試召戦争はこれで終わり、なんてわけじゃないんだから、体調管理に気をつけないと。」

「・・・はい。」

「じゃ、僕たちは用があるから行くね。」

「あ・・・っ！」

瑞希が何か言いたげだったが、明久とレオンはそんなことを気にせず背を向けて駆け出す。

大事な用ができたからだ。

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君・・・」

「女の子の想いを踏み躪るような行動をするとかさあ・・・。味な真似をするね・・・。」

思わずそんな台詞が口からこぼれる。

「あの野郎、ブチ殺す・・・っ！」

「根本恭二・・・貴様は・・・、貴様はあ・・・っ・・・。」



『貴様は万死に値する！否、死してその罪を永劫後悔するがいい！』

レオンがここからは殆ど隠れて見えない根本に口啖呵を切った。

ふざけではない。悪口でもない。冗談でもない。

彼がこの言葉を発した理由は・・・

純粋な他者を思いやる心とそれを踏み躪られたことに対する怒りだった。

第六問 「戦争と卑怯と」万死に値する!」 後編 その2（後書き）

今回、レオンと明久が根本恭二に啖呵切りました。

彼らはどんな行動をとるのか・・・？

次回、一人のキーが動きます。  
レオンがキーではありません。

楽しみに！

第六問 「戦争と卑怯と」万死に値する！」 後編 その3（前書き）

第六問その3です。

今回はレオンと明久が決断を！

では、どうぞ！

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 後編 その3

『雄二っ!』

「お?どうした明久にレオン?脱走か?チヨキでシバくぞ。」

二人が教室に飛び込んだら、雄二はノートに何か書きこんでいた。

「雄二、それって両方の勢力の現在戦力状況を書いたものだよね?」

「ああ。二人ともどうしたんだ?」

「・・・話があるんだ。」

「・・・とりあえず、聞こうか。」

明久たちは今、雄二のジョークに構っている余裕はなかった。

雄二もそれを察したのか、真面目な顔で二人の方を向いた。

明久たちも真面目な顔で向き合う。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ。」

「・・・お前に何があつたんだ?レオン、分かるか?」

「いや、聞かないでほしいな。分かるわけないじゃん。」

「(し、しまった!これだと僕はただの変態だ!)ああ、いや、その。えーっと・・・(本当は制服の中にある手紙が欲しいんだけど、そんな事情は話せないし・・・。どうしよう、このままだと僕は男なのに男が着ている制服を欲しがる変態だと思われちゃう!)」

明久は墓穴を掘ったことを焦っていた。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらい何とかしてやろう。」

（明久：受け入れられた！？貴様、なんだそのリアクションは！まるで『お前にそういう趣味があつたとしても不思議は無い』とでも言わんが借りじゃないか！）

とはいえ、明久は詳しい話をするわけにはいかない。

（明久：くうう……。かなり辛いけど、今はその誤解を甘んじて受けよう……。）

「で、それだけか？」

呆れたように明久を見る雄二。もちろんそれだけではない。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい。」

「雄二、それは僕からもお願いする。」

「理由は？」

『言えない。』

いずれは伝わることなのかもしれないが、明久やレオンが口にするものじゃない。

「どうしても外しないとダメなのか？」

「うん。どうしても。」

雄二が顎に手を当てて考え込む。

明久やレオンはかなりの無理を言っている。

瑞希が抜けると、戦力はキラ・レオンが最高戦力だが、キラは戦いに参加させられず、戦えるのは実質上レオンだけになる。

フェイトやなのは、アリシアや優も戦うのは可能なのだが、万能型ではなく、優の場合は長時間の戦闘も無理だ。

それに、レオンのポジションは代表補佐、つまり軍師なのだ。

従って公に戦うわけにいかないのだ。

万一なのはやフェイト、優やアリシアが戦死（補修室行き）した場合、レオンが戦うことになり、多対一の構図が強制的に出来上がってしまう、ということになる。

「頼む、雄二！」

「僕からもお願いだ！雄二！」



明久とレオンは雄二に深く頭を下げた。

身勝手な話である。

二人の頼みで雄二が得るものは何もなく、リスクだけは満載の話、理由も話さない頼みは普通受けることはないだろう。

「・・・条件がある。」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前らがやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる。」

が、雄二は二人の願いを聞いてくれた。

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ。レオンは？」

「やりたいのはやまやまだけど、僕ってほら、公に戦えないし・・・」

「

「おっと、レオンも作戦があつたな・・・」

「だったらその話、僕に任せてくれないかな・・・？」

「キラ・・・」

キラが教室にいた。

「キラ、大丈夫なのか？」

「完全に大丈夫、とは言えないけど、流石に貢献しないと・・・ね。」

キラの言葉に雄二は口の端を上げた。

「それで、僕たちは何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい。」

「皆のフォローは？」

「ない。あつてせいぜいキラだけだ。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ。」

「・・・難しいことを言ってくれるね。」

「こんなことを姫路さんにやらせるつもりだったんだろうか・・・」

二人がちよつとした愚痴をこぼす。

今の戦闘はBクラスの前後の扉の二か所で行われており、場所の条件から常に一対一となっている。これは少しでも時間を稼ぐためと、雄二の作戦に必要な行動らしい。

そんな中で教室の奥に陣取っている根本に近づく為には圧倒的な個人の火力が必要となる。

それが瑞希であり、キラであり・・・

「もし、失敗したら？」

「失敗するな、必ず成功させる。」

いつになく強い口調。

どうやら失敗はそのまま敗北につながるとみて間違いないな、とふむ明久。

（明久：さてどうする？どうやって目的を達成する？）

「それじゃ、うまくやれよ。レオン、作戦場所に向かってくれ。」

「了解。」

考え込む明久を置いて、雄二が教室を出ようと立ち上がる。

「え？どこに行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな。」

例の件とは室外機の件だ。

（明久：それよりどうしようか……。どうやって姫路さんの代わりを……。）

「明久。」

教室を出る直前、雄二は明久達の方へ振り向かずにこう言った。

「確かに点数は低いが、秀吉やムツリーニ、キラやレオンのように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している。」

「・・・雄二。」

「うまくやれ。計画に変更はない。」

そう言い残し、雄二は教室を後にした。

続いてレオンも教室を出た。

「（僕の、秀でている部分・・・？狭い場所での戦闘になっているから、細かい動作なんて役に立つわけないし・・・）・・・あ。」

「・・・明久君？」

突然声を出した明久の顔をキラが覗き込んだ。

明久は特別優れているわけじゃない。

が、他の人とは違う明久だけの特別が一つだけあった。

点数の低い明久にできる、数少ない方法が。

「・・・痛そうだなあ・・・」

想像しただけで明久の身体に痛みが走った。

が、覚悟はすんなりと決まった。

「・・・よっしゃ！あの外道に眼に物見せてやる！キラ、協力してくれ！」

「明久君・・・？何を手伝ってくれって言っんだい・・・？」

キラは即座に聞き返した。

「僕と召喚獣で勝負をして欲しい。」

「冗談じゃなくて、本気で・・・なんだね・・・？」

「冗談抜きだ。」

「分かった。」

明久とキラは、二人でDクラスへ向かった。

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 後編 その3 (後書き)

「後書きコーナーっす!」

「どうも、お久しぶりッス!アルスっす!

今回は投票についてまたお願いッス!

今回、「酔わせるか投票」をやったッスが、一票しかなくてしかも割れたので決選投票を行うッス!

対象は、

アリシア

フェイト

の二人ッス。

期間は一週間ッス!

よろしく頼むッス!」

第六問 「戦争と卑怯と」万死に値する!」 後編 その4 (前書き)

Bクラス戦終了の第六問その4です!

今回はそれしか言えません!

では、どうぞ!

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 後編 その4

「本当に、やるんだね・・・」

向かいにいる明久に再度問いただすキラ。

「ああ。」

「フィードバック、物質干渉状況は・・・」

「僕基準にしてくれ。」

「・・・分かった。・・・Setting Bracelets  
start. Material interference level  
and Feedback level set 30% .  
(訳：腕輪のセッティング開始、物質干渉レベルとフィードバック  
レベルを30%に。)」

キラが自身の腕輪のセッティングを始める。

(明久：・・・何を言っているのか全く分からない・・・)

「・・・Setting finish, bracelet,  
Get set! (訳：セッティング終了、腕輪、起動!)」

キラの腕輪が召喚フィールドを展開した。



召喚フィールド、物理干涉レベル・フィードバックレベルともに30%で展開されている。

「す、すごい・・・」

明久は思ったことをそのまま口に出してしまった。

「さあ、明久君、行くよ！（君の作戦、乗った！）」  
「・・・ああ！」

二人は大きく息を吸って、腹の底から声を出した。

『<sup>サモン</sup>試獣召喚っ！』

毎度おなじみ明久の召喚獣と、キラの召喚獣。

明久的には『観察処分者』として雑用をやっていた時はただただ面倒なだけだったが、感謝していいかという感じがしている。

『行けっ！』

二人の召喚獣が相手目掛けて駆け出した。

明久の召喚獣は拳と一体となれと言わんばかりに木刀を強く握りしめさせる。

（明久：行っけええっ！）

壁を背にしたキラの召喚獣に対し、駆ける勢いを乗せて大きく拳を振るった。

ドンッ！

「ぐ．．．うっ！」

モーシヨンの大きなその動作は、キラの召喚獣にいと也容易くかわされた。

そして、壁を殴りつけた召喚獣の痛みが、明久にフィードバックする。

「行けえっ！」

キラもお返しに、と言わんばかりのモーシヨンの大きい攻撃を準備する。

（明久：腕輪の力を使うのか！？）

明久が見たのは、キラの召喚獣の両肩の砲門クスイファイアスと腰の砲門バラエーナ、ライフル一丁が壁を殴りつけた直後の明久の召喚獣の背中に向けられた瞬間だった。

数秒後、その五つの砲門から・・・

バシューウウウウウウウウツ！

『H・M・F・B（High Mat Full Burst、ハイマツト・フルバースト）』が放たれた。ハ

が、こちらも簡単にかわされた。

「・・・んのおっ！」

更に力を込めた一撃を明久の召喚獣が放つ。

キラの召喚獣は上昇して避け、拳はまたも壁を打つ羽目になった。

「つう・・・っ！」

再び痛みが明久の拳に響く。

教室を揺るがすほどの力を込めた一撃だから、その反動は半端ではない。

「明久君、時間が！」

キラが壁に掛けてある時計を見上げて告げた。

現在時刻は午後二時五十七分。

作戦開始まであと三分となった。

<お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての。>

遠くからBクラス代表・根本の声が聞こえた。

<どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？>

対するは雄二の声。瑞希が戦闘に参加できない分、彼が率いる本体も出動したのだ。

「らあっ！」

明久は再び召喚獣を動かす。

大振りの攻撃はキラの召喚獣には当たらない。

まるで学習能力がないかのように壁に叩きつけられた拳。

先程の痛みがまだ抜けないうちに新しい痛みが明久の拳に訪れる。

「うおおっ！」

そしてキラもまた壁に『H・M・F・B』を放つ。

キラの持ち点も一度『H・M・F・B』を放つ度に大量の点数が消費されていく。

<はア？ギブアップするのはそつちだろ？>

<無用な心配だな。>

<そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？>

<・・・お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ。>

<けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお。>

<負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな。>



「はぁあっ！」

明久の召喚獣、四度目の攻撃。

拳の先が暖かくなった。

明久が己の手を見てみると結構な量の出血があり、教室の床に血溜まりができていた。

<や、やばいよぉっ！ふえ、フェイトちゃん！>

<天和、もう少しだから！もう少しで・・・>

<っ！フェイト殿、前に敵が！>

<えっ！？>

<危ないっ！（バシユウっ！、ぎゃあああああっ・・・）>

<あ、ありがと、なのは・・・>

こちらも苦戦を始めていた。

<さっきからドンドンガリガリと、壁がうるせえな。何かやってい

るのか？>

<さあな。人望の無いお前に対しての嫌がらせじゃないのか？>

<けつ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！>

<・・・形成を立て直す！一旦下がるぞ！>

<どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！？>

「明久君、そろそろ！」

「うん、わかってる！」

明久はキラに目配せする。

キラは黙って頷く。

「おおおおおっ！」

明久は腹の底から力をこめて雄叫びおたけを上げた。

五度目、この先はない。

<あとは任せたぞ、明久、キラ。>

敵の本隊を引き付けた雄二が、壁の向こうからよく通る声でそう告げてきた。

午後三時ジャスト、作戦開始。

《だああああああつしやああああああつ！！》

召喚獣に持てる力の全てを注ぎ込んで、壁を攻撃する明久。

ハナから狙いはこのBクラスに繋がる壁、キラとの戦闘は壁を破壊させる召喚獣を呼び出す為だ。

「・・・ぐううつ！」

全身に走る痛みに神経がきしむ。

が、明久やキラにしかこんなことはできない。

痛みが返る代わりに、物理干渉能力を持つ二人と焰の召喚獣しか。

ドゴオッ！……！！……！！

豪快な音を立て、Bクラスにつながる道が生まれた。

『ンなっ！？』

崩れた壁の向こうにある、驚いて引きつった根本の顔。

Bクラスの戦力のほとんどは雄二率いる本隊を追って教室から出ている。

またとない好機。敵の主戦力は出腹、代表の防備は薄い。

「（ここを逃せば勝ちはない！）くたばれ、根本恭二ーっ！」

明久とキラは呆気に取られている根本に勝負を挑むために駆け寄った。

「このままいくぞ！Fクラス、キラ・ヤマトが・・・」

「Bクラス山本が受けます！試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

「しまった、近衛部隊が！」

まだ残っていた根本の近衛部隊がその行く手をふさぐ。

二人と根本の距離は20メートル程度、広い教室のせいで随分と距離がある。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」

取り繕うように二人を笑う根本恭二。

確かに二人の奇襲は失敗だ。既に周りを近衛部隊に取り囲まれている。

こうなった以上、点数に劣る明久や戦うのに危険なキラにはこの場を切り抜ける術はない。

だが、目的は達した。

ここで、急に話が変わるが教科の特性を説明する。

各教科にはそれぞれ担当教師がいて、その先生によってテスト結果にも特徴が現れる。

例えば、数学の木内先生は採点が速い。

例えば、世界史の田中先生は点数の付け方が甘い。

では、保健体育は？

保健体育は採点が速いわけでも、甘いわけでもない。

遠くにいる相手に戦闘を仕掛けられるわけでもなければ、豹しやすい先生であるとはいえない。

保健体育という教科の特性。それは、教科担当が体育教師であるが為の・・・

ダン、ダン、ダンッ！



出入り口を人で埋め尽くされ、四月とは思えないほどの熱気がこもった教室。

そこに突如現れて生徒と教師、三人分の着地音が響き渡る。

エアコンが停止したので、涼を求めるために開け放たれた窓。

そこから屋上よりロープを使って三人の人影が飛び込み、根本恭二の前に降り立った。

そう、保健体育の特性は、教科担当が体育教師であるが為の・・・並外れた行動力。

「・・・Fクラス、土屋康太・・・」

「Fクラス、レオン・・・」

「き、キサマら・・・」

「・・・Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む。(ノ！)」

「ムツツリイニイイイイイッ！レオオオオオオッ！」

明久らが近衛部隊を引き付けたので丸裸になった根本恭二。

最早どこにも逃げ場はない。

『・・・試獣召喚。<sup>サモン</sup>』

「ムツツリーニ、加速を使えるかい？」

「・・・今は、あまり使えない。」

「なら、瞬殺でっ！」

「・・・了解。」

「TRANS - AMっ！」

『Fクラス レオン 保健体育	VS	土屋康太 & Bクラス 根本恭二	Fクラス
	441点		
	&		
VS	203点		1023点
			』

赤く輝いた死神に跨った忍者は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てた。

刹那、切り捨てられた敵は細切れになった。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

次回、第七問 「戦果と告白とバンドの抽選」

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する!』」 後編 その4（後書き）

今回はキラと明久が頑張りました。

ついに出た腕輪の力、アスランお手製の腕輪です。

今、締め切った『酔わせるか投票』、フェイトとアリシアで決選投票を行っております！  
期間は来週金曜まで！

お願いします！

次回は戦後対談と明久の……。レインはバンドの課題曲を引きに行き……

お楽しみ！

**第七問 「戦果と告白とバンドの抽選」(前書き)**

Bクラス戦後対談とバンドの抽選がある第七問です！

進みは非常に亀進行ですが・・・

では、どうぞ！

## 第七問 「戦果と告白とバンドの抽選」

### 第八問

以下の問いに答えなさい。

『女性は一〇を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。』

姫路瑞希の答え

『初潮』

キラ・ヤマトの答え

『初潮（先生、これを男子に書かせるのは不味くないですか・・・？）』

教師のコメント

二人とも正解です。キラ君の言い分もよくわかりますが・・・

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

レオンの答え

『初潮（先生、これを書かせるとかどうかしてるよ・・・）』

教師のコメント

・・・すいません。

高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、アリシア・Ｔ・ハラオウン  
etcの答え

『答えたくありません！』

教師のコメント

・・・答えてください。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の



ことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43キログラムに達するころに初潮を見る者が多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢には人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される。』

#### 教師のコメント

詳し過ぎです。

「明久、キラ、随分と思い切った行動に出たのう・・・」

終戦後、Bクラスにやってきた秀吉に、まずそんなことを言われた二人。

「うう・・・。痛いよう、痛いよう・・・っ！」

今、明久はとにかく痛がっていた。

100%全てが返るわけじゃないが、素手でコンクリートの壁を壊したわけだから、その痛みは並じゃない。

「何とも・・・、お主らしい作戦じゃったな・・・」

「お主らしいって・・・、僕は作戦に乗っただけだから結局は明久君だけの作戦だよ？」

「で、でしょ？僕一人で考えたんだから、もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを考えず、自分の立場を追い詰める、男気あふれる素晴らしい作戦じゃな。」

「・・・遠まわしに馬鹿って言ってるじゃない？」

学校の壁を破壊したわけだから、問題にならないわけがない。明久の放課後の予定は職員室でのハートフルコミュニケーションで埋まった。

ちなみにキラは・・・

女子たちの懇願でそれが回避されていた。

「ま、それが明久の強みだからな・・・」

「だよね、明久の強みはそれしかないもんね。」

（明久：馬鹿が強み！？なんて不名誉な！）

「さて、それじゃ嬉恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」  
「・・・・・・」

床に座り込む根本。

さっきまでの強気が嘘のようにおとなしい。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない。」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け皆。前にも言ったけど、僕たちの目標はAクラスだよ？  
ここ、ゴールじゃないし。」

「うむ、確かに。」

「ここはあくまでも通過点だ。だから、Bクラスが条件をのめば解放してやろうかと思う。」

その言葉でFクラスの皆はどこか納得したかのような表情になった。

Dクラス戦でも言ったこともあり、雄二やレオンの性格を理解し始めているのだろう。

「・・・条件はなんだ？」

力なく根本が言う。

「条件？それは・・・お前だ、負け組代表！」

レオンが根元に向けて叫んだ。

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。」

普通は凄い言い様だが、それを言われるほどのことを彼はやっている。

だから周りの人間は誰もフォローを入れようとしない。本人もそれを分かっているようだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。」

昨日の昼に雄二が言っていた、あの取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ。」  
「・・・それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれでよかったが。

「そうそう、Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動したら見逃してもいいかな・・・？」

これは明久の要望の制服を手に入れるための手段だ。何となく雄二やレオンの個人的感情も入っている気がするが・・・

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを・・・！」

根元が慌てふためく。

普通はそうだ。

「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

「任せて！必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

Bクラスの仲間たちの温かい声援。

これを見るだけで根元が今までどういった行動をとってきたのかが分かる気がしてくる。

「んじゃ、決定だな。」

「くっ！よ、寄るな！変たひっ！？」

『素直に従わないと斬るよ・・・？』

いつの間にか根本の隣にいたフェイトとこのはが根元の首筋にそれぞれのデバイス（バルディッシュとアルセリオン）を突き付けていた。

更に・・・

「や、やめぐふっ！」

「雄二、とりあえず黙らせたまよ。」

「お、おう、ありがとう。」

いつの間にか現れ、首筋に刃物を突き付けている二人や、たった一

撃で根元を気絶させたレオンを見て流石の雄二も引いていた。

「じ、じゃあ着つけに移るとするか。明久、レオン、任せたぞ。」

「了解っ！」

「ういっす！」

ぐつたりと倒れている根本に近付き、制服を脱がせる。

「う、うう・・・」

うめき声をあげる根本。

（明久：ま。まずい、眼を覚ますかもしれない・・・）

「ふんっ！」

「がふあっ！？」

「おおお・・・、フェイトが女の子らしからぬ声を出した・・・」

フェイトが根元の腹を思い切り殴った。

そんな光景に驚きを隠せなかったレオンだった。

その後に見慣れた男子の制服を府袂、女子の制服をあてがう。

「うーん……。これ、どうするんだろう?。」

男子の制服と違う為、順序などやり方が分からず頭を悩ます明久。

そう困っていたら……

「吉井君、私がやってあげるよ。」

Bクラスの女子の一人がそう提案した。

「そう? 悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて?。」

「それは無理……。だって、土台が腐ってるし。」

(明久：ひ、酷い言われようだ……。)

明久が何気なくそう思ったのは内緒の事実である……

「じゃ、よろしく。」

明久はその女子に根本を託し、手に彼の制服を持ってその場を離れた。



根本改造組。

「さて、どう可愛くしてあげようかなあ・・・？」

「じゃあじゃあ、リボンとかつけたらどうかな？」

「あ、それいいわねエルル！あ、ウィッグとかどうかな！？」

「それいいね！」

アルティ、エルルを筆頭にした根本改造組による根本改造計画は着々と酷い方向に向かっていった。

（明久：えっと、多分、この辺に・・・）

明久はごそごそと根本の制服を探った。

彼の指の先に何かが当たる感触があった。

「・・・あったあった。」

見覚えのあるのを封筒を取り出し、自分のポケットに入れる。

（明久：さて、この制服どうしよう・・・？・・・よし、捨てちゃおう！せっかくだから女子の制服の着心地を家まで楽しんでもらおう。）

そんなことを考えながら、明久は皆より先にFクラスへ戻る。

根元の制服をゴミ箱に突っ込み、その後ポケットから例の封筒を取り出した。

「落とし物は持ち主に、っと。」

瑞希の席に置いてある、彼女の鞆に入れておく。

これで作戦完了・・・

「吉井君！」

「ふえっ！？」

背後からいきなり声をかけられて、不覚にも明久は間拔けな悲鳴をあげた。

「（なんかすごく恥ずかしい！）な、なに？」

明久は慌てて振り向いた。

振り向いた先には瑞希がいた。

「吉井君・・・」

眼が潤んでいる。

「（今日の瑞希さん、泣き顔ばかりだな・・・）ど、どうかした？」

鞆を勝手にいじっている姿を見られ、慌てる明久。

すると、そんな明久に瑞希は正面から抱きついた。

「ほわあああつつと！？」

「あ、ありがとうございます・・・！わ、私、ずっと、どうしていいか、わかんなくて・・・！」

どうしていいのかわからないのは明久の方だった。

「（くそっ！これは新手の陽動作戦か？）と、とにかく落ち着いて泣かれると僕も困るよ・・・」

「は、はい・・・」

精神の安定を図るために瑞希を引き離した明久。

（明久：ってしまった！引き離してどうする！こんなチャンスは二度とないだろうが！）

「いきなりすいません・・・」

涙目をこする瑞希。

「（ああっ！言いたい！もう一度抱きついてってお願いしたい！）  
．．も、もう一度．．．」

「はい？」

「（げっ！思わず口に出ていた！何か他のことを言わないと！）  
．もう一度壁を壊したい！（．．．って馬鹿あつ！僕の馬鹿あつ！  
お前はどこのテロリストだよ！もう一度壁を壊してなんになるって  
いうんだよ！）」

「あ、あの、更に壊したら留年させられちゃうと思いますよ．．．？」

「（うん。わかってる。わかってるからそんなに気の毒そうな目で  
僕を見ないで．．．）．．．それじゃ、皆の所に行こうか。」

「あ、待ってください！」

いたたまれない気持ちで逃げようとする明久を、瑞希が袖を握って  
引き止める。

「な、なに？」

「あの．．．」

（明久：まさか、良い病院を紹介してくれる気だろうか？くっ！前  
に僕が言った台詞がそのまま返ってくるなんて、こんな屈辱はいつ  
も通りだ！）

「手紙、ありがとうございました。」

うつむきがちに小さな声で言う瑞希。

「別に、ただ根本君の制服から姫路さんの手紙が出てきたから戻しただけだよ。」

「それってウソ、ですよね？」

「いや、そんなことは・・・」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験で途中退席した時だって、『具合が悪くて退席するだけでFクラス行きになるのはおかしい』って、私の為にあんなに先生と言い合いをしてくれていたし・・・」

（明久：そう言えば、そんなこともあったなあ。あの時は先生に冷たくあしらわれたから、逆に熱くなっちゃったっけ。）

「それに、この戦争って・・・私の為にやってくれてるんですよ？」

「え！？あ、いや！そんなことは！」

「ふふつ。誤魔化してもダメです。だって私、自己紹介が中断された時に吉井君が坂本君やヤマト君、レオン君に相談しているの、見ちゃいましたから。」

（明久：あ、あの相談を見られていたの！？これじゃごまかしようがないじゃないか！）

「凄く嬉しかったです。吉井君は優しくて小学生の時から変わってなくて・・・」

「（な、なんか妙な空気だなあ・・・。今までに経験したことのないむずがゆさを感じる・・・。よく分からないけど、僕はこの空気に耐えられそうにないよ！）そ、その手紙、うまくいくといいね！」

明久はとりあえず話題を変えようとした。

「あ．．．。はいっ！頑張りますっ！」

そんな明久の言葉に応えたのは、瑞希の満面の笑み。

その笑顔を見て明久は思う。

（明久：彼女は本当に雄二のことが好きなんだな．．．。わかって  
いたことだし、僕は雄二に敵わないと実感してるし．．．。悔しい  
けどしょうがないか。）

そう思った後．．．

「で、いつ告白するの？」

下世話な話を振った明久。

（明久：ま、これくらいは許されてもいいよね．．．）

「え、ええと・・・全部が終わったら・・・／＼」

瑞希は真っ赤になりながらそう答えた。

「そっか。けど、それなら手紙より直接言った方がいいかもね。」

「そ、そうですか？吉井君はその方が好きですか？」

「うん。少なくとも僕なら顔を合わせて言ってもらう方が嬉しいよ。  
（手紙は根本君のせいで嫌な記憶になっていそうだし、姫路さん自身にとっても、きっとその方がいいだろうし。）」

「本当ですか？今言ったこと、忘れないでくださいね？」

「え？あ、うん。」

明久の意見に瑞希は金言を得たかのように嬉しそうだった。

<こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！？>

<いいからキリキリ歩け。>

<さ、坂本め！良くも俺にこんなことを・・・>

<無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！  
？>

<き、聞いてないぞ！？>

<さっさと歩いて・・・。そうしないと斬るよ・・・？>

<わ、わかった！わかったからそれを向けるな！>



廊下からいきなり響いてきた言い争い。

「なんでしょうか？」

「なんだろうね？（伝令以外にいつの間にか撮影会までスケジュールに入れられたみたいだね・・・。雄二がハラオウンさんのどっちかの策略だと思うけど・・・、きっと根本君には一生忘れられない素晴らしい思い出を背負うことになるね・・・）・・・とにかく、頑張ってね。」

「はいっ！ありがとうございます！」

元気良く返事をして、瑞希は教室を出て行った。

・・・とても軽やかな足取りだ。

（明久：さて、僕も皆の所に行こう。）

瑞希の後を追いつ、明久も足を踏み出す。

「・・・っと、その前に。」

明久は雄二の席に歩み寄り、雄二の鞆を取り出す。

「とりあえず、雄二の教科書に卑猥な落書きでもしておこう。(僕がそう簡単に人の幸せを祝ってやる人間だと思っなよ!)」

生徒会室。

「うっわ・・・僕を除いても9人いるじゃん・・・。予選会、何グループで行うの・・・?」

レインは一人、課題曲を決めるための集会に来ていた。

《それでは、今回のバンドのコンクールの説明と課題曲の選考を行います!》

そして、説明開始。

バンドのコンクールは、まず近いうちに予選会を開始、生徒による投票で決勝進出グループを決める。

曲は課題曲を含めて予選で6曲以上歌うこと。

「10グループで争うのか……。勝ちぬける……。よね、きっと。」

レインは密かに勝てることを思った。

《では、課題曲を決めます!》

そう言われた時に、生徒会室の中央に箱が置かれた。

その箱に生徒が集まり、くじを引き始めた。

「な、なんだよこの曲！？訳わかんねえよ!？」

「人の名前のタイトルの曲なんてあるのかよ!？」

(レイン：うっわ、変な曲もあるんだ・・・)

そしてレインもくじをひ・・・

「あ、君たちのはこれね。ちょっと特別なメンバーだから、こっちで勝手にきめちゃったから。」

・・・けなかった。

「ちよっ!？それ酷いよ！手かなんで勝手に決められたの!？・・・もうあきらめてこれ見よう・・・。・・・『ライオン』と『きらめく涙は星に』・・・?というか、なんで2曲？」

レインは率直な意見を出した。

「・・・なんで2曲出す必要あつたのかな・・・?」

次回、「交渉と戦争と両雄激突」

## 第七問 「戦果と告白とバンドの抽選」(後書き)

今回は根元君が不幸になりました。

そしてバンドの課題曲ですが、剣 流星さんとキラーさんのリクエ  
ストを採用しました！

さてさて、悲鳴があがった二曲は一体何だったのか。

それはバンド予選でお分かりするでしょう・・・

次回からついにAクラス戦に突入！

お楽しみに！

6月18日、決選投票締め切ります！

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その1（前書き）

Aクラス戦開始の第八問その1です！

今回、ちょっとだけおまけがついています。

では、どうぞ！

## 第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その1

### 第八問

人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい。

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

1・脂質 2・炭水化物 3・タンパク質 4・ビタミン 5・ミネラル

教師のコメント

流石は二人、優秀ですね。

吉井明久の答え

1・砂糖 2・塩 3・水道水 4・雨水 5・湧き水

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

フェイト・T・ハラオウンの答え



1 ・キラ    2 ・水分    3 ・ビタミン    4 ・炭水化物    5 ・・・・分  
かりません

教師のコメント

なぜヤマト君が栄養になってしまっているのかわかりません。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時は遅発月経、更に十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい・・・』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

アルティ・ヤマトの答え

・・・五大栄養素・・・？何それ？

教師のコメント

あなたはここに来る前に料理学校へ行っていたのではないのですか？

点数補給のテストを終えた二日後の朝。

あとはAクラスを残すのみとなったFクラス面々は、もうじきお別れになる（予定の）Fクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している。」

壇上の雄二が素直に礼を言った。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、偽らざる俺の気持ちだ。」

「マジで?」

「マジだ。」

明久やレオンが聞き返していた。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

「おおおおおおっ!」

「そうだーっ!」

「勉強だけじゃねえんだーっ!」

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになっている気がしたが・・・

「・・・戦いたくないなあ・・・。ルカ君がいるし、はやてちゃんもいるし、ニコル君もいるし、アスラン君もいるし・・・」

「そうだったね・・・。私も戦いたくないや・・・」

なのはやフェイト、アリシアにこのはは半分ほど戦意喪失していた。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている。」

先日の昼食時、雄二が言っていた話だった為明久は驚かなかったが、クラスの面々は驚いたようで、教室中にざわめきが広がった。

「どういうことだ？」

「誰と誰が一騎打ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか!？」

「落ち着いてくれ。それを今から説明する。」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ。」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。

クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎討ちは当然だろう。

・・・が。

相手は学年主席であり、Bクラスを圧倒する瑞希ですら点数ではかなりの差をつけられている。

「（こう言っちゃ悪いけど・・・）馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ！？」

「馬鹿と学年主席じゃ確実に負けえっ！？」

思わず口に出ていた明久とレオンの頬をカッターがかすめる。

（明久・レオン：殺す気か！？って、まさか。いくら雄二でも友達

を本気で殺そうなんて考えるワケが・・・)

「次は耳だ。」

(明久：あれ？僕は友達じゃないみたいだ・・・)

「まあ、明久やレオンの言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。」

「雄二さあ、それ認めるならカッター投げる必要なかったんじゃないの？」

「いや、投げないと気が済まなかった。・・・まあ、その話は置いて、勝ち目はなかったかもしれないが、Dクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった。」

が、Fクラスは今こうして勝ち進んできている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない。」

最初は勝てないと思っていた試召戦争を勝ちに導いてきた雄二の言葉だ。

無理な話に思えても、否定しようなどという人間はこのクラスにはいない。

「俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる。」

「おおおおおおおつ！！！！」

皆の意思を確認する必要はなさそうな雰囲気。全員が雄二を信じているのだ。

「さて、具体的なやり方だが・・・、一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ。」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

（明久：日本史？別に霧島さんが日本史を不得手としているとも、雄二が得意としているとも聞いたことないけど・・・。・・・どうして日本史なんだろう・・・？）

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする。」

「小学生程度のレベルで万点ありなの？」

「その条件でやったらミスした方が負けるっていう注意力勝負になるよね。」

なのはが雄二の言った方法に疑問を持つ。

フェイトがすぐに捕捉を入れた。

「で、でも、同点だったらきつと延長戦だよ？そうになったら問題のレベルを上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ。」

「ブランクがある……。そうになると確かに坂本殿の方が不利かと思いますが……」

「いやいや、勝ち目は少しはあると思うよおおっ!？」

レオンがいきなりカッターを投げられる。

「ちょっ!?!危なっ!」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ?いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか。」

「え?じゃ、じゃあさ、その霧島さんの集中を乱す方法があるっていうの?」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルの



テスト程度の問題なら何の問題もないはずだ。」

「そう言えばそうだね……。先生の監視がある中で妨害できないだろうし……」

（明久・なのは：じゃあどうやって勝つんだろう？）

「雄二、もったいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう？」

「そうですよ……。」

Fクラスの面々も秀吉と優の言葉にうなずいていた。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。」

かぶりを振って、雄二は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ。」

「雄二、ある問題ってなんだよ？」

「その問題は……『大化の改新』。」

「『大化の改新』……？誰が何をしたのかを説明しろ、みたいなものじゃないの？」

「それ、お受験校なら出てくるかもしれないけど小学生レベルではないと思うよ？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ。」  
「実行したのは誰、とか？」

「いや、もつと単純だ。」

「それよりもつと単純というところ……何年に起きた、とかのう？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ。」

（明久：大化の改新の年号だつて？そんな基礎的な問題を、あの霧島さんが本当に間違えるのかな？『鳴くよ（794）ウグイス、大化の改新』とすらすら答えられるのに。）

（なのは：あ、あれ？大化の改新って何年にあったんだっけ？えと、えと……『蘇我虫殺した大化の改新』だったから……564年？）

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな問題は明久ですら間違えない。」

（明久：お願い……。僕を……。見ないで……）

（なのは：あ、あれ？違ったかな……？）

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ。」

（アリシア：……さっきから気になっているんだけど……）

「あの、坂本君。」

「ね、ねえ坂本。」

「ん？どうした、姫路にアリシア？」

「霧島さんとは、その……仲がいいんですか？」

「そうそう。さっきから坂本、翔子をさ、『あいつ』とか『翔子』とか呼んでたじゃん。」

「顔見知りじゃないとそんな呼び方はしませんよね……？」

（明久：まさかとは思いつけど、あの男・・・姫路さんに好かれているのみならず、才色兼備の霧島さんとまで良い関係なんてことはあるまいな・・・？）

「ああ。アイツとは幼馴染だ。」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「と、とりあえず皆は出てようか・・・」

「キラ！お前もか！？」

「黙れ男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をした！？」

キラを除いた男子生徒の意見は言葉がなくても満場一致。

「遺言はそれだけか・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは抑えつけた後で口に抑え込むものだ。」

「了解です隊長。」

（明久・レオン：我らが仇敵め！男子高校生四十九人分の靴下をとくと味わえ！）

「ま、待て！だったら焰も同罪だろうが！あいつはAクラスの水河が私が焰の嫁だと宣言しているだろうが！」

「お、おい雄二！俺に矛先を向けようとするな！」

「焰は後回しだ。まず先に雄二を殺る。」

「了解です！」

「あの、吉井君。」

「ん？なに、姫路さん？」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし。」

「・・・・・・」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の集。」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが。」

（Fクラス男子四十九名：・・・おお、そう言えば。）

「むしろ、興味があるとすれば・・・」

「・・・・そうだね。」

男子の視線がある女子に集中する。

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

慌てる瑞希。

何もしていないことを証明するために、別の方を向く。

「・・・？私がどうしたの？」

「・・・？」

「え、あ、その、私に何か・・・？」

視線の先にいたのはなのは、フェイト、優だった。

（Fクラス面々：違う。何かしたわけじゃないんだ。何かされる可能性が大なんだ。）

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。」

幼なじみということに引っかけかりを覚えるが、それを放置したFクラス面々。

「あいつは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。」

一度覚えたことは忘れないほど頭がいい、でもそれが今回は仇になる。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は・・・」

『システムデスクだ!!』

おまけ。

「・・・ところで焰。水河さんとのことなんだけど・・・」

「そつ、それをほじくり返すな!」

『さあ、吐け!なぜ水河さんに『私が妻だ』などと言われているのかを!』

「それは勝手にアイツが言っているだけだ!」

「アイツ・・・? 焰・・・、キサマ、まさか・・・」

「アイツとは幼なじみなだけだ!と言うか、親が勝手に決めた許嫁みたいなものになっただけで、俺自身何の承諾も・・・」

「殺せえええつ!!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!!!!!』

「やめろおおおおおつ!!」

焰はその後、Fクラスの嫉みに恐怖を覚えた。

「うぐう・・・。あ、あれは・・・アイツが・・・勝手に言い張っ

て  
い  
る  
だ  
け  
だ  
・  
・  
・  
」



第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その1（後書き）

今回はお知らせです！

フェイトとアリシア、どっちを酔わせるか、という決選投票は今日の23時59分に締め切ります！

感想は誰でも書けますので、気兼ねしないでどうぞ！

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その2（前書き）

ついにAクラスに乗り込む第八問その2です！

アニメと原作での優子の違いに少し驚くきっかけ・・・

では、どうぞ！

## 第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その2

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄二を筆頭に、明久、瑞希、秀吉、ムッツリーニ、レオン、キラ、フェイトら首脳陣勢ぞろいでAクラスに来ていた。

（明久：・・・毎回こうしてくれたらこうしてくれたら僕の制服は繕いだらけにならなかったと思うんだけど・・・？）

「うーん、何が狙いなの？」

現在雄二と交渉のテーブルについているのは秀吉・・・の双子の姉の木下優子。

「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ。」

優子が訝しむのも無理はない。下位クラスに位置する者が、一騎討ちで学年トップに挑むこと自体が不自然なのだから。

何か裏があると考えるのが普通だ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいんだけど・・・、だからってわざわざリスクを冒す必要は無いかな・・・？」

「賢明だな。」

予想通りの返事。

ここからが交渉だ。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

雄二が腕を組み、顎に手を当てながら聞く。

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題も無し。」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。その勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって・・・、昨日来ていたあの・・・。」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていまいようだが、さてさて。どうなることやら。」

「アレが代表のクラスに宣戦布告されて、最悪負けたらどんな気持ちになるのかな？」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよな？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。

これは負けたクラスがすぐさま再選を申し込んで、試召戦争が泥沼化しないための取り決めだ。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約には何の問題はない。・  
・Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな。」

このことは設備を入れ替えなかったからこそできる方法である。

「・・・それって脅迫？」

「ちよつとちよつと、人聞きが悪いよ？これはただのお願いだよ。」

（明久：なんだかレオンや雄二が根本君のように見える・・・こ

の交渉の仕方、悪役だもんね・・・)

「うーん・・・、わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ。」

「え、本当？」

意外とあっさりしている返事に驚き、会話に参加していない明久が声をあげてしまう。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・」

(明久：ああ、そう言えば根本君は女子の制服で話をしに来たんだっけ。そのおかげで提案が通るなんてね・・・。これは思わぬ収穫だよ。)

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて・・・、・・・そうだね・・・、お互い七人ずつ選んで、一騎打ち七回で四回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ。」

「う・・・」

能天気そうに見えて、きっちり警戒している。

「なるほど。こっちから姫路やキラ、レオンに優が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんやヤ

マト君、レオン君に春原さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし。」

（明久：う、まるで皆が軽く見られているような発言だ……。でも、彼女は的外れなことを言っているわけじゃないね。それほど霧島さんは僕らと実力がかけ離れているんだし……。）

「安心してくれ。ウチからは俺が出る。」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないし。」

これは競争じゃなくて戦争だから、と付け足す。

「そうか。それなら、その条件を呑んでもいい。」

「・・・ま、確かにそれが一番の譲歩案だね。」

と、二人の耳を疑うような返事。

（明久：本気！？一騎討ち七回なんて、僕らに勝ち目はないよ！？）

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせてもらう。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ。」

（明久：ああ、そうやって交渉を進める気だったのか。科目の選択権は僕らには必須だけど、一騎討ちの上科目を選ばせる、なんて虫のいい話を受けてくれるわけがない。だからこそその七人制なんだね。

」

「え？うーん・・・」

再び悩む優子。

クラスを代表しての交渉、この会話如何で仲間全員の立場がかわる可能性があるので、慎重になるのは当然である。

「・・・受けてもいい。」

「うわっ！？」

（明久・レオン：び、びっくりしたあーっ！）

「・・・雄二の提案を受けてもいい。」

突然現れた静かな、だが凜とした声。

いつの間にか翔子が近くに来ていた。

（明久：物静かな人だとは知っていたけど、全く気配を感じさせないなんて・・・。まるで武道の達人みたいだよ・・・）

「あれ？代表。いいの？」

「・・・その代わり、条件がある。」

「条件？」



「・・・うん。」

うなづいて、翔子は雄二・レオンを見た後に瑞希とフェイトを値踏みするかのようにじつくりと観察した。

そして、顔を雄二に向けて言い放つ。

「・・・負けた方は何でも一つ言うことを聞く。」

（明久：こ、これは、二人の貞操と人生観の危機だ！どどどうしよう！？もしそんなことになったら・・・、ドキドキして夜も眠れない！デジカメを買えるほどお金なんて残ってないのに！）

「・・・（カチャカチャ）」

「ムツツリー二、まだ撮影の準備は早いよ！と言うか、負ける気満々じゃないか！」

（レオン：おいおい、これはまずいぞ？このままじゃ味方の士気が駄々下がりだよ・・・。まさか、これも計算の内だったのか！？だとしたら、霧島翔子、恐ろしい奴だ・・・）

「じゃ、こうしよう？勝負内容は七つのうち四つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

全てを譲られることはなかったが、優子からの妥協案が得られたFクラス。

（明久：姫路さん、ハラオウンさん、どうする？）

（瑞希：え？何がですか？）

（フェイト：・・・えっと、私もよく分からないんだけど・・・）

（明久：何が、って！もし僕らが負けちゃったら二人は・・・）

（瑞希：何のことだか分からないですけど・・・、きつと大丈夫です。）

（フェイト：そうだよ。瑞希ならきつと大丈夫だよ。）

（明久：そんな簡単に・・・。いい？もし負けたら、二人は霧島さんに・・・）

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ二人が了承してないじゃないか！」

（明久：いくらクラス代表だからって、勝手すぎる！これは二人の問題じゃないか！）

明久が雄二に食ってかかっている間・・・

（キラ：・・・えっと、話がよく分からないんだけど・・・。なんで康太君がカメラを準備しているんだろう・・・？）

事情がよく分からないキラは、一人困惑していた。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない。」

自信満々の台詞。そこまで勝利を確信しているのだろう。

「・・・勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「・・・わかった。」

（明久：独特の雰囲気を持つ人だな。話し方だけならムツツリーニそっくりだし。）

「よし。交渉は成立だ。一旦教室にいったん戻るぞ。」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね。」

交渉を終了し、Aクラスを後にするFクラス首脳陣。

彼らの試召戦争の終結は、すぐそこまで迫っていた。

おまけその1・Fクラス首脳陣が去った直後のAクラス

「・・・あれ、代表？さっきまでそこに水河さんいたよね？」

「・・・涼なら雄二たちについて行った。」

「そ、そうなんだ・・・」

「・・・『私の夫に会いに行くんだ』って言ってた・・・」

「お、夫！？」

おまけその2・Fクラス、焰の受難

「話は成立したぞー。」

「おお、おかえ・・・、ちょっと待て、なんでここに涼がいるんだよ、おい。」

「は？ついてきているわけが・・・」

雄二が後ろを見ると・・・

誰もおらず・・・

「おい、誰もいないじゃ・・・」

「焰っ！やっと会えたよっ！」

「俺は会いたくなかったっ！」

「・・・気がつかなかった・・・」

「・・・ちよつと確認するけど、君は？」

「えつと、私、鍵宮焰の嫁の水河涼です！」

「待て、俺はお前を嫁と認めた記憶は全くない！つかお前を嫁と認めたくない！」

「そんなこと言わないでよ・・・」

明久たちの前で起きている夫婦漫才（？）。

「・・・殺せえええっ！！」

「了解っ！」

「またここで団結かよおおおっ！！」

ダッ!!

「あつ! 焔! 待って!」

タタタ・・・

「今ここに、異端審問会の開催を告げる・・・。異端者には・・・」  
『死の鉄槌を!』

ダダダ・・・

「・・・焔の明日はあるんだろうか・・・?」

Fクラスの男子の殆どがいなくなった教室で、レインがぼそつと呟いた。

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その2（後書き）

今回は『三月語至上最も長い話（6月19日現在）』です！

アニメを利用してますので、楽しめるかと。

次回、楽しみに！

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その3（前書き）

ついにAクラス戦が始まる第八問その3です！

どんな戦いになるのか、お楽しみに！



第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その3

「では、両名とも準備はいいですか？」

今回はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ。」

「・・・問題ない。」

一騎討ちの会場はAクラス。

この方が広い上、腐った畳のFクラスじゃ締まらないだろうからだ。

「それでは一人目の方、どうぞ。」

「アタシから行くよっ！」

Aクラスからは優子が。

対するFクラスからは・・・

「ワシがやろう。」

秀吉だ。

（明久：きつと木下さんの苦手科目や集中力の乱し方を知っているはず。この勝負は秀吉が木下さんの心をどう乱すかで・・・）

「ところでさ、秀吉。」

「なんじゃ？姉上。」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

（レオン：雄二、これはまずい！最悪秀吉が死ぬ可能性が出てきた！）

（雄二：いやいや、流石にそれは無いだろ・・・）

（明久：あれ、Cクラスの小山さんって、確かこの前秀吉が・・・）

「じゃーいいや。その代わり、ちよつとこつちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

（明久・レオン：確か秀吉が（木下さん／秀吉の姉貴）のフリをして罵倒しまくった相手だったような・・・）

<姉上、勝負は・・・どうしてワシの腕を掴む？>

<アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人たちを豚呼ばわりしていることになっているのかなあ・・・？>

<はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して・・・

・あ、姉上っ！ちがつ・・・！その関節はそっちには曲がらなっ・・・っ！>

ガラガラガラ・・・

扉を開けて優子が戻ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「い、いや・・・。ウチの不戦敗で良い・・・」

にこやかに笑いかけながらハンカチで返り血を拭く優子。

その光景には流石の雄二も何も言えないようだ。

「そうですか。それではまずAクラスが一勝、と。」

高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁一面の大きなディスプレイに結果が表示された。

『Aクラス

木下優子

VS

Fクラス

木下秀吉

生命活動

DEAD

WIN

(Fクラス面々：まだ生きてますよ・・・)

そう言いたいのが突っ込めなかった。

「では、次の方どうぞ。」

「なら、次は俺が行こう。」

「え、アスラン君が!?!」

Aクラスからはアスランが出ると意思を示す。

「確かアスランはレオンより少し劣るくらいの実力者・・・」

「じゃ、じゃあキラかレオンくらいしか勝てる見込みがないの!?!」

「・・・そうなるが、相手にはルカもいる、キラを出すわけにはいかないか・・・」

「そんじゃ、僕が行くよ。」

「レオン!? 大丈夫なの!?!」

「大丈夫だよ、『死神軍師、ここにあり』、ってね!・・・まあ、はやてに恨まれる可能性があるかもしれないけどね・・・」

「・・・だよね・・・」

「レオン、絶対勝てるよな？」

「うーん」

「・・・勝てるんだよな？」

「うううん」

レオンが出るといい、ふざけながら中央へ行った。

「レオン、まさかお前が来るなんてな・・・」

「アスランが出るなんて普通思つかい？それと同じだよ。」

「それもそうだな。」

「二人とも、そろそろ戦いを開始してほしいのですが・・・」

「あ、はい。サモン試獣召喚っ！」

「ほいほい。サモン試獣召喚っと。」

二人の掛け声とともに魔方陣が展開し、それぞれの召喚獣が現れる。

「お、おい、ザラの召喚獣、ヤマトの召喚獣に似てないか!？」

「似ているがわずかに違うぞ!」

「どうということなんだ!？」

アスランの召喚獣、その姿はジャスティスガンダムを模した鎧だったからだ。

ちなみにキラの召喚獣は、フリーダムガンダムを模した鎧だ。

一方レオンは・・・

「レオン、ふざけているのか？」

「いや、アスラン相手なら本気で行かないとね。僕の本領、無防具での鎌だよ？」

「そう言えばそうだった・・・」

「だったら、いくよ！」

「こい！」

二人の召喚獣がお互いに突撃を始め・・・

「TRANS-AM！」

「腕輪の力か！？しまった、忘れてた！」

「さあ、こっちが一本取らせてもらうよ！」

「させるか！」

紅く光ったレオンの召喚獣とそのままの状態のアスランの召喚獣がぶつかった。

参考用の点数が表示される。

		</			

「レ、レオンがギリギリだとおっ!？」  
「も、もしかしてレオンが負けるなんてことあるの!？」

参考用の点数の状態に愕然とするFクラス面々。

当のレオンは・・・

「やべ、点数の補給すんの忘れてた・・・。しかもさっきのTRA  
NS - AMで200点ほど死んだ・・・」  
「珍しいミスをしたな・・・。だが、手加減はしないぞ!」  
「それでも奇跡を起こすのが僕なんだ!」

自爆状態にも関わらずどうにかしようとするレオン。

そのまま戦いは進んでいた。

交錯する鎌と剣。

その二つが戦いが激化していることを物語っていた。

「・・・もうめんどくさいからそろそろ決着と行こうか！」

「めんどくさいって・・・」

「・・・と、いうことでアスラン、さらばっ！」

「ちょ、それはないだろ！」

「いんや、ある！だから、さっさと終われ！」

「そんなわけにいくか！」

レオンの攻勢が始まった。



「おお、レオンが攻勢に出た！」  
「そのままやっちまえ！」  
「軍師、頑張れよーっ！」

Fクラスからのエール。

「・・・なあ、ルカ君・・・」  
「は、はやて？」  
「私、ちょっとイラついてきたんやけど・・・」  
「お、落ち着いて、ね？」  
「アスラン君・・・、頑張つてな・・・」

はやてはルカに宥められていた。

「くそおっ！どうにか勝機を見つけないと・・・」

「勝機なぞ・・・、見つけてんじやあ・・・、ねえええええええっ  
！！！！」

どこかで聞いたことあるかのような台詞と共に攻撃を仕掛けたレオン。

ドゴオオオオオオオオン！！

その攻撃で教室に響く轟音。

アスランの召喚獣は・・・

「あ、危ないな・・・」

奇跡的に当たっていなかった。

「っ！いけっ！」

「げっ！？」

地面に鎌がめり込んで動けない状態のレオンの召喚獣に、アスランが突撃する。

「まずいつ！アスランとの点差が縮まるけど・・・やるしかない！  
Change mode、Mode：Deathscythe  
e11！そのまま『ハイパージャマー』っ！」  
「くそっ、姿を消したか！」

現在の点数が再び参考として表示された。

『Aクラス	アスラン・ザラ	V S	Fクラス
レオン			
数学	538点	V S	495点
『			

「雄二、レオンの点が凄く減ってるよ！？どうして！？」

「腕輪の力だろ。現にレオンの召喚獣の姿が見えない。」

「あ、そつか。」

「さ、坂本殿！レ、レオンのしょ、召喚獣・・・？の姿がないような気がするのだが！？」

「・・・明久、お前以上に焦っている奴もいるようだ・・・」

「よかったと受け取っていいのかな・・・」

レオンの状況に焦り始めているFクラス面々。

『そこおっ！』

お互いに声を出し、最後の突撃を仕掛けた。

姿を隠しているレオンの方が若干有利な気がするが、点数差としては明らかにアスランの方が上・・・

結果は・・・

『Aクラス	アスラン・ザラ	V	Fクラス
レオン			
数学	1点	V	0点
		S	

』

「あ、アスラン君が勝った〜っ！」  
「ぎ、ギリギリだ・・・」

喜ぶはやてに焦るAクラス面々。

「嘘だろ！？レオンが負けただと！？」  
「これは夢だ！夢に違いない！」  
「いや、吉井君！これは現実だよ！」  
「現実として受け入れるしかないみたいね・・・」

レオンの敗北に愕然とするFクラス面々。

「あっちゃ、負けた・・・」  
「あ、危なかった・・・」

ちょっと悔しがっている（・・・？）レオンと焦りが消えないアスラン。

「勝者、Aクラスアスラン・ザラ！」

高橋先生が勝敗を告げた。

「わり、負けちった。」

「まさか負けるとは思わなかったぞ・・・」  
「レオン、あなた一体どうしたのよ・・・」  
「そうだよ・・・。レオンらしくないよ？」  
「おおう、蓮華と桃香からも責められた！？ちよつと想定外過ぎるよこれ！？」  
「いえ、責めているわけじゃないけど・・・」  
「いや、完全に僕の凡ミス。」  
「凡ミスで済まされるかそれ！？」

言い争い、勃発。

「では、次の方どうぞ。」  
「私が出ます。科目は物理でお願いします。」

Aクラスからは佐藤美穂が。



「よし。頼んだぞ、明久。」

「え！？僕！？（どどどうしよう！？クラスを代表して勝負なんて！ここで僕が負けたら後がないのに！）」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている。」

自信たっぷりの雄二の言葉。

「（そうか……。雄二のヤツ……。ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ。」

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか？」

「いや、そんな話は聞いたことないが……。？」

「いつものジョークだろう？」

「そうそう、ジョークジョーク。」

味方であるはずのFクラスの面々の声。

（明久：ま、仕方ないか。今までの僕を見ていたら普通そう思うよね。でも……）

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤が明久を見て何かに気付いたかのように戦く。おのの

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない……」

戦闘の為に袖をまくり、手首を振る明久。

「それじゃ、あなたは……！」  
「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕……」

明久は大きく息を吸い、この場にいる皆に告げる。

「……左利きなんだ。」

『Aクラス	佐藤美穂	VS	Fクラス
吉井明久			
物理	389点	VS	62点
『			

（明久：あれ？本気を出したのに負けるなんて・・・？）

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで傷んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

「いや、殺せ！そこまでのバカは一度殺せ！」

「よし、勝負はこれからだ。」

「ちよっと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかったでしょ！？」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

「ほ、本気を出した左で殴りたいいいいつ！」

明久は雄二に向かってそう吠えた。

「では、三人目の方どうぞ。」

「・・・・・・（スック）」

康太（ムツツリーニ）が立ち上がった。

科目選択権が初めて活きてくる。

なぜなら康太は総合科目のうち、その80%を保健体育で獲得する猛者。その単発勝負ならAクラスにも負けはしないのだ。

「じゃ、僕が行こうかな。」

Aクラスからは色の薄い紙をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。

（明久：誰だろう？あまり見たことはないんだけど・・・）

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね。」

（明久：身体の凹凸も少なくて、パツと見少年のようだ・・・）

「教科は何にしますか？」

高橋先生が康太に尋ねる。

「・・・保健体育。」

康太の唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子が康太に話しかける。

（明久：なんだろう？転校生だし、ムッツリー二の実力を知らないのかな？随分と余裕みたいだけど・・・）

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・・キミと違って・・・実技でね」

「・・・実技・・・？」

（レオン：お、おいおい、これすごい問題発言じゃないのかい！？）  
（レイン：じ、実技・・・！？実技だと・・・！？）

「・・・っ！！（ブシャアアアアアアッ！！）」

康太が鼻血を噴出した。

「ムッツリイイイ二っ！」

明久、康太の許に。

「・・・あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

「よくもムッツリー二に・・・なんて酷いことを！卑怯だぞ！」

「そっちのキミ、吉井君だっけ？選手交代する？でも、勉強苦手そうだね・・・。保健体育でよかったらボクが教えてあげるよ？・・・もちろん・・・」

一拍置いて・・・

「実技でね」

『 @ @ @ っ！！！！』

「お、おい、二人が地球圏外の言葉を言いながらぶっ倒れたぞ!？」

「吉井君!」

「アキ!」

瑞希と美波が明久に駆け寄る。

「余計なお世話よ! アキにはそんな機会永遠にないから!」

「そうです! 吉井君には金輪際必要ありません!」

「なんでそんな悲しいこと言うの・・・?」

明久は悲しそうな顔をしている。

「そっちの・・・えっと、レオン君だけ? キミはどう?」

「要らん! 僕はムツツリー二の『師匠』だから!」

『なにいつ!?!?』

レオンの爆弾発言に驚愕が隠せないFクラス面々。

ポタツ・・・

「ムツツリー二・・・？」

「（ポタポタポタ・・・）・・・大丈夫、これしき・・・」

「では、試合開始。」

「・・・サモン試獣召喚。」

「サモン試獣召喚。」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を手に持って出現する。

（明久：つて！400点オーバー！？）

「実践派と理論派、どっちが強いを見せてあげる。」

愛子が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光をまわせ、ありえないスピードでムツツリー二の召喚獣に詰め寄る。

「あっ！？土屋君が負けちゃうよ！？」

「なのは、彼なら大丈夫だよ・・・」  
「フェイトちゃん、なんで言い張れるの・・・？」  
「Bクラス戦でムツ・・・康太の力を見たからね。」  
「・・・今フェイトちゃんムツツリー二つて言いかけなかった？」  
「・・・言いかけた・・・」  
「だいぶ染まつたね・・・」  
「うん・・・」

なのはとフェイトの軽い漫才・・・

「ところでフェイトちゃん、いつの間にか土屋君のこと、名前で呼び捨てにしてたけど・・・、なんで？」  
「それは・・・ね？雄二が『仲間なんだから、皆呼び捨てにしろ』って・・・」

ちよつとしたフェイトの告白だった。

「それじゃ、バイバイ！ムツツリー二くんっ！」

そして、剛腕で斧を振る・・・



「・・・加速。」  
「・・・えっ？」

前に、康太の召喚獣の腕輪が光り、彼の召喚獣の姿がブレた。

それに戸惑う愛子。

それは愛子だけでなく・・・

「レ、レオン！土屋殿の召喚獣の姿が見えなくなっただぞ！？」

「レ、レオン、どういふことなのか説明して！」

「ちょ、愛紗、蓮華、ゆすら、ない、で・・・」

レオン、揺すられる。

「・・・加速、修了。」

ボソリと、康太がつぶやいた。

一呼吸置いて、愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『Aクラス

工藤愛子

V S

Fクラス

土屋康太

保健体育

446点

VS

576点

」

（明久：つ、強い！下手をすると僕の総合科目並の点数だ！）

「Bクラス戦の時は出来がイマイチらしいからな。」

雄二が驚く明久に説明する。

「そ、そんな・・・！このボクが・・・！」

愛子が床に膝をついた。

「これで三対一ですね。次の方は？」

淡々と作業を進める高橋先生。

「今度は僕が行く。今まで何もできなかったから・・・」

「キラが行くのか・・・。フィードバックは大丈夫なのか？」

「この腕輪で戦わせてくれるなら大丈夫だけど・・・」

「・・・だそうだ。高橋先生、それについては問題ないだろうか？」

「・・・仕方ないですね。ヤマト君だけですよ？」

「・・・キラなら負けることはないね。相手がルカじゃなければ・  
」

Fクラス、キラが出る。

「相手はキラか・・・」

「キラ君で確か本当の首席なんやろ？誰が・・・」

「僕が行くよ。勝てるか分かんないけど。」

「るか、勝てるかどうかよりも善戦してくれ。」

Aクラスからはルカが出た。

「じゃ、ルカ、ちょっと設定するから待っててね。」

「あ、うん。」

「・・・Setting Bracelet start・  
Material interference level and  
Feedback level set 0%・  
Setting finish,bracelet,Get set!」

キラの声で召喚フィールドが展開された。

セット状況は、物理干渉レベル・フィードバックレベル共に0%。

「では、試合開始！」  
『サモン試獣召喚っ！』

二人の掛け声で現れる召喚獣。

キラのはご存知、フリーダムを模した鎧の召喚獣。

ルカのは・・・

「お、おい！あの姿何なんだ！？」

「あ、あの剣黒いぞ！？そして姫路さんの剣よりデカイ！」

全員が驚いていた。

その姿は、まるで『魔王・アスラ』のような武装だった。

「・・・ルカ君、ここが初お披露目だったみたい・・・」

「高町、知ってたのか？」

「私とキラ君、フェイトちゃんだけが知ってるよ。」

なのはの言った事実思わず聞き出す雄二。

「キラ、悪いけど、勝たせてもらつよ！」  
「・・・ルカ、ごめん！」

お互いの召喚獣が突撃を開始する。

その突撃はお互い剣で防いだために失敗に終わる。

参考用の点数が表示される。

『	Aクラス	ルカ・ミルダ	V	S	Fクラス
	キラ・ヤマト				
総合科目	20500点	V	S	25000	
点	『				

「総合科目20000点オーバーだど!？」  
「あの二人は化け物なのか!？」  
「もはやあれは頂上決戦と言っても過言じゃないぞ!？」

この高得点同士の戦いにヒートアップする面々。

その間にも攻防は続く。

キラの召喚獣は速度を生かしてルカの召喚獣を惑わせ、その間にライフルを撃つ。

ルカの召喚獣はキラの速度を殺そうと予測攻撃をし、当たらなかった場合に飛んでくるライフルを正確に回避する。

「ああああっ！」

突如としてキラの召喚獣が『H・M・F・B』の発射準備に入った。

「はああああっ！」

ルカの召喚獣もそれに呼応して気を練る。

「この戦い、僕が勝つ！『魔王灼滅刃！』」

「負けるわけには、いかないんだ！でええええいつ！」

お互いに攻撃が放たれた。

その攻撃は物理干渉レベル0%なのにも関わらず・・・

『うわあああああっ！？』  
『きゃあああああっ！？』

周囲に突風を生み出した。

その突風が止み、辺りを覆っていた煙がはれ・・・

その場にいたのは・・・

ぐったりと倒れたルカの召喚獣と少し離れたところに浮いていたキラの召喚獣だった。

総合科目	0点	VS	2点
Aクラス	キラ・ヤマト	ルカ・ミルダ	VS
Fクラス			



「勝者、Fクラス、キラ・ヤマト!」

『うおおおおおおっ!!』

キラ勝利の宣告にFクラスの面々が歓喜をあげた。

「・・・ルカ君・・・」

「高町はこの戦い、見ない方がよかったのかもしれない・・・」

少ししこりを残してしまっていたが・・・

「これで三対二ですね。次の方どうぞ。」

「あ、は、はいっ。私です。」

「姫路さん、頑張ってね。」

「はいっ。頑張りますっ。」

Fクラスからはついに瑞希が出る。残った中でどの教科でもオール

ラウンダ で戦える二人のうちの一人だ。

「それなら僕が相手をしよう。」

Aクラスから歩み出たのは・・・久保利光。

「やっぱり来たか、『とりあえずの』学年次席。」

学年としては第五・六席の実力者で、振り分け試験を瑞希・キラ・レオン・優がリタイア、ルカが実力を出せなかった為、今彼は学年で次席の座にいる。

「ここが一番の心配どころだ。」

雄二が心配するのには理由がある。

利光の実力は瑞希とほぼ同等、総合科目の点数差にして20点程度しかない。

瑞希は連戦で疲れている今、負ける可能性は否定できない・・・

「科目はどうしますか？」

高橋先生が二人に声をかける。

（明久：そう言えば、科目選択権はどっちにあるんだろう？ 秀吉戦がうやむやになっていてよく分からないし・・・）

「総合科目でお願いします。」

利光が勝手に答えていた。

「ちょっと待った！何を勝手に・・・」

「構いません。」

「姫路さん？」

クレームをつけようとする明久を止める瑞希。

「それでは、試合開始！」

「サモン試獣召喚。」

利光が召喚獣を喚ぶ。

「Aクラス	久保利光	VS	Fクラス
姫路瑞希			
総合科目	4201点	VS	?????点
」			

「・・・凄い点数！学年次席ってこんなに点数高いの！？」  
 「姫路さん・・・」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚！」

「Aクラス	久保利光	VS	Fクラス
姫路瑞希			
総合科目	4201点	VS	4613点
」			

『よ、4500点オーバー！？』

全員驚愕。

「マ、マジか!？」

「いつの間にこんな点数を!？」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ・・・!」

驚きの声が至る所から上がる。

(明久：点数差400オーバー!？姫路さんが強いのは知ってたけどこれは尋常じゃないよ!)

「いつの間にこんな実力を・・・!でええいつ!」

「私・・・決めたんです、頑張ろうって!」

お互いの召喚獣が突撃する。

「・・・私、このクラスが好きです。・・・人の為に頑張れる、皆がいるこのクラスが・・・私の好きな人がいる、このクラスが・・・。だから、私も頑張ります!」

そして・・・一瞬で決着がついた。

「凄いやアキ！これで三対三まで追い上げたわ！！」

瑞希が明久達の方へ向かって走ってくる。

「姫路さん・・・（こんな頭の悪い男だらけのクラスが好きなんだ・・・でも、その中に僕も含まれているからちよつと嬉しいな・・・）

「では第七回戦、最終ラウンドを始めます！」

このとき、高橋先生の表情に若干の変化が見られた。

瑞希の急成長に、あるいはFクラスがAクラスと渡り合っているいことに戸惑っているのだろう。

「さて。俺の出番だな。」

「雄二・・・」

「ホントに大丈夫なのかい？」

「まあ見てなつて。」

雄二が中央に向かっていく。

「Fクラス代表、坂本雄二だ。」

「・・・Aクラス代表、霧島翔子。」

「では、教科は何にしますか？」

「勝負は、日本史の限定テスト対決をお願いします。内容は小学生レベル、方式は百点満点の上限あり！」

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる。

「テスト対決だと!？」

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル。満点確定じゃないか。」

「注意力と集中力の勝負になるぞ・・・」

これでFクラスに可能性が出てきた。

勝利の可能性が。

それがわかったからこそ、Aクラスの面々はざわついているのだ。

「わかりました。では試験を用意します。対戦者は教室に集合してください。」

ノードパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出ていく。

そんな先生の背中を見守り、雄二に近付く面々。

「雄二、後は任せたよ。」

ぐつと雄二の手を握る明久。

あとは雄二の勝負で全てが決まる。

「ああ。任された。」

明久の手を握り返す雄二。

「・・・・・・・・（ピッ）」

康太が歩み寄り、ピースサインを雄二に向けた。



「お前には随分助けられた。感謝している。」  
「……………（フッ）」

康太は口に端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました。」  
「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ。」

（明久：僕のこと？雄二は何を話したんだろう……？）

「はいっ！」

瑞希の元気な返事を聞いて、雄二は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

その笑みは相手を思いやるような、優しい表情だった。

「……………雄二、頑張れ。」

「レオン、本当にありがとうな。」

「いやいや、気にすんなって。」

最後にレオンと軽く言葉を交わした。

そして雄二はテスト場所である視聴覚室に向かった。

視聴覚室。

「では、始めてください。」

二人の手により、問題用紙が裏返された。

Aクラス。

「吉井君、いよいよですね・・・」

「そうだね・・・。いよいよだね・・・」

「もし、あの問題が出なかったらどうなるのじゃ？」

「集中力や注意力に劣るなら、延長戦で負けるかもしれませんね・・・」

「」

「で、でも、もし出ているのならば・・・」

「うん。僕らの勝ちだ。」

全員が固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

《次の問いに答えなさい。》

### 第一問

織田信長が長篠の戦いで手を結んだのは誰？》

（レオン：うつわ、フェイトやなのはに明久でも分かるんじゃないの？）

（明久：確か、徳川家康だっけ？）

（フェイト：え、えつと・・・家康と言う名前なのは分かるんだけど・・・、苗字が分からないよ・・・）

（なのは：え、あれ？だ、誰だっただけ？あれ、よくわかんないよ！確か、豊臣秀吉だっただけ？）

### 《第二問

アメリカ総領事ハリスとの間に、日米修好通商条約を結んだのは誰？》

「ね、ねえキラ、誰か分かる？」

「・・・井伊直弼・・・だったかな・・・？」

『そ、そんなあっさり答えちゃうの！？』

「な、なのはちゃんも！？」

### 《第三問

大化の改新は何年に起きた出来事？》

『っ！！！！』

問題に目を見開くFクラス面々。

「出た！」

「よし！」

そして、終わりを告げるチャイムが鳴った。

「では、限定テストの結果を発表します。」

全員が固唾を飲んで結果を待つ。

「Aクラス代表、霧島翔子・・・・・・・・97点。」

「くっ！」

「そんな・・・・」

「翔子ちゃん・・・・」

涙を流したり悔しがるAクラスの面々。

「Aクラス代表は満点を逃したぞ！」

「これで、私たち・・・・！」

「うん！これで僕らの卓袱台が・・・・っ！」

『システムデスクになるんだ!』

揃ったFクラス面々の言葉。

「続いて、Fクラス代表、坂本雄二・・・」

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ!」

『うおおおおっ!』

教室を揺るがすような歓喜の声。

「……うん。」

『……は。』



この瞬間、Fクラスの卓袱台が・・・

みかん箱になった。

次回、第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その3（後書き）

今回は決選投票の結果です。

フェイトとアリシア、酔わせるならどっち、という内容でやりました決選投票、結果フェイトになりました。

（一票しかなかったので結果も何もないですが・・・）

次回は原作第1巻ラストです！

ソロ曲も決まります！

楽しみに！

第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」(前書き)

今回はAクラス戦後の話とボーカル二人のソロ曲が決まります！

どんな曲かは楽しみに！

では、どうぞ！

第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」

第九問

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

《（ ）年 キリスト教伝来》

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

高町なのはの答え

『1550年・・・？あれ？1548年？』

教師のコメント

わずか一年違いですね。もうちょっと頑張ってみましょう。

フェイト・T・ハラオウンの答え

『えっと・・・確か1449年？』

教師のコメント

あなたも数字を一つ間違えているだけですね。もうちょっと頑張ってみましょう。

「・・・雄二、私の勝ち。」

床に膝をつく雄二に翔子が歩み寄る。

「・・・殺せ。」

「ああ殺してやる！絶対殺してやる！」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

瑞希が明久の後ろから抱き着いた。

「大体よ！53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、こんな点数なんて・・・」

「いかにも俺の全力だ。」

『この阿呆アホウがあーっ！』

「アキ、鍵宮！落ち着きなさい！アンタ達だったら30点も取れな



いでしょうが！」

『それについては否定しない！』

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「止めないで美波！瑞希！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が絶対に必要なのに！」

「それは体罰じゃなくて処刑だよ！」

瑞希やなのはが身体を張って三人を止める。

「・・・でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた。」

「言い訳はしねえ・・・」

（明久・レオン・焰：図星なのか！）

「・・・ところで、約束。」

（全員：あ。そう言えば何でも言うことを聞くって約束をしたんだっただ・・・）

「・・・・・・・・（カチャカチャカチャ！）」

康太は準備を始めていた。

明久も撮影の準備をしていた。

「わかっている。何でも言え。」

潔い雄二の返事。

（明久：自分のことじゃないくせに格好付けて！）

「・・・それじゃ・・・」

翔子が瑞希に一度視線を送り、再び雄二に戻る。

そして、小さく息を吸って・・・

「・・・雄二、私と付き合って。」

言い放った。

（全員・・・はい！？）

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き。」

（明久：え？え？どういうこと？）

（キラ：・・・一体、何が起きているんだ？）

（レオン：どうして翔子が雄二に交際を迫っているのかな？）

（焰：アイツは女子が好きなんじゃないのか！？）

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「・・・私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない・・・」

（レイン：つまり・・・霧島さんが男性に興味がないっていう噂で、一途に雄二を思っていた結果・・・ってことなんだよね・・・？瑞希やフェイト達を見ていたのってさ、たんに雄二の近くにいる異性だったからってこと？）

「拒否権は？」

「・・・ない。約束だから。今からデートに行く。」  
「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに・・・」

ガッ！

「ぐうつ・・・」

バタッ！ドサッ！

ぐいっ！つかつかつか・・・

バタン！

翔子は雄二に一撃を与え、そして首根っこを掴み、教室を出て行った。

『・・・・・・・・』

教室にしばしの沈黙が訪れる。

あまりの出来事に言葉が出ない。

「・・・ごめんね姫路さん。前より酷い教室になっちゃって・・・」  
「いいえ、良い教室ですよ。」

はにかんで言う瑞希。

「私、大好きですよ、このFクラス。」

「えっ……」

瑞希の言うことに驚く明久。

「それに……」

「……え？」

私、明久君のことが好きなんです……

そう言う瑞希の声は明久に聞こえなかった。

「さーてと、それじゃアキ？クレープ食べに行こっか。」

突如として美波が明久の腕を組み、クレープを食べに行こうと誘う。

「え、それって週末って約束じゃ・・・」

「週末は週末、今日は今日。」

「そんなあ！二度も奢らされたら、次の仕送りまで僕の食費があつ  
！」

「ダメですよ。」

「え？」

瑞希も突如として明久の手を掴む。

「吉井君は、私と映画を見に行くんです。」

「え、ええっ！？姫路さん！？それは話題にすら上がってないよ！  
？」

「はいっ！今決めたんです！」

「ほら早く！クレープ食べに行くわよ！（グイッ！）」

「どんな映画に連れてってくれるんですか？（グイッ！）」

二人とも明久の腕を引っ張る。

「そんなあゝ！嫌あゝっ！生活費が、栄養があゝっ！助けて、あ、  
ちょ、 @・・・」

「アイツはもしかしたら、本物の馬鹿なのかなのう・・・」  
「・・・ん（コクン）。」

そしてキラ達は・・・

「それじゃ、バンドについての話なんだけど……。課題曲は2曲あつて、『ライオン』と『きらめく涙は星に』ね。」

「OK、了解。」

「他にもあるのか？」

「一応、ソロ曲なんだけど……。二人にかなりの無理を強いるかもしれないけど、良いかな……。？」

『良いよ？』

「あ、ありがと……。」

「それで、どんな曲をやるつもりなんだい？」

「えと、フェイトのソロは『ETERNAL BLAZE』と『Pray』と『Dancing in the velvet moon』で、天ちゃんのは『imitation』と『空色デイズ』と『VOICE - 辿り着く場所 - 』としたんだけど……。」

「無理を強いる気がしないんだけど……。どこが強いるのかな……。？」

「フェイトの『DANCE IN THE VERVET MOON』と天ちゃんの『imitation』が曲調が速いとかで難しいんだ……。」



「絶対やる！」

「問題ないよ！」

「それで、練習はどうするんだ？」

「えっと、予選が近いうちにあつて、それまでに課題曲2曲とあと5曲やるんだけど。」

「とりあえず今までの曲は演奏可能だよ。」

「俺もだ。」

「ボーカルは準備OKだよ。」

「こっちも。」

「じゃ、ソロでも練習する？」

「お願いしたいな・・・」

「私も・・・」

「じゃ、今日はもう遅くなるからフェイトのソロだけでいいかな・・・？」

「私はいいよ？」

「じゃ、天和、歌覚えるの付き合つて？」

「いいよ。」

「じゃ、これCDね。」

（レイン以外：い、いつの間に・・・）

フェイトと天和はレインからCDを受け取り、別室へ向かった。

「・・・とりあえず俺たちもフェイトのソロの難曲でも練習するか・・・」

「うん。えっと・・・『Dancing in the velvet moon』だっけ？それを練習しようよ。」

「そうだね。まずはそれを練習しようか。」

「俺はそれでいいぜ。」

「リーダーがそう言うなら異存はないよ。」

「じゃ、それだけでも練習しよう!」

そう言つて、レインはCDをセットし、曲をかけた。

フェイト・天和組は・・・

「・・・レイン君、すつごくいい曲を選んだんだね・・・。って、あれ? フェイトちゃん? どうしたの?」

「こ、この歌恥ずかしいよ・・・ノノノ」

「えゝ? 何で? そんなことないじゃゝん。」

「そ、それはそうだけど・・・。あ、あのね、『捕まえて』ってところとか・・・」

「・・・フェイトちゃん、そういうこと考えているの?」

「そ、そういうことって・・・ノノノ」

「私はそんなこと考えてなかったよ?」

「と、とにかく歌覚えよ!」

「そうだね。」

数分後・・・

「お前ら、そろそろ帰ることを考えた方がいいぞ？」

「あ、鉄人。」

「鉄人じゃない、西村先生と呼べ！」

「また見に来たんですか？」

「曲を演奏するのが聞こえてな。しかし、今まで練習していた曲とは違って、かなり曲調が違っていているな。」

「あ、これ新曲なんです。」

「それで、ハラオウンと張はどうしたんだ？」

「別室で歌の練習中。」

「そうか、二人を見てくる、しっかりやるんだぞ？」

「あ、はい。」

別室・・・

《フェイト：~~~~~》

「・・・一体どんな歌なんだ・・・」

聞こえた歌詞に少し呆れていた鉄人・西村だった・・・

が、数分後に呆れ顔はできなくなった。

《~~~~~》

「ふむ・・・、やはり『聖祥の歌姫』と噂が立つのも頷けるだけある歌声だな・・・。」

西村先生も何度も頷いていた。

「さて、アイツらの状況を見るか・・・。」

西村先生がレインたちのいる部屋に向かうと・・・

「サビ間違えてる！焔、半音高いよ、何やってんの！」

「わ、悪い！」

「レオン！ちょっとスピードが速いよ！」

「ご、ごめん！」

レインが問題児軍団＋キラに指示を飛ばしていた。

「・・・レインにこんな才能があるとは思わなかった・・・」

素直な感想を思わず漏らした西村先生だった。

次回、番外編 「食費とデートとスタンガン（改）」

## 第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」(後書き)

今回、天和のソロ曲は全てリクエストでまとめましたが、フェイトのソロ曲は一つだけリクエストしていない曲です！

『Dancing in the velvet moon』はどんなアニメで使われて、どんな曲なのかは探してみてください！

次回はアニメ入ります！

**番外編 「食費とデートとスタンガン（改）」（前書き）**

今回はアニメ再編した番外編です！

文量は過去最多になるという事態ですが、出来るだけ笑えるようにしました！

では、どうぞ！



番外編 「食費とデートとスタンガン（改）」

EX問

今回は頭の体操です。

次の三つの漢字に共通する部首を答えなさい。

『不・十・士』

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

『口』

教師のコメント

正解です。これは全国的に正解率がとても低い問題ですが、二人には簡単でしたね。

レインの答え

『言』

教師のコメント

残念ながら、不正解です。

泉戸このはの答え

『心』

教師のコメント

不正解です。

高町なのはの答え

『葦』

教師のコメント

新しい部首を創らないでください。そして、なぜこんな感じがかったのが先生は不思議に思っています。

レオンの答え

『□』

吉井明久の答え

『  
』

教師のコメント

名前を見ただけで×をつけた先生を許してください。それよりも君たちが正解していることが驚きです。

この話は、試験召喚戦争に負けた者の末路を描いた話である・・・。

明久・美波・瑞希は映画館に来ていた。

「……………」

明久は映画館の物品の金額を見て顔が固まっていた。

「……学割とはいえ、チケット一枚千円、コーラMサイズ300円、ポップコーンSサイズ400円……。これがたった二時間で消費されるのか……。！映画館……。！なんて恐ろしいところだ……。っ！」

かなりの驚愕の様子。

「吉井君……」

「？な、なに、姫路さん（ギギギギ）？」

明久は瑞希の方を音が出るかのような感じで首を捻って見る。

「これ！見ませんか！？」

瑞希が指差していたのは、『世界の中心で僕の初恋2 発動篇』の宣伝だった。

「へえ、良いんじゃない？」

美波が賛同。

「ねえ、これにしようよアキ？」

「そう……。じゃ、僕はいから二人で行ってきなよ……」  
『ええっ！？どうして（ですか）っ！？』

二人が明久の発言に叫ぶ。

「じゃアニメにする？」

「いや、そういうことじゃなくて……」

明久がそう言った瞬間……

「観念するんだな……。明久……」  
『っ！？』

三人が声のした方を見ると……

「男とは……。無力だ……」

「ゆ、雄二……」

翔子と手枷を填められた雄二がいた。

「……雄二、どれが見たい……？」

「早く自由になりたい。」

「……じゃあ、『地獄の黙示録 完全版』。」

「おい待て、それ3時間28分もあるぞ!？」

「……二回見る。」

「一日の授業より長いじゃねえか!？」

「……授業の間、雄二に会えない分の、埋・め・合・わ・せ。」

「ちっ!やっぱ帰る!」

「……今日は……帰さない。(バチッ!バチバチバチバチ!)

」

翔子がスタンガンを構え、雄二に向けた。

「な、なんだ翔子、それなっ!あべし!ちゃっ!ちよっ!か!ばっ  
!」

スタンガンを当てられ悲鳴を上げる雄二。

「……学生二枚、二回分……」

「はい学生一枚気を失った学生一枚無駄に二回分ですね?」

翔子が二人分のチケットを頼んでいた。

「仲の良いカップルですねえ・・・」

「憧れるよねえ・・・」

「・・・はあ・・・」

翔子と雄二の仲の良さ（？）に眼を輝かせて羨ましがる二人に呆れてため息をついた明久だった。

翌日。

明久は朝食の準備をしていた。

「やっぱり・・・朝食はっ！」

明久は包丁を振り下ろした。

「軽く済ませてー、夕食はリッチにいきたいよねー。」

・・・容器から出したカップラーメンに向けて。

「うーん、こっちを朝食にしてー、こっちのちょっと大きい方を夕食にしよー！」

明久は一人暮らしを満喫していた・・・



「はっ、はっ、はっ、はっ・・・」

坂を駆け上がる明久。

「はっ、はっ、はっ・・・あつと、おはようございます、福原先生。」  
「ああ、おはようございます・・・」

福原先生にも挨拶をし、ひたすらに走り続ける。

「はっ、はっ、はっ・・・あっ！」

「うわっ!？」

ドンッ!

誰かとぶつかった。

その衝撃で、明久がぶつかった相手が啜っていた食パンが宙を舞う。

「・・・痛たた・・・あつ！」

「痛つててて・・・っ！君はFクラスの吉井君！（・・・／／／）」

「君はAクラスの久保君！？」

「如何にも、学年次席の久保利光だ。・・・いけない、急がないと  
一限目の予習がなくなってしまう。じゃあ。」

「ねえ！」

「なんだい？」

「それ、いらなの？」

明久は落ちている食パンに眼を輝かせている。

「そう・・・だね。もう食べられないから」

「貰っていいかな!？」

「っ!?!君は平気なのかい!?!」

「うん、平気だよ!」

(利光:・・・口をつけたものが欲しいだなんて・・・)

(明久:っ!30秒以内に拾えば大丈夫だ・・・)

お互いの思惑が違っているが・・・

「・・・僕は、困るな・・・」

「どうして!?!」

「大胆過ぎるよ君は!・・・人が・・・、見てるじゃないか・・・」

「そうか・・・。それもそうだよね・・・」

「じゃあ、またの機会に・・・」

「う、うん・・・」

利光が去って行って・・・

(明久:・・・今だ!)

食パンに飛び込む明久。

グニャッ。

「・・・ん？」

「あ・・・あ・・・あ・・・（ドサッ！）」

「おや、何か踏みましたか・・・？」

「はい、僕の生命線を・・・」

現状に泣き崩れる明久だった。

玄関。

明久の下駄箱付近に瑞希は立っていた。

ちなみに、キラの下駄箱付近には優がいた。

「あ、おはよ。姫路さん、春原さん。」

「ええっ！？お、おはようございます、です、吉井君！」

「ふえっ！？お、おはようございます！吉井君！」

瑞希は慌てて手に持っていた手紙を隠し、優は急に声をかけられた為に噤んでいた。

「っ！」

瑞希はそのまま走り去って行った。

明久は瑞希の手にあつた手紙を見た。

（明久：あれって、やっぱり雄二に出すラブレターなのかな……。でも、雄二には霧島さんがいるし……。）

「よお。珍しく速いな、明久。」

「あ……」

「昨日はどうだった？」

「今月の食費が一瞬にして映画の暗闇の中に消えた……。雄二は……？」

「眼が覚めたら、繋がれた牛が殺されるシーンだった。」

「……は？」

雄二の物言いに言葉を失う明久。

「隙を見て逃げ出そうとしたら、また電気ショックを喰らって気を失い……、眼が覚めたらまた牛が……」

「……本当に二回見たんだ……」

「また逃げようとしたらまた気を失って、永遠に牛を殺すシーンで目覚め続けるんじゃないかと強迫観念に襲われて、……逃げられなくなった……」

「……永遠に映画の最初は見られないんだね……」

雄二の話にそう考えた明久。

「……はあ、そんなことより、次の仕送りまでどうやって生きていく……」

溜息交じりにそう考える明久。

「あのゲームの山を売ればいいじゃないか。」

「なんてことを言うんだ！何物にも代えがたい、優秀な作品の数々を！食べ物なんかに変えられるわけじゃないじゃないか！」

「……自業自得って言葉、知ってるか……？」

「雄二はまだ余裕があるからそんなことが言えるんだよ！僕なんか命に関わるんだよ！？」

明久はそう叫ぶ。

雄二はそんな明久の肩に手を置き・・・

「明久、お前は俺に命の危険がないと思っているのか・・・？」  
「・・・ごめん。」  
「・・・いいんだ。」

お互いに俯き合ってそう言い合う二人。

「おつす！・・・ってお前ら一体何やってんだよ・・・」  
「焰。」

「お前がこんな時間に来るなんて初めてだな・・・。遅刻常習犯のお前が・・・」

「うっせ！今の時間に来ないとアイツがうるせえんだよ！」

「アイツって・・・」

「・・・Aクラスの水河か・・・」

「・・・何も言わないでくれ・・・」

「・・・スマン・・・」

次いで焰も増えた。



「・・・まさかあれ以上、設備が酷くなるとは思わなかったよ・・・」  
「これというのも・・・」  
『全て貴様のせいだ!!』

明久と焰は同時に雄二を指差して叫んだ。

「皆が力を合わせて出した結果に文句を言うなんて無粋な奴だな。」  
「雄二が一人で負けたんだろ!？」  
「そうだろうが!」  
「何いってんのよアキ!人のことと言える立場じゃないでしょ!?!ウチらだって全然戦力にならなかったんだから・・・」  
「美波様だって戦力外告知され頭蓋骨が割れるように痛いといっ!」  
「何よ美波様って!馬鹿にしてんの!?!」  
「だってそう呼べって!」  
「普通に美波でいいのよ!」  
「皆見だつて戦力外告知されてててててこめかみに穴が開くぅっ!」  
「・・・その技、面白くない・・・」

いつの間にか美波のスカートの中を撮ろうとしていた康太が、そう  
呟いた。

「ただどこいつは、作戦の要だったのに小学生レベルのテストで百  
点を取れなかったんだよ!？」

「坂本君を責めちゃダメですよ。」  
「・・・」

瑞希が明久に制止を呼び掛ける。

「良いじゃないですか。私、この教室好きですよ?」

(明久:・・・やっぱり、姫路さんは雄二のことを・・・)

(瑞希:だって・・・、この教室、好きな席に座っていいし・・・  
／／／)

明久は相変わらずの勘違いをし、瑞希は自分の胸元で指でハートマ  
ークを作ったりしていた。

そして数分後・・・

「よし！ホーミングを始めるぞ！皆席に着け！・・・ってもう座ってるな・・・」

西村先生がFクラスに入ってきた。

「あれ、どうして西村先生が？」

美波がすかさず質問をした。

その後ろでは明久と瑞希が桃色の空気を作り上げていた。

「お前らがあまりにも馬鹿なので、少しでも成績向上を目指そうと今日から福原先生に代わってこの俺が！Fクラスの担任を務めることになった！」

『なにいいいいいつ！？』

「て、鉄人が担任に！？」

西村先生の突然の宣告にざわめき立つFクラス。

「容赦なくビシバシ行くから覚悟しとけ！」

Fクラス担任が西村先生に変わった瞬間だった。

屋上。

「……はぁ……。これじゃ毎日が鬼の補習になるようなものじゃないか……」

「そうじゃのう……。どうにか出来ないものじゃろうか……」

「……無理かもしれないね……」

屋上にたむろっている明久・雄二・秀吉・レイン。

「そうだ！もう一度召喚戦争をやって、勝てばいいんだ！」

「それは無理な話だな。」

「どうして！？」

「あのさ明久、一度負けたクラスは3ヶ月宣戦布告できないルールだったのを忘れてない？」

「3ヶ月・・・」

明久の心に大ダメージ。

「なあに、3ヶ月なんてあっという間だ。その間に新たな作戦でも立てるさ。」

「ああっ！どうしてこんなことに！？」

「・・・いいこともある。」

頭を悩ませる明久の方を叩く康太。

「・・・一枚五百円。」

康太が持っていたのは、『誰が、何時、何処で撮ったのか分からない』女子更衣室の写真だった。

「買ったあゝっ！」

「・・・毎度あり。」

「うおゝっ！どもゝっ！更衣室だゝっ！」

「お前、食費は？」

ズドン！

雄二に突っ込まれ、座っていた工事用の遮蔽物ごと落ち込む明久。

「うおおおおおおおおおっ！」

「何を悩んでおるのじゃ？」

叫ぶ明久に疑問を持つ秀吉。

パタン！

「男なら後悔しな〜いっ！」

「勇者だな・・・」

「うん・・・。写真に写ってたの、フェイトとなのはだったから・・・、今日が命日の可能性も・・・」

雄二が呆れ、レインは明久の冥福をこっそりと祈っていた。

「これでとうとう、次の仕送りまで一日カップラーメン一個決定だ・・・！」

「・・・明久よ・・・、お主、何か忘れておらぬか・・・？」  
「え？」

明久が秀吉の方を見た時・・・

「あつ、ここにいたんですね！？」

「ねえねえアキ、週末の待ち合わせ、どうする？」

「・・・待ち・・・合わせ？」

明久は首を傾げた。

「忘れたとは言わせないわよ！クレープ奢ってくれる約束でしょ？」

「えっ！？そ、それって・・・昨日ので終わりじゃないの！？」

「昨日は昨日、約束は約束！」

「私も一緒にいいですか・・・？」

（明久：えっ！？姫路さんも！？）

「実は、吉井君と一緒に見たい映画があるんです・・・／／／」

もじもじとしながらそういう瑞希。

明久は・・・

「僕の・・・食費がつー！」

泣いていた。



その直後・・・

パリイイインッ！！

ゴシヤッ！

何かが割れた音がし、更に何かを殴ったかのような音がした。

「あの位置は・・・Fクラス！？何かあったのか！？」

「分らん、じゃが、何かあったのは確実じゃ！」

「行こう！」

明久を置いて屋上にいた全員は、すぐにFクラスに向かった。

Fクラス・・・

「・・・おいおい、一体なにが・・・」

雄二が教室にいる面々に声をかけようとして・・・止めた。

教室の中央には・・・

「・・・(ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・)・・・」

(駆け付けた面々：ま、魔王だ！魔王が二人いる！)

物凄い黒いオーラを出したのはとフェイトがいた。

「お、おい！焔！一体何があつたんだ！？」

雄二は倒れていた焔（鼻血出してる）に話しかける。

「お、おお、雄二か・・・何となく良いものを見たぜ・・・」  
「い、良いものってなんだ！？それとレオンは一体どうなったんだ  
！？」

雄二は少し興奮している。

まあ理由は焦りだが。

焔の話はこんなだった。

- 数分前 -

「ムツッリニ、この写真はどうかい・・・？」  
「・・・・・・・・っ！（ブシャアアアッ！）」

レオンが康太に写真を見せていて、康太が相変わらず鼻血を噴き出していた。

「ね、ねえレオン、なんの写真を・・・・・・・・っ！」  
「やばっ！見られた！」

なのはとフェイトがレオンが持っていた写真を見てしまい、レオンは焦った。

「レオン君・・・、なんでこんな写真を持っているのかな・・・？」  
「許さない・・・、こんなことされたことないから・・・」  
「わー、やっぱー・・・」  
「バスタアアアアアアアアアアアッ！」

なのはが怒り任せにバスターを発射。

「うわっち！あつぶな！」

レオンは難なく回避。

が・・・

「はあああっ！」

「わっ！ザンバーはまずいよ！」

フェイトがいつの間にかザンバーを持って、振り下ろしていた。

「危なっ！」

レオンが後ろを向いて回避している間に二人はレオンの背後に立ち・

「そんなことしちゃダメだってことを知った上で・・・（ゴスッ！）

「あだっ！」

「身の程を・・・（ドスッ!）」

「痛い!」

『知れえええええっ!（グシャッ!）』

「ぎゃああああああっ!」

『ブシヤアアアアアアアッ!』

なのはがレオンの背に一撃加え、フェイトがザンバーで切りあげる。

そして両サイドからの回し蹴りがレオンに炸裂・・・

「ぐえっふ・・・や、野郎共・・・い、良いユメ、見れたかよ・・・ガクッ。」

「・・・（グッ!）」

なのはたちは気づいていないが・・・

男子達は一斉に気絶、鼻血を噴き出していた。

「ふ、二人とも!」

「か、隠さなきゃ隠さなきゃ！」  
『ふえ?』

怒りが収まり、アリシアやこのは何を言っているのかが分からない二人。

そして・・・

『っ! (バツ!)・・・まさか、見えてた・・・? / / /』  
『・・・見えてた。多分、狙ってた・・・』  
『~~~~っ! / / /』

二人はレオンの方を向き・・・

ガストコバキグシャドスゴシャメキバキッ!

かなりのオーバーキルをやっていた。

-  
今  
-

「・・・この惨劇も良く分かるな・・・」  
「・・・死して尚、一片の悔い・・・無し・・・」  
「焰！死ぬな！死ぬと水河が来るぞ！」  
「それは困る！」

焰、復活。

「ねえ明久君・・・あの写真、持ってたら渡してくれないかなあ・・・？」



「正直に渡してくれるなら何もしないよ・・・?」

「も、持ってない! 持ってないから!」

『本当・・・?』

「いや、さっきムツツリー二から買っておったぞ?」

『殺す!』

「わあああつ! 止めて! 止めて!」

明久はなのは・フェイトに半殺しにされた。

週末・・・

「そっちが夕食で・・・こっちが・・・はっ！」

明久、何かに気付く。

「最初は半分に切って片方を食べ、次は残りを切って片方を食べ、その次も半分に切って片方を食べてって繰り返ししていけば、一つのカップ麺を、永遠に食べ続けられるじゃないか・・・」

明久、謎の理論に逢着する。

「僕って・・・天才かも・・・」

いろんな意味で満喫していた。

「そうはいつでも・・・、無駄遣いは出来ないよなあ・・・」

明久は自分の財布を見ていた。

「待てよ？よく考えたら、女の子と映画に行ったりクレープ食べた  
りするなんて・・・これって・・・デートなんじゃないか？」

一応気がつく明久。

「そうだよ！これはデートなんだ！罰ゲームなんじゃないんだ！そ  
れならちよつとやさつとの出費、全然怖くないやつ！」

完全に吹っ切れたようだ。

「あつ、姫路さん！」

噴水の近くに立っていた瑞希を発見。

が。

「あれは・・・っ！」

何かを発見・・・

「・・・やっぱり、罰ゲームじゃないか・・・」

明久は落ち込んだ。

「何やってんのアキ？」  
「ん？」

明久は声のした方に振り向いた。

声のした方には美波が立っていた。

「・・・人生の不条理に打ちのめされていたんだよ・・・」  
「吉井君!？」

瑞希が明久の方を向いた。

「おはよう瑞希。その服可愛いね。」

「ありがとうございます。でも、この服選んで遅刻しちゃいそうでした。」

「ウチもさっきまで何着てこうか迷ってたんだけどね。去年のブラウスがまだ切れてラッキー」

「へえ、それはつまり「ああっ!？」去年から膝の関節があらぬ方向に曲がるうとして……ってまだ何も言っていないのにいいっ!」

「言いたいことはわかってるからいいのーっ!」

「ロープ、ロオオオプッ!」

「……見え、見え、見えっ!（パシャッ!パシャパシャッ!）」

「何でムツツリー二がここに!？」

「……自主トレ。」

映画館前。

「吉井君は何を見たいですか？」

「今日はアキが選んでいいよ。」

「僕が！？」

明久、驚愕。

「値段はどれも同じなんだよな……。それじゃ長い映画の方が得かなあ……。」

明久が映画を選んでいたら……

「……。雄二、どれ見たい？」

「っ！？」

突如とした声に驚き、振り向く三人。

そこには……

「俺の自由は・・・叶え、られるのか・・・？」

相変わらず手枷を繋がれた雄二がいた。

「・・・じゃあ、『戦争と平和』。」

「おいそれ7時間4分あるだろ！」

「・・・二回見る。」

「14時間8分も座ってられるか！」

「・・・退屈なら、隣で寝てていい・・・（バチッ！バチバチバチッ！）」

「それ気絶するだけだろうがああああ！・・・大丈夫。ずっと・・・の、の、ノーモア！」

翔子にスタンガンを当てられる雄二。

「学生二枚、二回分。」

「はい。学生一枚また気を失った学生一枚無駄に二回分ですね？」

「はつきり気持ちを伝えられる人って羨ましいです・・・」

「憧れるよねえ。」

「短いのにしょ・・・」

翔子の行動に眼を輝かせる瑞希と美波。



明久は短い映画を見ることを決意した。

ラ・ペデイス……

「アキはホントに食べないの？」

「おいしいですよ？」

「い、いや、実は僕、食べ物にうるさくてね……。クレープは口に合わないんだよ……」

（悪魔：拾ったパン食べようとする奴が言うか？）

（明久：ここで少しでも節約しないと、あすからの食費が……）

（悪魔：素直に金がないと言えればいいだろ……）

「ふーん、そう……。ウチのバナナクレープ多いから、ちょっと食べてもらおうと思ったのに……」

「えっ!？」

（悪魔：！！！）

「私のストロベリークレープも、一口食べてみてほしかったのですが・・・」

（明久：ええええええええっ！？）

（悪魔：！！！！）

「口に合わないんじゃない・・・」

「ですね・・・。残念です・・・」

（明久・悪魔：ああああああ・・・）

（明久：僕の馬鹿あつ！なんてことをしてしまったんだ！）

（悪魔：言わんこつちやない・・・）

（明久：折角の、姫路さんの口うつしクレープが・・・！）

（悪魔：いや、そういう企画じゃないだろ・・・）

（明久：今の一口で、朝食以上のカロリーが摂取できたはず・・・！）

明久、暴走。

「ちょっとだけ・・・食べてみてよ・・・」

「え？」

「おいしいわよ？」

「しょ、しょうがないなあ・・・」

「よ、吉井君！私のも食べてください！」

「え？」

瑞希が張り合った。

「こっちが先よ！」

「先とか後とかの問題ではないと思います！」

『はいっ！あーん！』

「あ、あーん・・・」

二人から迫られ、ちょっと緊張している明久。

が・・・

くいきません、お姉さまあっ！（キン、カキン！）>

ドスンッ！

『っ！？』

いきなり飛んできて、美波と瑞希のフォークを弾いて壁に刺さった  
フォークに驚く三人。

「酷いです！お姉さまの甘い甘いクレープを、その口につけたフォークごと薄汚い家畜に与えるなんて！美春許せん！」

フォークを投げたのは美春だった。

「これ以上豚が、調子に乗って狼藉を働かない様！」  
「豚あ？」

「今、この場で成敗します！」

「え！？僕うつ！？」

利光は外を歩いていた。

「・・・っ！」

何かに感づき、参考書を顔の前に出した。

直後、三本のフォークが参考書に刺さった。

「・・・？」

参考書を退かした利光の眼に映ったのは・・・

「わああああ！どいてどいてどいてどい・・・」

走る明久だった。

どっ！！

衝突。

『ぐっ・・・』

「・・・ああっ、クレープが！・・・まだ30秒以内に・・・（ヒュンヒュンヒュン！）ってうをわああああっ！」

「待ちなさい豚野郎おおっ！」

「止めなさい美春！」

「待ってください、皆さん！」

四人が走り去った後・・・

「吉井君・・・、僕の顔を汚したね・・・」

その後、顔についたクリームを舐めていた。

明久・美波・瑞希は猿頭公園に逃げ込んだ。

「どうして僕がこんな目に!？」

「あの子は特別だから！」  
「特別!？」

走っていたら・・・

「おお、明久。何をしておるのじゃ？」  
「秀吉、こつちに!」  
「うわあ、なんじゃ!？」

秀吉と会った。

すかさず明久は秀吉を茂みに引き込んだ。

直後・・・



「豚野郎おおおおつ！」

美春が走ってきた。

「どこに行つたのです！？お姉さまに家畜の臭いを移すものなら、直ちに火炙りにしてやります！」

美春の過激発言。

《どこ行つたんですのー！？》

「ひひひひ！」

「なつ、なんでウチを避けるのよ！？」

「いや、火炙りつて言うから・・・」

「よく分らんが、お主らは追っ手から逃げておるのか？」

秀吉が状況を把握しようと明久たちに話しかける。

ちなみに茂みの手前では、美春が「どっち！？こっち、そっち、どっち！？」と言っている。

「・・・そうなんだ。なんか逃げ切る良い方法はないかなあ・・・。  
せめて僕の召喚獣が使えるといいんだけど・・・。」

「学園を離れると召喚システムが使えないんですね？」

「うん・・・。」

（《豚野郎！豚野郎、豚野郎豚野郎豚野郎おおおお！》）

「そうじゃ！ちょうど今、演劇部の衣装を持っておる！これを着て  
変装する、というのはどうじゃ？」

（《豚野郎、豚野郎豚野郎豚野郎おおおおおっ！》）  
「変装・・・？」

数分後・・・

「・・・って、男物じゃないの・・・？」

「部員がワシ用じゃ、って渡しおったので、てっきり男物だと思っ  
たのじゃが・・・。」

明久と秀吉が着ていたのは、女物のメイド服だった。

「秀吉用が男物のわけないじゃん！」

「なんだか凄く可愛いんですけど・・・／／／」

「何この敗北感・・・／／／」

「困っちゃうんだけどぉっ！」

『はうう・・・／／／』

《見つけました！》

『ええっ！？』

突如として聞こえた美春の声。

「はあああっ！」

ついに美春に見つかった3人。

「おとなしくっ！・・・なんですか、その格好・・・」

「聞かないで！答えにくいから！」

「不潔です！不純です！女の格好さえすればお姉さまが好きになっ  
てくれると思ったら大間違いです！」

「いや、君が大間違いだと思う・・・」

「ウチは普通に男の子が好きだから・・・」

「神聖な美春達の仲を冒瀆する豚め、決して許しません・・・」  
「なんでそうなるのぉ！」

明久たちは秀吉を残して走り去ってしまった。

「逆効果じゃったのう・・・」

「・・・いや、これはこれで。」

いつの間にか康太がいた。

「どうしよう、まだ追ってくるよ？」

「仕方ないわ、三方に分かれて逃げましょ！」

「それって僕だけが標的になれって意味じゃ!？」

「お、面白いことしてんじゃん」

「レオン!これが面白いように見える!？」

「見える」

「アンタ鬼だ！」

「そうだ、良い考えがあります！文月学園へ逃げましょう！」  
『学園へ！？』

レオンはいつの間にか乱入していた。

瑞希の提案に驚きを隠せない明久と美波。

「・・・っ！そうか！」

閃いたかのように言う明久。

文月学園・・・

「・・・いた！」

明久たちは歩いていた竹内先生を発見。

「竹内先生は現国よ！？ウチ、全然戦力にならないんだけど！」

「今は贅沢を言っている場合じゃない！」

「とりあえず誰かを頼るしかないんだよ！」

『はあ、はあ、はあ・・・』

「竹内先生、模擬試召戦争をやらせてくれ！」

「え、あ、はい。承認します！」

現国のフィールドが展開された。

『サモン  
試獣召喚！』

それぞれの召喚獣が姿を現した。

「ああつ、酷い！私の愛を邪魔する気ですか！？試<sup>サモン</sup>獣召喚っ！」

美春も召喚をした。

「姫路さんやレオンの召喚獣がいるから、怖いものなしだ！この勝負、勝てる！」

「清水さん、ごめんなさい！」

「そうはいきません！」

美春の召喚獣に切りかかろうとした瑞希の召喚獣。

だが、美春の召喚獣は飛び上った。

標的は・・・

「え、ウチに！？」

美波。

そして美波の召喚獣は一刀のもとに切り伏せられ・・・

美春の召喚獣は瑞希の召喚獣に一撃貫い・・・

「まだだまだだまだあつ！オーバーキルでもしておくよおおつ！」

レオンの召喚獣に細切りにされた。

参考用の点数が表示される。

『Dクラス	清水美春	VS	Fクラス
島田美波&姫路瑞希&吉井明久&レオン			
国語	132点	VS	16点
45点	&	68点	&
96点			3
『			



「零点になった戦死者は補習うううっ!!」  
「ええっ！今日はお休みなのにいっっ！」  
「美春はお姉さまとなら、鬼の補習も天国です」  
「・・・」

美波の顔が、美春の発言で青くなった。

「お姉さまと一緒に」  
「私は嫌あああああ!!」

西村先生に担がれながら美波が叫んだ。

「・・・吉井。お前・・・、目覚めたのか・・・？」  
「・・・？」

西村先生が行ったことで、明久は自分の服装を改めて見た。

只今の明久の服装・・・

女性用のメイド服。

「．．．明久、思いっきりやっちゃったね．．．」  
「．．．誤解ですうつ！！」

明久の絶叫がこだました．．．

次回、  
「  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?  
?」

番外編 「食費とデートとスタンガン（改）」（後書き）

次回に「????????」となっているのには理由があつて、  
今回はだいぶ前の「計画」をついに始動させます！

楽しみに！

番外編 「バカと猫と試召戦争」(前書き)

ついに！前々からの計画実行です！

猫とは誰か！？それを知りたければこの後の本編を読むか、活動報告(だいぶ前の)を見るべし！

では、どうぞ！

## 番外編 「バカと猫と試召戦争」

### 第EX問

次の問いに答えなさい。

《日本国憲法第二十五条で記されているものは何か?》

姫路瑞希の答え

『生存権』

教師のコメント

正解です。よく聞く為にすぐ出るはずですね。

キラ・ヤマトの答え

『国民の生存権、国の生活環境向上義務』

教師のコメント

ここまで詳しい答えが出るとは思いませんでした。すべて正解です。

泉戸このはの答え

『存命権』

教師のコメント

結果としては合っているのですが、『存命』ではなく『生存』です。

フェイト・T・ハラオウンの答え

『存在権』

教師のコメント

あなたも近い回答でしたが、不正解です。

吉井明久の答え

『生き延びる権利』

## 教師のコメント

君の解答に生命の危機を感じます・・・

・・・事件は、いつも唐突に起きるものである・・・



「・・・」ここは、どこニヤスか・・・？」

街の中を、見たことのないフードを着た何者かが歩いていた。

「・・・タオは、一体なんでここに来たニヤスか？・・・はあ・・・  
腹減ったニヤ・・・」

歩いていたのは・・・

カカ族の少女・タオカカだった。

「・・・？あれ？ここは・・・どこニヤスか？」

タオカカがしばらく放浪していたら・・・

「んあ？ここは・・・『学校』とかいうとこニヤス・・・。乳の人がそう言っていたような・・・。」

タオカカが見つけたのは、文月学園の校門。

「・・・なんか、楽しそうニヤス！入ってみるニヤス！」

タオカカは一人、学園に入って行った。

H Rの時間になる・・・と思いきや。

「て、鉄人が来ないぞ!？」

「あ、明日は何が起こるんだ！？大雨なのか！？台風なのか！？」

未だに教室に來ない西村先生に不安がこみ上げるＦクラス面々。

「に、西村先生が來ないなんて・・・珍しいことだね・・・」

「そ、そうだね・・・。・・・フェイトちゃん、何聞いているの？」

フェイトがMP3プレイヤーで曲を聴いていた。

「・・・え？あ、ええと、ごめん、なのは。今は・・・言えないから・・・」

「・・・そうなの？すっごい気になるんだけど・・・」

「ホントにごめん！言えないの！」

「なのは、深く追求しないであげて？フェイトも困ってるし。」

「・・・そうだね。」

色々問題のある朝が進んで行った。

(レオン：・・・ちよつと補修室まで行ってみよ・・・！)

レオンは一人、教室をこっそりと抜け出して行った・・・

「さうてさてさて、何かあるかな？何かあるかな、何かあるかな・・・と。着いた着いた。」

レオンが補修室をこっそり見てみたら・・・

「・・・誰もいない・・・だとお・・・!?!?」

どこかで聞いたことがあるかのような言い方をしてしまうほどの驚愕。

「だったら・・・職員室なのかい!?!?」

すかさず職員室に向かったレオン。

職員室前。

「どれどれ・・・っておいおい・・・猫かいネコかい？」

不思議な言い方をしてまでもものびっくり。

職員室では・・・



「だから・・・お前は一体何者なんだと聞いている！」

「だから、タオはタオカカニヤス！」

「どこから名前なのかが分からんから聞いている！」

「・・・鉄人さあ、パツと見拷問だよそれ・・・」

レオンはそんな光景を見ながらぼそつと突っ込んだ。

Fクラス・・・

「うっわ、鉄人が遅れている理由が分かってな・・・」  
「あ、レオン。鉄人が遅れている理由って？」

戻ってきたレオンに明久が（すっごいうきうきして）聞いてきた。

「なんか・・・猫っぽいフードをかぶった・・・女の子・・・？に  
半分拷問的なことしてた。」  
「なにいつ！？」

Fクラスの男子殆どが変な覚醒をした。

「だけど、疑問符が付いていること忘れんなよ？断言できなかった  
んだし。」  
「すっかり忘れてた・・・」

意気消沈。

数分後、西村先生がやってきた。

「あー、今日は・・・吉井、ホームルームが終わったら補修室に来い。以上。」

「え！？僕まだ戦死してませんよ！？」

「補修のために呼んだんじゃない。今回はお前に用事があるからだ。」

そして西村先生は去って行った。

「明久、ついに年貢の納め時か？」

「雄二！なにげに死刑宣告的なこと言わないでよ！今回は補習のためじゃないって言ってたじゃないか！」

「それじゃ、何があるのか見に行かないとな。」

「呼ばれたのは僕だけだよ？」

「ほとんど行く気だが？島田に姫路もな。」

明久が後ろを見ると、Fクラスの男子の面々と、美波、瑞希がいた。

「え．．．つと、なんで美波と姫路さんがいるの？」

「そ、それは．．．」

「アキが心配だからよ！心配して悪いの！？」

「い、いや、別にそんなことは．．．」

結局、Fクラスの殆どが明久についていくという奇妙な状況が生まれてしまった。

「鉄じ．．．西村先生、入りますよー。」

鉄人と言いかけて訂正し、補修室に入る明久。

「おお、吉井か。お前に頼みたかったことというのは・・・彼女との試召戦争だ。」

「・・・あの、色々とすつ飛ばされているような気がするんだけど・・・」

「・・・すまん、俺が悪かった。」

明久が何のことだか全く分からず、頭に疑問符を浮かべていることに謝罪をする西村先生。

「まず名を名乗ってくれ・・・」

「名乗る・・・ってどういう事ニヤスカ？」

「・・・名前を言えってことだ・・・」

「おお、そういう事ニヤスカ！」

明久の前にいた女の子・タオカカ・は勝手に自己完結していた。

「タオは、タオカカニヤス！そのバカそうな人、なんて言うニヤスカ？」

「ばっ、バカそうな人・・・」

タオカカのズバッとした言い方に泣き崩れる明久。

「明久、諦める。パツと見でも分かることだ、言われても仕方ない。」

「仕方ないってどういうこと！？初対面の人にバカって言われたくないよ！」

「すまん。タオカカといったか？このバカは明久だ。」

「ちよっ！バカって言わないでよ！」

「・・・かわいそうな、人なのか？」

再び泣き崩れる明久に、更に追い打ちをかけてしまうタオカカ。

「それで吉井、彼女と試召戦争をしてほしいということだ。頼めるか？」

「そこが既に分らないんですけど・・・」

「質問をしていたのはこっちだったが、逆にいつの間にか彼女のペースになっていてな。彼女が試召戦争に興味を持ったらしくてな・・・」

「ええ、まあ、いいですけど・・・あ、でも、点数はどうなっているんですか？」

「模擬試召戦争、ということとあくまで体験だということで全教科100点ずつにしてある。」

「ひ、100点・・・」

圧倒的な点差（明久的には）に愕然とし、驚きを隠せない明久。

「とりあえず科目は総合科目で行うからな。」  
「そんなあゝ・・・」

明久はがっかりしていたが、タオカ力はと言うと・・・

「さあバカの人！行くニヤス！」

既に臨戦態勢に入っていた。

「はあ・・・諦めるしかないんだ・・・。ええい！やけくそだ！試験召喚！<sup>サモン</sup>」

明久は諦めて召喚獣を喚び出す。

「・・・？」

タオカ力は全然動こうとしない。

「どうした、何故喚び出さない？」

「なんて言えばいいニヤスか？」

「・・・試獣<sup>サモン</sup>召喚だ。」

「シャモン？」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚だ！」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚！」

ついにタオカ力の召喚獣が喚び出された。

「あれ、武装なし？」

「タオの武器は、爪ニヤスよ？」

タオカ力がそう言った刹那、タオカ力の召喚獣が自らの手から爪を伸ばした。

「ほ、本当だ・・・」

そして、二人の勝負が始まった・・・



が。

「ていつ！（ズシャッ！）」  
「ぎゃああああ！？」

タオカカの召喚獣に一撃食らった明久の召喚獣。  
フィードバックダメージが強く、悲鳴をあげた。

参考用の点数が表示される。

□ Fクラス  
タオカカ

吉井明久

V  
S

体験者

総合科目  
点数)

3  
5  
3  
点

V  
S

500点(特別)

点差も元々そう差がなかった為、あつさりと点数を削られる明久。

「おー！なんか、楽しいニヤス！」

タオカカは楽しそうだ。

「楽しくないよ！痛いから！」

明久的にはダメージがある為、楽しめない。

数分後・・・

『Fクラス タオカ力 総合科目 点数）』	0点	V S	325点（特別 体験者
			吉井明久
			V S

「明久・・・そこまで雑魚だったんだ・・・」  
「初心者にも負けるなんて・・・どこまで雑魚なんだよ明久は・・・」  
「見ないで・・・！こんな僕を見ないでえっ！」

雄二とレオンから責められ、明久が必死になって隠れようとしていた。

「・・・あ！」

何かを思い出したのか、急に声をあげるタオカ力。

「タオがここに来た理由、思い出したニヤス！・・・偶然・・・」  
「目的・・・？」  
「・・・さらばニヤス！」

そしてタオカ力は、開け放っていた窓から飛び出し、去って行った。

「・・・嵐のような子だったね・・・」

「一体どうやってこんな所に来たんだろう・・・」

残された者は、何かを言えるわけなく呆然と立ち尽くしていた。

「・・・吉井。」

「・・・はい？」

「・・・0点になった戦死者は補習・・・」

「そんなあああああああつ!？」

最後の最後で・・・

明久の悲鳴が、辺り一帯にこだました・・・

次回、「明久と暴徒とラブレター」

番外編 「バカと猫と試召戦争」(後書き)

はい！タオカ力出しました！ようやく！

少しやつつけ的な気がするのは放置の方向でお願いします！

次回は明久逃走劇！

楽しみに！



**番外編 「明久と暴徒とラブレター」 (前書き)**

またまた番外編です！

今回は明久・レオンの逃走劇、行きつく先は一体・・・？

では、どうぞ！

番外編 「明久と暴徒とラブレター」

《文月新聞

二年F組 吉井明久さんのコメント

『僕が小さな頃、祖父がよくこう言っていました。

『明久。泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい。』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん・・・

これで、いいかい・・・？』

以上、

<女装が似合いそうな男子ランキングNO・1>

<こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNO・1>

<モテそうな男子（同性愛編）ランキングNO・1>

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは審議の結果、アンフェアであるとの結論に達した為除外されています。

予定されていた第二特集

【須川亮、また失恋！？連敗の裏側にある真実とは！】

は都合により延期となりました。》

「うん・・・、ありえない登校時間だ・・・」

晴れ渡る空、澄んだ空気、暖かな日差し。

いつもより一時間早いだけで、混み合うはずの通学路はガラリと様相を変え、人の無い爽やかな散歩道のような雰囲気醸し出していた。

「早起きは三文の徳って言うし、何かイイコトがあるといいなあ」。

「

明久は前日、学園から帰宅した後昼寝のつもりで横になったらそのまま朝まで眠っていたのだ。

そのため、いつもより二時間も早く眼が覚めたのだ。

「おっす明久。お前さんがこんなに朝早いなんてねえ・・・。・・・明日は雨か？」

「おはようレオン。・・・朝からいきなりそんなこと言わないですよ。」

レオンと合流。

「しっかしまあ、こんなに朝早く来ても何もやることないしな・・・」  
「ホントだね。さてさて、こんな時間から何をしようかな・・・」

二人がそんなことを放しながら歩いていると、校門の近くに見知った後ろ姿を見かけた。

その姿は、鉄人　西村先生　だ。

「先生、おはようございます。」  
「おいっす。」

後ろから元気に（レオンは普通に）声をかける。

「おう、おはよう！部活の朝練か？感心だ・・・」

動きが止まった。

「先生？」

「・・・すまん、勘違いだ。」

「人違いですか？ いやそんな、別に謝る必要なんて・・・」

「吉井、レオン、こんな早朝に学校に来て、今度は何を企んでいる？」

爽やかな笑顔から一転、警戒心をあらわにした表情になった・・・

「えっと・・・間違えたのは接する態度ですか？」

「お前らを警戒するのは教師として当然のことだが・・・。それはそうと、ちようどよかった。《観察処分者》のお前がいるなら手間が省けるからな。」

「げ。《観察処分者》ってことは、また力仕事ですか？」

「そういうことだ。古くなったサッカーのゴールを撤去してくれ。」

「やれやれ、早起きなんてするんじゃないかなあ・・・」

明久はついつい溜息をつく。

「後悔するのは早起きではなく、観察処分を受けたお前の態度だということに気付くべきだと思うがな。」

呆れたように西村先生が明久の顔を見て溜息をつく。

「うう……。僕はそんなに悪いことなんてしていないのに……。」「……どの口でそんなことが言えるんだ。いいからグラウンドに  
来い。」  
「へーいへい。」

明久がグラウンドに向かおうとしたところ……

「鉄人鉄人、今日は僕がやるってことでどうかな？ ちょっとやって  
みたいことあるし。」

「レオン？ いきなり何を言い出すのさ？」

「そうだ。お前からそんなことを言い出すとは……。熱でも出た  
のか？」

「おいおい、そんな言い方するのかい？ ちょっと幻滅。ま、見てな  
つての。」

サッカーゴールの方に歩いて行った。

「てーっじーん！ どこに持っていきゃいいのー！？」

「町外れの参拝場まで行ってこい。」

「ちょっと！ 何キ口あると思ってるんですか！？」



明久が西村先生にブーイングをするが・・・

「了解、五秒もあれば戻ってこれる位置だから。」

「えっと、レオン？ここからかなり離れているんだよ？」

「そんなことないよ。こんなもの、それだけあればっ！ぶるああああああああっ！！！！」

「え！？ちよ、うわわわわわわ！し、信じられないよ！というかど  
んだけ力があるんだよ！」

「そんじゃ、行つてきます！」

レオンが物凄い速さで行ってしまった。

「・・・信じられん光景を見たぞ・・・」

「僕もですよ・・・」

啞然としていた二人だった。

五秒後。

「・・・I'll be back!僕は戻ってきた!」  
「・・・本当に五秒で帰ってくるとはな・・・」  
「驚きどころかレオンが怖く見えてくるよ・・・」  
「そんじゃ、教室にいこ?まだ誰もいないだろうし。」  
「う、うん・・・」

怯える明久を引き連れる(形で)レオンが玄関に入った。

(明久:意外とイイコトあった!)

ちょっと喜んでいた。

外されたネットもレオンが高速で運んでくれたためにあっさりと教室に向かうことができそうだ、と思いつつ靴箱を開けた明久。

そんな明久を迎えたのは、普通に置かれていたラブレターのような何かだった。

「なっ、なんじゃこりゃああっ!?!」

思わぬ事態に叫び声が出てしまう。

（明久：おおお落ち着け、吉井明久！早合点は命取りになる！まずはじっくりと中身を確認してから・・・）

「どうした、明久？」

「おわああっ!」

声を掛けられて咄嗟に手紙をポケットに隠す明久。

「（び、びつくりしたあーっ!）あ、ああ。雄二か。おはよう。」

「おう。」

片手を上げて明久の挨拶に応えたのは、クラスメイトの坂本雄二。

「い、いや、良い朝だねっ！凄くイイコトがありそうな朝だよね

っ！」

「・・・何を動揺している？」

「べべべ別に動揺なんて・・・」

「まさか、さつきチラツと見えた手紙のようなものは・・・」

「（くっ！見られていたか！まずいな。こんな手紙をもらったことが発覚したら、クラスの連中は妬みで僕をボコボコにしようとするはず！というか、なんで今日に限ってこいつは早く登校しているんだ！）た、ただのプリントだよ！それよりも速く教室に行かないと！」

「・・・別に急ぐことはないだろうに・・・」

「まだやることあるんだから！」

そそくさと走り去った明久。

（明久：・・・この手紙をどこで読もう・・・。人目につくところだとイロイロとまずいしなあ・・・。どうしよう？）

「レオン、明久の奴、一体何を持っていたんだ？」

「すまぬな、吾輩の位置からは見えなんだよ。」

「・・・一体どこの誰の物まねをしているんだ？」

「・・・珍しくスベツた・・・」

落ち込んでいた。

「・・・あと、ものすつごく気になることがあるんだが・・・いいか？」

「・・・お好きなように・・・」

「キラの靴箱なんだが・・・」

「キラの靴箱が？」

「・・・物量法則的にもあり得ない膨らみ方をしているっての・・・」

「・・・雄二、キラを待ってみる？どうなるかが分かるし、なんでこんなことになってしまうのかが分かるから。」

「あ、ああ・・・。キラ以外にもフェイトやなのは、アリシアのもそうなっているぞ？」

「・・・この四人の運命は全く一緒・・・」

レオンは一人静かに呟いた。

数分後、なのはとルカが二人仲良く登校してきた。

「・・・ねえ、ルカ君、靴箱を開けるのが怖いんだけど・・・」

「・・・嫌な予感がするのは分かるよ。だけど開けないと何もならないし・・・」

「・・・覚悟する・・・」

なのはが靴箱を開けた瞬間・・・

ドザザザザザザザザ！！

「きゃあああああああ・・・」

「な、なのは！？うわ、凄い量の手紙・・・」

「た、助けてえ・・・」

「あ、ご、ごめん！待ってて！」

大量の手紙に埋もれたなのはを助けるために手紙を退かし始めるルカ。

「信じられない膨らみ方をしていたのはこの為だったのか・・・」

「でしょ？中学の頃からずっとそうだったし。」

「・・・ということはフェイトとアリシアとキラの靴箱も・・・」

「全く同じ・・・いや、多分キラとフェイトの場合は最もひどいことになるかもしれないね・・・」

「おいおい・・・」

レオンの台詞に驚きしか隠せない雄二であった。

数分後・・・

誰もいない玄関で・・・

「うわあああああ!？」  
『きゃあああああ!!!』

キラ・フェイト・アリシアが手紙に埋もれた。

明久は結局、良い場所を見つけないで、ギリギリに戻ってくるしかなかった。

「工藤。」  
「はい。」



「久保。」  
「はい。」

明久がチャイムと同時に教室に駆け込むと、間髪入れずに西村先生がやってきて出席を取り始めた。

「近藤。」  
「はい。」  
「斉藤。」  
「はい。」

淡々と進む毎朝の恒例行事。西村先生の呼び声にクラスの面々は眠そうに返事をしていく。

静かな教室ににのどかなひとときが訪れている。

春の陽気の中、今日といういつもと変わらない平穏な日々が・・・

「坂本。」  
「・・・・・・明久がラブレターをもらったようだ。」  
『殺せええっ！！』

雄二の一言でブチ壊された。

「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ！」

明らかに小声だったのにもかかわらず、クラスの誰もが聞き逃さなかった様子（ごく一部は聞こえていなかったようだ）。

（明久：この連中は本当にどこかおかしいよ！）

「どういうことだ！？吉井がそんな物を貰うなんて！」

「それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみろ！」

「ダメだ！腐りかけのパンしか出てこない！」

「もっとよく探せ！」

「・・・出てきたっ！未開封のパンだ！」

「お前は何を探しているんだ！？」

怒号が飛び交うFクラス。

クラスの殆どが嫉みに狂う光景が展開されていた。

「お前らっ！静かにしろ！」

・・・シン・・・

と、西村先生の一喝でクラスに静寂が舞い戻ってくる。

（明久：ふう、良かった・・・）

「それでは出欠確認を続けるぞ。」

出席簿を捲る音が教室内に響く。

「手塚。」

「吉井コロス。」

「藤堂。」

「吉井コロス。」

「戸沢。」

「吉井コロス。」

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕に蹴る殴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田。」

「吉井コロス。」

「布田。」

「吉井マジ殺す。」

「根岸。」

「吉井ブチ殺す。」

（明久：き、聞いてないし……。なんて悪い扱いなんだ！？）

明久はそんな状況に嘆いていた。

そんな横では……

『はあああああ……』

キラ・フェイト・なのは・アリシアが盛大に溜息をついていた。

「お前ら……四人とも全く一緒のタイミングで盛大に溜息つくとか……一体どうしたんだ……？」

雄二が四人に聞いた。

『実は・・・』

また同じタイミングで話し始める。

そして・・・

ドサッ！

四人の机の上には、通常では信じられないような量で手紙の山が築かれていた。

「・・・今日の、朝だけでか・・・？」

『今日の・・・朝で・・・』

「おい、この四人も手紙を貰っていたぞー。」

（明久：よし！こんな時に四人が・・・）

内心ほくそ笑んだ明久だったが・・・

『そんなことを気にしている暇はない！』

「どこまで団結いいんだよ皆はあ！」

クラスの殆どは気にしていなかった。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように。」

出席簿を閉じ、教室を後にしようとする西村先生。

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を皆殺しにしないで！」

保身のために、なりふり構わず西村先生を呼び止める明久。

「吉井、間違えるな。」

西村先生が扉に手を掛けたまま告げる。

「お前は不細工だ。」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように。」

「先生待つて！せんせーい！」

明久の叫びも空しく、西村先生は教室を出て行ってしまった。

これでもう、クラスに満ちる殺意に歯止めをかけるものはない。

「アキ、ちょーつと話を聞かせてもらえる？」

グワシ、と関節が外れてしまいそうな勢いで美波が明久の方を掴む。

「あ、あはは……。み、美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

愛嬌のある吊り眼がいつもより更に吊り上っている。トレードマー  
クのポニーテールが角に見えるほどに怖い表情だ。

「あー、えつと、その……。正直言って、咄嗟に隠した  
から手紙の内容なんて知らないよ……。ああーっ！早く一人にな  
って内容を確認したい！」

「いいからおとなしく指の骨を・・・じゃなくて、手紙を見せなさい。」

（明久：なんだ！？断れば僕の指の骨に一体何が起こるんだ！？）

「あの、吉井君・・・」

明久の後ろから、鈴を転がすような声が後ろから聞こえてきた。

「ん？なに？」

声の主は瑞希だった。

「その・・・できれば、ですけど・・・私にも手紙を見せて欲しいです・・・」

もじもじと困ったようにして頼む。

「その・・・ごめん。」

明久としては、そのお願いを聞き届けるわけにはいかないため、誠意を込めて謝った。



「でも、でも・・・」

それでも食い下がる瑞希。

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばかりは・・・」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです！」

「ちよつと待って！ 姫路さんまで僕に暴行を加えることが前提なの！？」

すっかり瑞希もFクラスに馴染んできたみたいだ・・・

「皆、ちよつと落ち着け。」

そんな中、パンパンとてを叩く音が教卓の方から聞こえてきた。

Fクラス代表であり、明久らの悪友でもある雄二の声だ。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない。」

雄二がクラスの面々に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

（明久：・・・さすが、腐っても友達は友達だな・・・）

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ。」

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！」

明久は荷物を引つ掴んで教室からダッシュで逃走。

「あのバカっ！一人で逃げたら速攻で殺されんだろうが！」

レオンがその後を追って教室から出て行った。

「逃がすなあっ！追撃隊を組織しろ！」

「手紙を奪え！吉井を殺せ！軍師には一切手を出すな！」

「サーチ&デス！」

「そこはせめてデストロイで！」

廊下に響いてくる声を聞いて、明久はFクラスは嫌な団結力を持ったクラスだと改めて実感した。

「明久っ！」

「レオン！？君も僕を殺しに来たの！？」

「そんなじゃない！今回は明久の味方だ！よく見ろ、武器なんて一切持ってないだろ！？」

「ありがとう！」

レオンが明久の味方に付いた。

「いたぞ！吉井だ！空き教室に向かったぞ！」

「了解だ！見逃さないように追ってくれ！こっちは全部隊に連絡を取る！」

「オーケー！B部隊は正面から、C部隊は逆側から回って挟み撃ちにするんだ！」

「応っ！」

廊下を走っていると背中越しにそんな会話が聞こえてくる。

「おいおい、たったこんな短時間で部隊編成を済ますとかさあ、ど  
んだけ無駄にスペックが高い連中なんだよ・・・」

「・・・だね。」

空き教室に逃げ込んだ二人。

「吉井！観念して手紙をよこせ！」

「一人だけ幸せになろうなんて甘いんだよ！」

目の前に五人のクラスメイトが立ち塞がる。

（レオン：・・・さっき聞こえてきた挟み撃ち部隊の連中かいな・・・）

後ろからも追っ手が来た。

このままでは逃げ場なくなる為、空き教室に逃げ込んだ二人。

「ちょっとここに水を撒いて・・・」

「何するつもりなの？」

「人間の丸焼きを作ろうってね。」

レオンが仕掛けを作った直後、敵は全員明久を追って教室に群がってきた。

教室に入ってくる瞬間、入り口が限られているために、お手は一所にかたまらざるをえないため、二人にとってチャンス以外の何物でもない。

そして最初の一人が教室に入った瞬間・・・

「うわっ!？」

一人目が転んで、将棋倒しが起こったかのように転んでいく。

「な、なにがあっただ!?」

「み、水だ! 慎重に進めばどうということはないぞ!」

一瞬戸惑うものの、すぐに次の行動に移ろうとする。

「（へっ！残念ながら手遅れなのさ！）アディオス、皆の集！保健室のベッドでくたばってな！」

「そ、それは・・・！」

「離れる！全員この水から離れる！」

「じゃ・・・死ね！」

床にぶち撒けられた水にレオンが電撃を放った。

『ぎゃああああああああつ！！』

悲鳴を上げて倒れていく面々。

その中では焦げ臭い香りがする・・・

「明久！もう電撃はないし、敵はいない！この教室を後にするぞ！」

「わ、わかった！」

「いざ、撤収！」

二人は教室を後にした。

「どこだ？確かにこっちに来たはずだが・・・」

「気をつける。きつと近くに潜んでいるぞ。」

「F部隊とG部隊もやられたらしい。あっちには軍師がいる、油断はするなよ。」

旧校舎の古書保管庫。その中で緊張した様子のFクラスの面々が囁き合っている。

怒涛の勢いでクラスメイトを撃破してきたせいか、随分と二人を警戒している。

「明久・・・。連中、背中を合わせて死角を潰してやがるぜい・・・」

「・・・動き辛いよ・・・」

「・・・おし、あの本棚まで一気に移動するよ。」

「み、見つからないかな・・・？」

「大丈夫。一気につて言っただじゃん・・・」

そう言ってレオンは姿が見られていないのを確認し・・・

「・・・Mode Change . Mode:BLITZ」

レオンが姿を変えた。

「それと・・・、『ミラージュコロイド』展開つと。」

そして、二人の姿が見えなくなった・・・

「これで普通に歩いても大丈夫。81分は普通にバレないから。」  
「そうなんだ・・・」

そして、本棚に到着。

「・・・えいつ。」

適当な本を一冊抜いて、二人が潜む場所とは対角の場所にこっそりと放り投げた。



バサッ。

「なんだ!？」

「吉井か!？」

案の定、音に反応して全員が同じ方向を見る。

ついに、死角が出来上がる。

「せえ・・・のっ!」

「・・・ぶるああああああああ!」

明久とレオンが一気に本棚に突進した。

「な・・・っ!」

「しまっ・・・」

倒れてくる本棚とは逆の方向に注意がそれていた彼らの反応は鈍い。

結果、全員が本棚の下敷きとなった。

「ハッハー！人の恋路を邪魔しようとするからそんな目に遭うのさ  
！」

脱出しようともがく連中を尻目に古書保管庫から退室する二人。

「おのれ吉井！裏切り者め！」

「覚えている！お前の幸せは必ずブチ壊す！」

「・・・本当、どこまで歪んだクラスメイトなんだろう・・・」

「・・・邪念に歪みつくした哀れなクラスメイトだよ・・・」

二人はとどめに外からモップを使って出入口を封鎖し、その上で痺れ罫を仕掛けた。罫の前には『近づかないでください。死にます』と書かれた立札を立てておいた。

「さてさて、残っている連中は・・・つとおおっ!？」

嫌な気配を感じて明久が飛びずさると、さっきまで明久が立ってい

た場所にボールペンやシャープが突き立っていた。

「誰だっ！」

「……裏切り者には、死を……」

「おいおい、ムッツリー二がここに来るかい？」

手に各種文房具を構え、康太が立っていた。

「ムッツリー二、覚悟！」

拳を固め、ダッシュをかける明久。

「……次はカッターを投げる。」

「よし。まずは話し合いをしようじゃないか。」

「……意思弱いなお前は。」

「……わかった。」

「それじゃ、まずはそっちの要求を聞かせて欲しい。」

聞かせて欲しいと入ったものの、二人にはその要求は分かっている。

「……こちらの要求は……」

康太が静かに要求を告げてくる。

「・・・・・・・・グロテスク。」

「待つて！それは既に僕が処刑される方法の話になっている！これほど難しい交渉をしたことないよ！？」

「・・・・・・・・交渉決裂。」

「くっ！やっぱりやるしかないのか！？」

構えられたカッターに意識を集中する明久。

「・・・・・・・・大丈夫、目は狙わない・・・・・・・・」

「ムツツリー」。それだけで安心できるほど僕はバカじゃないからね？」

「・・・・・・・・そう。」

ヒュッ。

風切り音を上げてカッターが飛んでくる。その目標は・・・

「僕の右目え！？う、嘘つきいいっ！！」

明久は咄嗟に手でカバーする。カッターは、かしゃつと軽い音をたてて床に落ちた。

（明久：え？刺さっていない？刃を出していなかった！？）

「・・・・・・・・隙あり。」

「っ！」

呆氣に取られる明久に、一瞬で肉薄した康太。

「ムツツリーニ！姫路さんの胸のサイズを知ってるか！」

咄嗟に身を守る為、康太の好むような話題を振る明久。

（明久：うまく食いついてくれ、ムツツリスケベ・・・・・・・・！）

「・・・・・・・・そんなものは、常識・・・・・・・・！」

（明久：ダメか！奴の注意を逸らせないのか！？というか、常識だったの！？僕は知らないよ！？）

「・・・・・・・・はあ。ムツツリーニよ。」

「・・・・・・・・（ピタッ）師。」

「僕とキラの住んでいる部屋のお隣さんの女の子の胸のサイズは知っているのかい？」

「・・・・・・・・っ！」

レオンが言ったことに動きを止めた康太。

「・・・・・・・・そんなこと、初耳だ・・・・・・・・っ！」

「教えて欲しければ・・・・・・・・」

「師よ、一体何をすればいい・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・食いつきが凄いな・・・・・・・・」

レオンの一言半句に完全に食いついている康太。いつもの間はなく、聞き返しが素早い。

「僕らを見逃してくれるならば、教えてやろう。」

「・・・・・・・・交渉成立。」

康太の買収は恐ろしいほどに簡単だった。

「それじゃ、僕たちは先に行くね。」

この場を立ち去ろうとする明久を康太が手で制する。

「・・・・・・・・護身用に。」

そう言いながら明久に小さな袋を渡した。

「護身用……？」

「……仲に刃物が入っている。いざという時に使うといい。」

（明久……正直、そんな簡単にはものって持ち歩くものじゃないと思う……。けど、今の僕にはありがたいよ。）

実際、まだ曲者連中が残っているのだ。

「ありがとう。困ったら使わせてもらおうよ。」

「……………（グッ）」

親指を立て、明久たちに背を向けようとした康太。

「さてムツツリー二よ。約定どおり、教えて進ぜよう……」

「師よ……！」

レオンが約定のことを言い出し、すかさず身を翻した康太。

「サイズは・・・ごによごによ・・・」

「・・・ッ！！！！（ブシャアアアアアアアアアアア！！！！）」

「ムツツリイニイイイイイイ！！！！」

レオンの呟きに鼻血の海に沈む康太、それに叫ぶ明久。

「・・・ムツツリー二のことは残念だけど、僕はこの手紙をどうにかして読まないといけないんだ。」

明久はさらに逃走をしようとする。

「・・・そうだ。下見を兼ねて屋上に行こう。」

「明久、屋上だったら告白定番スポットだよ？お前だったら絶対行くって思う野郎がいるはずだぜい？」

「大丈夫だよ。僕がそんな考えに辿り着くなんて思わないだろうか。」

「絶対いるから・・・」

二人はそうやって屋上に向かい始めた。



現在地・・・2階。

目的地に向かう階段を上ったその踊り場で・・・

「アキッ！レオン！見つけたわよ！」  
「げっ！美波！？」

明久の最大の天敵と遭遇。

「おおっ、一触即発の気配ってこっぴつことを言っただあゝ。」

ピリピリしている明久と違い、レオンはまだ能天気と言っている。

明久は全身を緊張させながら、階段の踊り場で美波の出方を見る。

そんな美波は意外にも落ち着いた足取りで明久に歩み寄り、こんな選択を迫ってきた。

「おとなしく手紙を渡して殺されるか、殺されてから手紙を奪われるか、好きな方を選びなさい。」

（明久：・・・おかしい。僕が生きている選択肢が見当たらないよ？）

「さあ・・・はやく。」

「どうしてそんなにこの手紙にこだわるのさ！美波には関係ないじゃないか！」

明久的にははつきり言って相手が悪い。説得で切り抜けようとする。

「ウチには関係ないって、酷い・・・！アキは本当にそう思っているの・・・？」

「え・・・？」

「うほっ！」

美波が急に傷ついたような表情になる。

それに啞然とする明久と、訳の分からない声を出すレオン。

「まさか、それって・・・」

「だって、今まで恥ずかしくて言えなかったけど、ウチはアンタの・  
・」

いつもと違ってしおらしい美波の様子に、何故か明久の鼓動が速くなる。

「アンタのせいで、『彼女にたくない女子ランキング』の三位になってるんだからあああつ！」

「さらばだつ！」

本能の赴くままに逃走行動へと移る明久。屋上を目指してはいたが、恐怖から逃れるために階段を三段飛ばしで駆け下りる。

「逃がすもんですか！人をこんな立場にしておきながら自分だけ幸せになるうなんて、そんなことは許さないわよ！」

「まだ上に二人いて良かったじゃないかつ！」

「いいわけないでしょう！？下には何人いると思っているのよ！」

「（えっと、二年生は全員で三百人くらいだから・・・）ざっと百五十人くらい？」

「ひやくご・・・？どうしてくれんのよっ！責任とりなさい！」

「責任つて言われても！」

「とにかく、まずは手紙を渡しなさい！」

「嫌だ！絶対破かれるから！」

「そんなことしないわ！再発防止のためにコピーを取って校内にはら撒くだけ！」

「そっちの方が酷い！」

明久は本気で走っているのにも係わらず全然引き離せないことに焦っていた。

「ところで美波、階段を走っていてわかったんだけど！」

「なによ！」

「今日は白なんだねっ！」

「なっ・・・！！／＼／」

立ち止まり、スカートの裾を抑える美波。

（明久：バカめ！こんな状態で見ると余裕なんてあるわけないじゃないか！）

（レオン：明久、嘘言って時間稼ぎするつもりだね・・・？）

「おおおおっ！」

その隙に一気に距離を稼いでいく。

階段ダッシュが終わり、今度は廊下を駆け抜ける。

空き教室に逃げ込んだ。

「アキいつ！よくも騙してくれたわね！／＼／」

「やばいつ！もう追いついた！？」

「今日はライトグリーンなんだから！白が見えるわけないでしょうが！／＼／」

「美波さあ、わざわざ教えてくれなくてもいいのに・・・」

「あつ・・・！／＼／」

レオンの指摘を受けて赤面する美波。

「隙ありっ！」

「きゃっ！」

動揺する美波の背中を押し、教室の隅に追いやる明久。

「どおおおおっせいいいいいっ!」

教室の後ろに設置されている生徒用ロッカーを用い、レオンがバリケードを作った。

「こ、こらっ! 卑怯よ! 出さない!」

ガンガンと美波がロッカーを叩く音が響く。

女の子の力じゃ、こんな物は動かせるわけがない。

(明久: よっしゃあ! 美波の無力化成功!)

再び廊下へ舞い戻る明久とレオン。

もう少し、もう少しでこの手紙が読め、後から訪れるであろう幸せを想像していた明久は、屋上へと向かう足取りは自然と軽くなっていた。

そして、二階を通過して三階の廊下。

「吉井、待っていたぞ。」

須川が立っていた。

「須川君。君まで僕の邪魔をするのかい？」

「もちろんだ。吉井にはここで死んでもらう。」

そう告げて、須川は背中から何かを取り出した。

「ぼ、木刀・・・」

「剣道部から借りてきたんだ。吉井を止めるためになっ！」  
「うわっ！とつと・・・！」

突然須川に切りかかれた明久。寸止めではなく、完全に振り切られる木刀。

それを何とか横に跳んで避ける明久。

「吉井、手紙を渡すんだ。」  
「くっ・・・」

明久は思わず唇を噛む。

（明久：まさか、武器まで持ち出してくるなんて・・・）  
（レオン：・・・武器・・・？）

レオンが突如何かを閃いた。

「明久！アンタも武器を持っているだろうが！」  
「そっか！アレがあつた！」

康太が渡してくれた小さな袋を、ポケットから取り出す。



「くっ！丸腰じゃなかったのか！」

自分の優位性が消え、焦り始める須川。

「よし！これで勝負は五分五分だ！」

「くそっ！俺はまだ負けたわけじゃない！」

須川が木刀を振り下ろすが・・・

「甘いっ！」

半歩横にステップして紙一重で回避する明久。

目の前には木刀を振り切つて無防備な須川が。

このタイミングを逃さず、持っていた爪切りで須川を・・・

「って、爪切りで勝てるわけじゃないじゃないかバカあつ！」

思わず爪切りを叩きつける明久。

「・・・吉井、お前って・・・本当にバカだなあ・・・」  
「須川三等兵・・・。たった今君がモテない理由がわかったよ・・・」  
「なっ!？」

レオンの発言に驚く須川。

「君がモテないのは・・・その行動全てに原因がある!」  
「がっ・・・、そんな・・・」

膝から崩れ落ちる須川。

「明久!行くよ!さっさと逃げて、手紙を読むんだろ!？」  
「そ、そうだった!」

明久たちは、崩れ落ちたままの須川を置いて、屋上に向かって行った。

四階の廊下を越えて、階段を昇って行けば・・・

「やはりここまで来たか、明久。」

「吉井君、言うことを聞いてください。」

「雄二に姫路さん・・・!」

屋上続く階段、その前に立つのはラスボスの雄二と瑞希。

「どうして僕らがここに来ると?」

「屋上はこの学校の告白スポットだからな。単純なお前ならレオンの意見を無視してここに来ると思っていた。」

（明久：くそつ。流石は雄二だ。僕の思考を完全に読んでいるなんて・・・）

「トイレにでも行けば、誰にも邪魔されずに読めるはずなんだがな・・・」

「ごめん雄二。僕、ちょっとお腹が痛いから先にトイレに行ってくるね。」

「吉井君、ずっと気がつかないんですか・・・?」

瑞希が心配そうな目で明久を見ている。

「（その視線は耐え難い！）・・・雄二、どうしてもそこまで僕の邪魔をするのさ！そんなことをしても、雄二にとってメリットは何もないはずなのに！」

明久の真剣な質問を受け、雄二も真剣な顔で答え始めた。

「そうだな。確かにお前の言う通り、こんな行動に俺にとって何のメリットもない。いや、それ以上に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない。」

「だったら、どうして・・・？」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粹に・・・」

迷いの無い目で雄二が言葉を紡ぐ。

「お前の幸せがムカつくんだよ。」

「アンタは最低の友達だ！そもそも友達かどうかも疑わしいよ！」

「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねえ。本気がかかってこい。」

雄二は学生服の上着を脱ぎ、ネクタイを外した。

「姫路。上着を持っていてくれるか？」  
「あ、はい。」

瑞希に上着を渡して身軽になった雄二は構えを取って軽くシャドーをして見せた。

（明久：あの野郎・・・、本当に僕を殺るつもりだ・・・！）

「吉井君、止めておいた方が・・・」

瑞希が近くに来て明久の表情を窺っている。

「心配ありがとう。けど、僕はやめる気なんてないから。」

「そうですか・・・分かりました。もう止めません。」

「・・・ごめん。心配してくれたのに。」

「いえ・・・。なんだか吉井君らしいです。」

「僕らしい？・・・っと。これ、僕のも「待ちいや明久！僕に渡せ！」「レオン！？」」

明久が瑞希に渡そうとした上着を瑞希が受け取る前に搔っ攫っ。

「レオン・・・」

「僕が先に中身を見ちやる。」

「酷いよ！さすがにそれは酷過ぎるよ！」

「中身は何かな？と。・・・おおう・・・完全に・・・。瑞希、破りたい？」

「もつと酷い！」

「・・・あれ？こ、これってまさか・・・？」

瑞希は手紙を渡され戸惑っていた。

「姫路さん。」

「えっ！？あ、はい。なんですか？」

「僕にはわかってるよ。優しい姫路さんは手紙にこめられた人の気持ちを踏みにじることなんてできないってこと。だから、おとなしく・・・」

「手紙を細切れにするんだ。」

「違うっ！そうじゃない！雄二、卑怯だぞ！そうやって僕の台詞みたいにつなぐのは反則だ！」

「はいっ！わかりました！」

「いや、『はいっ！』じゃないよ姫路さんってああああっ！そんなに丁寧に手紙を裂かなくても！それじゃあもう絶対読めないよね！？返してっ！僕の幸せな未来と大切なラブレターとちよつと前の台詞を返してえっ！」

叫んでいる間にも破られていく手紙。それはもう既に原形を全く留めずに、紙クズという名前で廊下中に散らばっていた。

「・・・まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった。・・・すま

ん、明久。」

雄二が驚いた様子で瑞希を見て、その後明久に謝った。

驚いたのは明久もレオンも一緒だ。

そんなことは絶対しない子だと思っていたのだから。

「せめてものわびだ。」

そう言って廊下中に散らばった紙クズを集めて持ってきてくれる雄二。

「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせ」・・・未練を絶ってやる。(シュボツ・・・メラメラメラ・・・)「ああ、暖かい・・・。まるで僕の凍てついた心を溶かしてくれるような炎だよ・・・ってうそおっ!?ここまでやった挙句、容赦なく燃やすの!?もうこれ100パー読めないよね!?僕の幸せな未来はどこへ行っただの!?!」

「明久。お前は知らなかっただろうが「なに!?なんでもいいから早く水を持って来て!」俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ。」

「知ってるよバカ!ちくしょー!」

明久の必死の消火活動も空しく、手紙は綺麗サッパリ灰になってしまった。

「坂本君は手紙の主が誰だか気にならないんですか？」

灰になった手紙を見て、何故か安心したかのような声で瑞希が雄二に話しかけている。

「全然興味がないな。俺は明久の幸せを妨害できたらそれでいい。もつとも・・・」

「は、はい。なんですか？」

「誰からの手紙だか、目星はついたかな。」

「え・・・っ!？」

「確かに、他人の書いた手紙を破り捨てたら問題があるよな？」

「そ、それは、その・・・!」

「雄二! その話、もつと詳しく」「ああ吉井君は聞いちゃダメですっ!」「こぺっ!？」

「・・・姫路。明久の首が真後ろを向いているぞ。」

「ご、ごめんなさいっ! 私、大変なことを!」

「まあ気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだからな。」

朦朧とした意識の中、雄二の示した方向に耳を傾ける明久。

<アゝキゝゝゝゝゝ! アンタよくもやってくれたわねゝゝゝ! >



< 吉井 い い つ ! 絶対殺す う つ ! >  
《 ガン ホー ! ガン ホー ! 》

( 明久 : . . . 願わくは、無事明日の太陽が拝めんことを . . . )

( 瑞希 : . . . まさか、おとしちゃったと思つてた手紙が吉井君の靴箱に入っていたなんて . . . ! きつと拾つた人は親切でやつてくれたんだろうけど . . . 。私のせいで酷い目に遭わせてごめんなさい、吉井君。でも、前に吉井君が言ってくれたように、この気持ちは手紙じゃなくて . . . 直接伝えたいから。

だからもう少しだけ . . .

待っていて下さい。  
)

次回、番外編「バンドの予選のボーカル組の奇策」

番外編 「明久と暴徒とラブレター」(後書き)

今回、小説3・5巻の『僕と暴徒とラブレター』を基にしています。

色々ややこしいところがありましたが、どうにか・・・

そして、なんと10000文字越え・・・

今回はボーカル組が・・・？

楽しみに！

番外編 「バンドの予選のボーカル組の奇策」(前書き)

凄く更新遅れてしまいませんでした！

かなり突貫工事的な今回は一応奇策です！

番外編 「バンドの予選のボーカル組の奇策」

「・・・どうしよう・・・」

明久が暴徒に殺されかけたその日の放課後、レインは音楽室で悩んでいた。

「レイン、どうしたんだい？」

「レオンかぁ・・・。いやさ、実は・・・」

レインはレオンに悩みを告げた。

最後の一曲をどうしようか、ということをして・・・

「・・・そう言えば最後の一曲、決めてなかったよね・・・」  
「でしょ？だからそれで困ってて・・・」

二人がそう話していたら、音楽室の扉が開いた。

「二人とも早いね。一緒にクラスなのになんでこんなに違うのかなあ？」

天和が来た。

「ああ、天ちゃんか・・・」

「・・・なんか、お葬式ムード？」

「そんなわけあるかい！」

「お葬式って・・・」

雰囲気が一気に吹き飛んだ。

「でさ、一体何の話だったの？」

「最後の一曲を決めていなかったってこと・・・」

「ああ、そゆことか。それなら私とフェイトちゃんて話し合っ  
て決めたことがあるんだけど・・・」

「何それ？聞いてないよ？」

「だって、皆に内緒で決めたもん。フェイトちゃんはしぶしぶ  
だけどね。」

（レオン：天和・・・、無理やり押しきったな・・・）

「私には無理かもしれないけど、フェイトちゃんの方が予選を切り抜ける歌う力があるからね。」

「そうは思わないけどさ……。それで？何を決めたの？」

「それはね……。あー、皆が来てから言うね。」

「何その焦らし！？めっちゃ気になってうずうずしちゃうんだけど！？」

『皆が来てから言う』という天和にレオンは軽く暴走状態になる。

「お前は落ち着け！」

「へぶっ！」

結局レオンに制止させられ暴走は終了。



数分後、メンバー全員が揃った。

「それで、予選最後の曲を全く考えてなかった、という事態になっちゃって……」

「レイン……しっかりしろよ……」

「あはは……」

レインの自白に焰は半ば呆れ気味にいい、キラは苦笑い。

「で、天ちゃんとフェイトが最後の曲を決めてくれたらしいんだけど……」

「はあ……」

「大丈夫だつて！フェイトちゃんならできるから！」

片隅で落ち込むフェイトを励ます天和。

「つかフェイトがそうなる理由って天和じゃないの？」

事情を知るレオンはそうばやいた。

「天ちゃん、とにかく何を決めたか言ってくれない？」

「え？あ、うん！えっとね、最後の曲は・・・、フェイトちゃんにソロで歌ってもらう、って決めたの！」

『えっ！？』

天和が投下した爆弾発言。

全員が驚かない訳がない。

「それで、一応候補に挙げた曲が・・・」

「ちょ、ちょちょちょ、ちょっと待って？フェイトがソロ？」

「そだよ？」

話を続ける天和に話を切る勢いでレオンが話を持ちかけた。

「だ、だってさ？フェイトのソロは隠し玉だよ！？一気に暴露していいの！？」

レオンが焦るのも無理はない。

フェイトの歌唱力はそれ程なのだ。

「・・・いや、むしろ隠し玉として扱わない方がいいかも？それで、予選通過できればもっと聞かせられると訴えれば・・・！」

「お、おお、レインが策士の顔になった・・・」

焰が驚きを隠せないといった言葉を発した。

「OK、それで行こう！というかそっちの方がいい！それで曲は！？」

「うええ！？え、えっと、候補を決めたただけなんだけど・・・、」  
PHANTOM MINDS』に・・・」

急にぐぐつと顔を近づけたレインに驚いてしまい変な悲鳴を上げてしまったものの、それでも候補を伝えた天和。

「『PHANTOM MINDS』・・・ね・・・」

「あり・・・だな。」

「問題は何もないし・・・、あれはフェイトちゃんしか歌えないだろうし・・・」

上からレオン・焰・キラ。

が、キラが言った瞬間。

「私、ソ口頑張る！絶対！」

フェイトが覚醒した。

「・・・今まであんな鬱状態だったのにキラが言った瞬間あんなに覚醒するとかないよ普通は・・・。恋は盲目、という話じゃないって・・・」

レオンはこんな突っ込みをした・・・

「あ、バンド名は『LIGHTNING』に勝手にしたけど・・・、よかった?」

レインは恐る恐る全員に聞いたが・・・

「俺達のリーダーが決めたもの、文句なんか言えるかよ?」

「そうそう。それでも十分いいと思うよ?」

「そっか・・・、皆、ありがとう!」

そして、『LIGHTNING』の練習が本格的に始まった・・・

次回、番外編『予選会！』

番外編 「バンドの予選のボーカル組の奇策」 (後書き)

最後がやけに『けいおん!』風味なのは気にしないでください。  
次回はガチ予選やります! が、連載をかなり抱え込んでしまった  
ため、不定期更新になりますのでご了承ください・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9986j/>

---

バカとクロスとつたなき物語

2011年8月3日21時17分発行